愛媛大学埋蔵文化財調査報告　XX

文京遺跡 VI

－文京遺跡25次調査－

愛媛大学 埋蔵 財団図書館

愛媛大学埋蔵文化財調査室

２００９

愛媛大学埋蔵文化財調査報告　XX

文京遺跡 VI

－文京遺跡25次調査－

愛媛大学埋蔵文化財調査室

２００９

１　Ⅱ - 2 - ④層（中層水田）完掘（東から）

２　Ⅱ - 2 - ④層（中層水田）完掘（南西から）

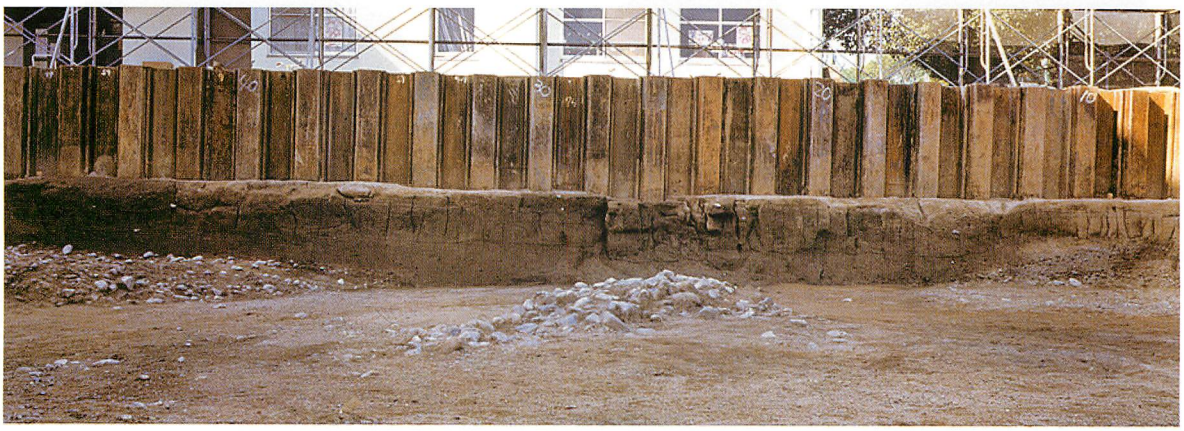
巻頭図版２

１　Ⅱ - 2 - ⑥層（下層水田）完掘（東から）

２　Ⅱ - 2 - ⑥層（下層水田）完掘（南西から）

1　SR-301完掘（東から）

2　調査区東壁土層（西から）

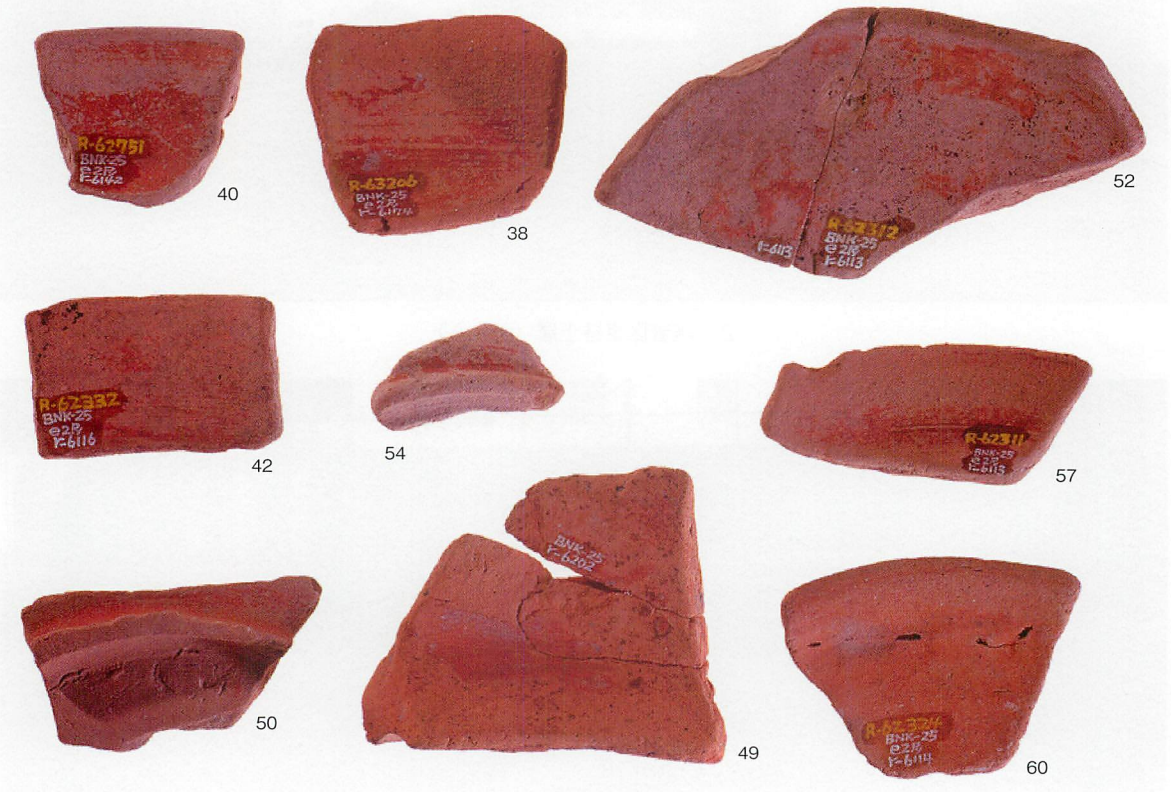


3　調査区西壁土層（東から）

巻頭図版４

1　SR-301-①層出土奈良二彩

3　SR-301-③層出土須恵器硯



2　SR-301-③層出土赤彩土師器

序　文

愛媛大学は、松山市および愛媛県内各所に大小のキャンパスをもち、敷地総面積は464ヘクタールに及び、本部事務局と４つの学部が所在する城北団地には文京遺跡、農学部と附属高等学校がある樽味団地には樽味遺跡、国際交流会館がある鷹子団地では鷹子遺跡、教職員宿舎のある北吉井団地では桑原西稲葉遺跡など、数多くの遺跡をかかえている。これに対し愛媛大学では、1987年に愛媛大学埋蔵文化財調査委員会の指導に基づいて埋蔵文化財調査室を設立し、埋蔵文化財の保護に努めてきた。中でも、城北団地に所在する文京遺跡は、2008（平成20）年度までに、37次にわたる全面調査が実施され、弥生時代における西日本屈指の大集落であることが判明してきている。

本書で報告する文京遺跡25次調査は、2002年度に実施した情報教育棟（現総合情報メディアセンター）建設に伴う発掘調査である。調査地点は、既に報告した文京遺跡18次調査（総合情報処理センター新営工事に伴う調査）の北に隣接し、一連の水田遺構の広がりを確認した。また、開田以前の自然流路からは、縄文時代から古代に及ぶ大量の遺物が出土し、城北キャンパス周辺での連続的な生活を知ることができた。とりわけ古代の遺物には、赤彩土師器や奈良二彩、硯、緑釉陶器、そして瓦などがあり、近傍における官衙関連施設あるいは古代寺院の存在を想定させる。

重要な調査成果があげられながらも、報告書刊行にいたるのに６年以上の月日を要した。その後も連続して実施された校舎建築に伴う発掘調査が優先されたためであり、調査後の整理作業は断続的とならざるを得なかった。そこで、施設基盤部と協議し、中期的な整理計画を策定して整理体制の強化を図り、報告書刊行を進めることとした。校舎建築あるいは改修工事に伴う調査がなお続く中で、今回ようやく文京遺跡25次調査の正式報告書を刊行することができた。

発掘調査から記録・遺物類の整理、そして報告書の刊行にいたるまでには、多くの方々から協力を得た。それらの方々に深く感謝するとともに、本書が多くの人々に利用・活用されることを祈念します。

2009年１月31日

愛媛大学埋蔵文化財調査室

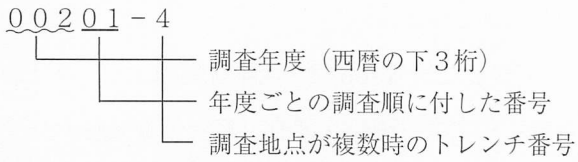
室長　田崎　博之

例　言

1　本書は、愛媛大学埋蔵文化財調査室が2002年度に実施した文京遺跡25次調査の報告書である。

2　愛媛大学埋蔵文化財調査室では、これまで文京遺跡について、８・９・11次調査、10次調査、13次調査、20・23次調査、そして18次調査の報告書を刊行している。本書が６冊目の報告書となることから、『文京遺跡Ⅵ』とした。また同時に、愛媛大学埋蔵文化財調査報告ＸＸにあたる。

3　埋蔵文化財調査室では、本格全面調査･構内遺跡確認調査については、遺跡ごとに調査次数を付しているが、同時に、1975年から始まった大学構内の発掘調査まで遡って、立会・試掘形式の小規模調査も含めて、すべての調査に調査番号を与えている。調査番号は、西暦の下３桁の後に各年度ごとの調査順に01からの２桁の通し番号を加えた５桁の番号で表示している。調査番号に加えて､複数の地点(トレンチ)を調査した場合、－の後に地点番号を付して表示している。



4　本書では、遺構番号に冠して、水田：SS、溝：SD、土壙：SK、自然流路：SR、柵列：SA、柱穴・小穴：SP、その他の遺構：SX の記号で遺構の種別を表している。

5　本書で表示した座標・標高・方位は、日本測地系（Tokyo Datum）平面直角座標系Ⅳ系にしたがった。

6　土層･遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1967) に準拠している。

7　本書に使用した遺構図は、吉田広・三吉秀充が作成し、製図を吉田・三吉・宮崎直栄が行った。

8　本書に使用した遺物図は、吉田・三吉・濱田美加が作成した。分担は、SR-301-②層出土遺物と SR-301-③層出土弥生土器の一部を吉田が行い、SR-301-③層出土縄文土器を三吉が担当した他は、濱田による。遺物図の製図は、縮尺１／３を基本とし、宮崎が行った。

9　本書で使用した発掘調査時の写真は、吉田・三吉が撮影した。

10　本書で使用した遺物の写真は、吉田・濱田が撮影した。

11　本書の作成にあたっては、今田秀樹・幸泉満夫・小山仁之輔・柴田圭子・三好修一・山内英樹の諸氏からご協力いただいた。

12　本書の執筆は、三吉・濱田が実測を担当した遺物の記述と観察表作成を行った他は、吉田が行った。

13　本書の編集は、田崎博之の指導のもとに、三吉･宮崎･濱田･須之内慶子の協力を得ながら、吉田が行った。

14　本書に報告した調査に関わる記録類・出土遺物は、愛媛大学埋蔵文化財調査室において保管している。

目　次

序　説……1
1　発掘調査の体制と経過……1
(1)　調査にいたる経緯……1
(2)　発掘調査の体制……1
(3)　発掘調査の経過……3
2　整理作業の経過と体制……5
(1)　整理作業の経過……5
(2)　整理作業の体制……5
3　整理の方法……6
(1)　出土情報の登録……6
(2)　遺物の登録……6
(3)　遺物の保管……7
(4)　記録類の保管……7

Ⅰ　位置と環境……8
1　文京遺跡の位置と環境……8
2　周辺の既往調査……9
3　文京遺跡の基本層序……16
4　文京遺跡の区割……17

Ⅱ　調査の記録……19
1　調査の概要……19
(1)　土層の堆積状況……19
(2)　遺構と遺物……25
2　Ⅱ-1層と出土遺物……30
3　Ⅱ-2-①層（上層水田覆土）と出土遺物……32
(1)　Ⅱ-2-①層上部出土遺物……32
(2)　Ⅱ-2-①層下部出土遺物……34
(3)　Ⅱ-2-①層出土石器・鉄器……36
(4)　小結……36
4　Ⅱ-2-②層（上層水田）の遺構と出土遺物……36
(1)　遺構……36
①　水田……38
SS-001 (38)　SS-002 (38)　SS-003 (38)　SS-004 (38)　SS-012 (38)　SS-011 (38)　SS-010 (41)
SS-009 (41)　SS-006 (41)　SS-007 (41)　SS-013 (41)　SS-014 (43)　SS-015 (43)　SS-017 (43)
SS-024 (43)　SS-025 (44)　SS-026 (44)　SS-027 (44)　SS-028 (44)　SS-031 (44)　SS-045 (45)
SS-046 (45)　SS-047 (45)　SS-048 (45)　SS-032 (46)　SS-033 (46)　SS-034 (46)　SS-035 (46)
SS-038 (46)　SS-037 (47)　SS-036 (48)　SS-039 (48)　SS-049 (48)　SS-040 (48)　SS-043 (48)
SS-042 (49)

② 溝 ……49
SD-005（49） SD-023（49） SD-044（49） SD-021（49） SD-041（50）
(2) 出土遺物……50
① 溝（a1層）出土の遺物……50
② 畦畔部（a2層）出土の遺物……51
③ 耕作土（a3・4層）出土の遺物……51
(3) 小結 ……54
5 Ⅱ-2-③層（中層水田覆土）と出土遺物……54
(1) Ⅱ-2-③層上部出土遺物……54
(2) Ⅱ-2-③層下部出土遺物……55
(3) Ⅱ-2-③層出土石器・鉄器……57
(4) 小結 ……57
6 Ⅱ-2-④層（中層水田）の遺構と出土遺物……57
(1) 遺構……57
① 水田 ……57
SS-101（57） SS-102（58） SS-103（61） SS-104（61） SS-105（61） SS-106（61） SS-107（61）
SS-133（63） SS-108（63） SS-109（63） SS-110（63） SS-111（64） SS-112（64） SS-113（64）
SS-114（65） SS-137（65） SS-134（65） SS-115（65） SS-116（65） SS-117（65） SS-118（66）
SS-119（66） SS-120（66） SS-121（66） SS-138（68） SS-135（68） SS-122（68） SS-123（68）
SS-124（68） SS-125（68） SS-126（69） SS-127（69） SS-128（69） SS-139（69） SS-136（69）
SS-129（69）
(2) 出土遺物……69
① 畦畔部（b2層）出土の遺物……69
② 耕作土・床土（b3・4層）出土の遺物……70
(3) 小結 ……76
7 Ⅱ-2-④層とⅡ-2-⑤層の間の遺構と出土遺物 ……76
(1) 遺構 ……76
(2) 出土遺物 ……78
8 Ⅱ-2-⑤層（下層水田覆土）と出土遺物……78
(1) Ⅱ-2-⑤層上部出土遺物……78
(2) Ⅱ-2-⑤層下部出土遺物……78
(3) Ⅱ-2-⑤層出土石器……79
(4) 小結 ……81
9 Ⅱ-2-⑥層（下層水田）の遺構と出土遺物……82
(1) 遺構 ……82
① 水田ほか ……83
SS-201（83） SS-202（84） SS-203（84） SS-204（84） SS-205（84） SS-206（84） SX-207（87）
SS-208（87） SX-209（88） SS-210（88） SS-212（88） SS-213（88） SS-214（89） SS-215（89）
SS-216（89） SS-217（89） SS-218（89） SS-219（90） SS-220（90） SS-221（91） SS-222（91）
SS-223（91） SS-224（91） SS-225（92） SS-226（92） SS-227（92） SS-228（94） SS-229（94）
SS-230（94） SS-231（94） SS-232（94） SS-233（94） SS-234（94）
② 溝 ……95
SD-211（95）

(2) 出土遺物 ……95
① 畦畔部（c2層）出土の遺物 ……95
② 耕作土（c3・4層）出土の遺物 ……96
(3) 小結 ……99
10 Ⅱ層下の遺構と出土遺物……101
(1) 遺構 ……102
(2) 出土遺物 ……102
① SR-301-①層（d層）の出土遺物……102
古代の土師器・黒色土器（105） 須恵器（108） 灰釉陶器（109） 奈良二彩（109） 瓦（109）
古墳時代の土師器（109） 弥生土器（109） 石器（112）
② SR-301-②層（e1層）の出土遺物 ……112
古代の土師器・黒色土器（116） 須恵器（118） 瓦（118） 古墳時代の土師器（119）
弥生土器（119） 縄文土器（123） 土製品（123） 石器（123） 鉄器（123）
③ SR-301-③層（e2層）の出土遺物……123
古代の土師器（123） 須恵器（132） 瓦（145） 古墳時代の土師器（149） 弥生土器（149）
縄文土器（169） 土製品（169） 石器（172） 鉄器（173）
④ SR-301-④層（e3層）の出土遺物 ……173
(3) 小結 ……189
11 その他の出土遺物 ……190

Ⅲ 調査のまとめ……194
1 遺構の変遷……194
(1) 遺構の変遷 ……196
(2) 遺構の時期 ……197
2 出土遺物……200
(1) 縄文時代の遺物……200
(2) 弥生時代の遺物……200
(3) 古墳時代の遺物……200
(4) 古代の遺物 ……201

図版

報告書抄録

巻頭図版目次

巻頭図版１
　１　Ⅱ - 2 - ④層（中層水田）完掘（東から）
　２　Ⅱ - 2 - ④層（中層水田）完掘（南西から）
巻頭図版２
　１　Ⅱ - 2 - ⑥層（下層水田）完掘（東から）
　２　Ⅱ - 2 - ⑥層（下層水田）完掘（南西から）
巻頭図版３
　１　SR-301完掘（東から）
　２　調査区東壁土層（西から）
　３　調査区西壁土層（東から）
巻頭図版４
　１　SR-301- ①層出土奈良二彩
　２　SR-301- ③層出土赤彩土師器
　３　SR-301- ③層出土須恵器硯

図版目次

図版１
　１　表土掘削後全景（南東から）
　２　表土掘削後遠景（東から）
図版２
　１　Ⅱ - 2 - ②層（上層水田）完掘（東から）
　２　Ⅱ - 2 - ②層（上層水田）完掘（西から）
図版３
　１　Ⅱ - 2 - ②層（上層水田）完掘（北東から）
　２　SS-011足跡検出（北西から）
　３　SD-041（南から）
図版４
　１　Ⅱ - 2 - ④層（中層水田）完掘（東から）
　２　Ⅱ - 2 - ④層（中層水田）完掘（西から）
図版５
　１　Ⅱ - 2 - ④層（中層水田）完掘（北東から）
　２　Ⅱ - 2 - ④層（中層水田）完掘（南西から）
　３　SD-150（東から）
図版６
　１　Ⅱ - 2 - ⑥層（下層水田）完掘（南西から）
図版７
　１　Ⅱ - 2 - ⑥層（下層水田）完掘（東から）
　２　Ⅱ - 2 - ⑥層（下層水田）完掘（西から）
図版８
　１　Ⅱ - 2 - ⑥層（下層水田）完掘（北東から）
　２　SD-211（南から）
図版９
　１　Ⅱ - 2 - ⑥層以下の堆積状況（西から）
　２　SR-301- ③層（DU49区）遺物出土状況
　　（南東から）
図版10
　１　SR-301完掘（東から）
　２　SR-301完掘（西から）
図版11
　１　SR-301完掘（北東から）
　２　調査区北壁中央部土層（南から）
図版12
　１　完掘全景（北東から）
　２　完掘全景（西から）
図版13
　１　Ⅱ - １層出土遺物１
　２　Ⅱ - １層出土遺物２
　３　Ⅱ - 2 - ①層上部出土遺物
　４　Ⅱ - 2 - ①層下部出土遺物
　５　Ⅱ - 2 - ①層出土石器
　６　Ⅱ - 2 - ②層溝出土遺物
　７　Ⅱ - 2 - ②層畦畔部出土遺物
　８　Ⅱ - 2 - ②層耕作土出土遺物
　９　Ⅱ - 2 - ③層下部出土遺物
図版14
　１　Ⅱ - 2 - ③層出土石器
　２　Ⅱ - 2 - ④層畦畔部出土遺物
　３　Ⅱ - 2 - ④層耕作土出土遺物１－土師器－
　４　Ⅱ - 2 - ④層耕作土出土遺物２－黒色土器－
　５　Ⅱ - 2 - ④層耕作土出土遺物３－瓦器－
　６　Ⅱ - 2 - ④層耕作土出土遺物４－陶磁器１－

7　Ⅱ-2-④層耕作土出土遺物５－陶磁器２－
8　Ⅱ-2-④層耕作土出土遺物６－陶磁器３－
図版15
1　Ⅱ-2-④層耕作土出土石器１
2　Ⅱ-2-④層耕作土出土石器２
3　Ⅱ-2-⑤層上部出土遺物１－土師器１－
4　Ⅱ-2-⑤層上部出土遺物２－土師器２－
5　Ⅱ-2-⑤層上部出土遺物３－瓦器－
6　Ⅱ-2-⑤層下部出土遺物
7　Ⅱ-2-⑤層出土石器
図版16
1　Ⅱ-2-⑥層耕作土出土遺物１
－土師器・瓦器－
2　Ⅱ-2-⑥層耕作土出土遺物２－黒色土器－
3　Ⅱ-2-⑥層耕作土出土遺物３－緑釉陶器－
4　Ⅱ-2-⑥層耕作土出土遺物４
－土師器・弥生土器－
5　Ⅱ-2-⑥層耕作土出土石器１
6　Ⅱ-2-⑥層耕作土出土石器２
7　Ⅱ-2-⑥層耕作土出土石器３
8　Ⅱ-2-⑥層耕作土出土石器４
図版17
1　SR-301-①層出土遺物１－土師器・黒色土器－
2　SR-301-①層出土遺物２－須恵器－
3　SR-301-①層出土遺物３－灰釉陶器－
4　SR-301-①層出土遺物４－土師器－
5　SR-301-①層出土遺物５－弥生土器－
6　SR-301-①層出土遺物６－石器１－
7　SR-301-①層出土遺物７－石器２－
8　SR-301-①層出土遺物８－石器３－
9　SR-301-①層出土遺物９－石器４－
図版18
1　SR-301-②層出土遺物１－黒色土器－
2　SR-301-②層出土遺物２－須恵器－
3　SR-301-②層出土遺物３－土師器－
4　SR-301-②層出土遺物４－弥生土器１－
5　SR-301-②層出土遺物５－弥生土器２－
6　SR-301-②層出土遺物６－縄文土器－
7　SR-301-②層出土遺物７－土製品－
8　SR-301-②層出土遺物８－石器－
図版19
1　SR-301-③層出土遺物１－土師器１－
2　SR-301-③層出土遺物２－土師器２－
3　SR-301-③層出土遺物３－土師器３－
4　SR-301-③層出土遺物４－須恵器１－
5　SR-301-③層出土遺物５－須恵器２－
6　SR-301-③層出土遺物６－須恵器３－
7　SR-301-③層出土遺物７－須恵器４－
8　SR-301-③層出土遺物８－須恵器５－
9　SR-301-③層出土遺物９－須恵器６－
図版20
1　SR-301-③層出土遺物10－須恵器７－
2　SR-301-③層出土遺物11－須恵器８－
3　SR-301-③層出土遺物12－須恵器９－
4　SR-301-③層出土遺物13－須恵器10－
5　SR-301-③層出土遺物14－須恵器11－
6　SR-301-③層出土遺物15－須恵器12－
7　SR-301-③層出土遺物16－瓦－
8　SR-301-③層出土遺物17－古墳土師器－
図版21
1　SR-301-③層出土遺物18－弥生土器１－
2　SR-301-③層出土遺物19－弥生土器２－
3　SR-301-③層出土遺物20－弥生土器３－
4　SR-301-③層出土遺物21－弥生土器４－
5　SR-301-③層出土遺物22－弥生土器５－
6　SR-301-③層出土遺物23－弥生土器６－
7　SR-301-③層出土遺物24－弥生土器７－
8　SR-301-③層出土遺物25－弥生土器８－
図版22
1　SR-301-③層出土遺物26－弥生土器９－
2　SR-301-③層出土遺物27－弥生土器10－
3　SR-301-③層出土遺物28－弥生土器11－
4　SR-301-③層出土遺物29－弥生土器12－
5　SR-301-③層出土遺物30－弥生土器13－
6　SR-301-③層出土遺物31－弥生土器14－
7　SR-301-③層出土遺物32－弥生土器15－
8　SR-301-③層出土遺物33－弥生土器16－
9　SR-301-③層出土遺物34－弥生土器17－
図版23
1　SR-301-③層出土遺物35－弥生土器18－
2　SR-301-③層出土遺物36－縄文土器１－
3　SR-301-③層出土遺物37－縄文土器２－
4　SR-301-③層出土遺物38－縄文土器３－
5　SR-301-③層出土遺物39－縄文土器４－
6　SR-301-③層出土遺物40－縄文土器５－
7　SR-301-③層出土遺物41－縄文土器６－

図版24
1　SR-301-③層出土遺物42－石器１－
2　SR-301-③層出土遺物43－石器２－
3　SR-301-③層出土遺物44－石器３－
4　SR-301-③層出土遺物45－石器４－
5　SR-301-③層出土遺物46－石器５－
6　SR-301-③層出土遺物47－石器６－
7　SR-301-③層出土遺物48－石器７－
8　SR-301-③層出土遺物49－鉄器－

挿図目次

図１　文京遺跡25次調査地点とグリーンゾーン（遺跡保存地区）配置図（縮尺1/3,500）……2
図２　調査作業風景……3
図３　現地説明会の様子……4
図４　情報処理センターエントランスホールでの掲示……4
図５　遺物の保管状況１……7
図６　遺物の保管状況２……7
図７　道後平野の地形概要と文京遺跡位置（縮尺1/200,000）……8
図８　道後城北における旧地形と発掘調査地点（縮尺1/20,000）……9
図９　城北団地西半部の調査地点（縮尺1/2,000）……10
図10　城北団地の旧地形復元図（縮尺1/4,000）……15
図11　文京遺跡22次調査西壁および文京遺跡25次調査西壁土層図（縮尺1/500・1/50）……15
図12　文京遺跡の区割（縮尺1/5,000、1/1,000、1/200）……18
図13　東壁土層模式図（縮尺1/300・1/50）……19
図14　文京遺跡25次調査の土層図(1)－東壁・南壁－（縮尺1/100・1/50）……21・22
図15　文京遺跡25次調査の土層図(2)－西壁・北壁－（縮尺1/100・1/50）……23・24
図16　文京遺跡25次調査・18次調査のⅡ-2-②層（上層水田）出土遺構配置図（縮尺1/300）……25
図17　文京遺跡25次調査・18次調査のⅡ-2-④層（中層水田）出土遺構配置図（縮尺1/300）……26
図18　文京遺跡25次調査・18次調査のⅡ-2-⑥層上面出土遺構配置図（縮尺1/300）……27
図19　文京遺跡25次調査・18次調査のⅡ-2-⑥層（下層水田）出土遺構配置図（縮尺1/300）……28
図20　文京遺跡25次調査・18次調査の自然流路と微高地上出土遺構配置図（縮尺1/300）……29
図21　Ⅱ-2-①層上面出土遺構配置図（縮尺1/300、1/20）……30
図22　Ⅱ-1層出土遺物（縮尺1/3・1/2・2/3）……31
図23　Ⅱ-2-①層（a1層）上部出土遺物（縮尺1/3）……33
図24　Ⅱ-2-①層（a1層）下部出土遺物（縮尺1/3）……33
図25　Ⅱ-2-①層（a1層）出土遺物－石器・鉄器－（縮尺1/2、2/3）……34
図26　25次調査・18次調査のⅡ-2-②層（上層水田）出土遺構配置図（縮尺1/300）……37
図27　Ⅱ-2-②層（上層水田）出土遺構配置図（縮尺1/100）……39・40
図28　Ⅱ-2-②層（上層水田）に伴う水口部土層図(1)（縮尺1/20）……42
図29　Ⅱ-2-②層（上層水田）に伴う水口部土層図(2)（縮尺1/20）……47
図30　Ⅱ-2-②層（上層水田）に伴う溝土層図（縮尺1/20）……49

図31　Ⅱ - 2 - ②層溝（a1層）出土遺物
（縮尺1/3）……50
図32　Ⅱ - 2 - ②層畦畔部（a2層）出土遺物
（縮尺1/3）……51
図33　Ⅱ - 2 - ②層耕作土（a3･4層）出土遺物(1)
（縮尺1/3）……52
図34　Ⅱ - 2 - ②層耕作土（a3･4層）出土遺物(2)
（縮尺1/2・2/3）……52
図35　Ⅱ - 2 - ③層（b1層）上部出土遺物
（縮尺1/3）……54
図36　Ⅱ - 2 - ③層（b1層）下部出土遺物
（縮尺1/3）……55
図37　Ⅱ - 2 - ③層（b1層）出土遺物－石器・鉄器－
（縮尺2/3）……55
図38　25次調査・18次調査の
Ⅱ - 2 - ④層（中層水田）出土遺構配置図
（縮尺1/300）……58
図39　Ⅱ - 2 - ④層（中層水田）出土遺構配置図
（縮尺1/100）……59･60
図40　Ⅱ - 2 - ④層（中層水田）に伴う水口部土層図(1)
（縮尺1/20）……62
図41　Ⅱ - 2 - ④層（中層水田）に伴う水口部土層図(2)
（縮尺1/20）……67
図42　Ⅱ - 2 - ④層畦畔部（b2層）出土遺物
（縮尺1/3）……70
図43　Ⅱ - 2 - ④層耕作土（b3･4層）出土遺物(1)
（縮尺1/3）……71
図44　Ⅱ - 2 - ④層耕作土（b3･4層）出土遺物(2)
（縮尺1/3）……72
図45　Ⅱ - 2 - ④層耕作土（b3･4層）出土遺物(3)
－石器・鉄器－（縮尺1/3・2/3）……73
図46　Ⅱ - 2 - ④層とⅡ - 2 - ⑤層の間の遺構
（縮尺1/300、1/100、1/20）……77
図47　Ⅱ - 2 - ④層とⅡ - 2 - ⑤層の間の遺構出土遺物
（縮尺1/3）……78
図48　Ⅱ - 2 - ⑤層（c1層）上部出土遺物
（縮尺1/3）……79
図49　Ⅱ - 2 - ⑤層（c1層）下部出土遺物
（縮尺1/3）……80
図50　Ⅱ - 2 - ⑤層（c1層）出土遺物－石器－
（縮尺2/3）……80
図51　25次調査・18次調査の
Ⅱ - 2 - ⑥層（下層水田）出土遺構配置図
（縮尺1/300）……83
図52　Ⅱ - 2 - ⑥層（下層水田）出土遺構配置図
（縮尺1/100）……85･86
図53　Ⅱ - 2 - ⑥層（下層水田）に伴う水口部土層図(1)
（縮尺1/20）……87
図54　Ⅱ - 2 - ⑥層（下層水田）に伴う水口部土層図(2)
（縮尺1/20）……90
図55　Ⅱ - 2 - ⑥層（下層水田）に伴う水口部土層図(3)
（縮尺1/20）……93
図56　Ⅱ - 2 - ⑥層（下層水田）に伴う溝土層図
（縮尺1/20）……95
図57　Ⅱ - 2 - ⑥層畦畔部（c2層）出土遺物
（縮尺1/3）……96
図58　Ⅱ - 2 - ⑥層耕作土（c3･4層）出土遺物(1)
（縮尺1/3）……97
図59　Ⅱ - 2 - ⑥層耕作土（c3･4層）出土遺物(2)
（縮尺1/3）……98
図60　Ⅱ - 2 - ⑥層耕作土（c3･4層）出土遺物(3)
－石器－（縮尺1/2・2/3）……98
図61　Ⅱ - 2 - ⑥層耕作土（c3･4層）出土遺物(4)
－鉄器－（縮尺2/3）……99
図62　文京遺跡25次調査・18次調査の
自然流路と微高地上出土遺構配置図
（縮尺1/300）……101
図63　自然流路 SR-301実測図
（縮尺1/100）……103･104
図64　SR-301- ①層出土遺物(1)－古代土師器－
（縮尺1/3）……105
図65　SR-301- ①層出土遺物(2)－須恵器①－
（縮尺1/3）……106
図66　SR-301- ①層出土遺物(3)－須恵器②－
（縮尺1/3）……107
図67　SR-301- ①層出土遺物(4)－灰釉陶器－
（縮尺1/3）……108
図68　SR-301- ①層出土遺物(5)－奈良二彩－
（縮尺1/3）……108
図69　SR-301- ①層出土遺物(6)－瓦－
（縮尺1/3）……108
図70　SR-301- ①層出土遺物(7)－古墳時代土師器－
（縮尺1/3）……109

図71　SR-301-①層出土遺物(8)－弥生土器－
（縮尺1/3）……110
図72　SR-301-①層出土遺物(9)－石器－
（縮尺1/2・2/3）……111
図73　SR-301-②層出土遺物(1)－古代土師器－
（縮尺1/3）……112
図74　SR-301-②層出土遺物(2)－須恵器①－
（縮尺1/3）……116
図75　SR-301-②層出土遺物(3)－須恵器②－
（縮尺1/3）……117
図76　SR-301-②層出土遺物(4)－瓦－
（縮尺1/3）……118
図77　SR-301-②層出土遺物(5)－古墳時代土師器－
（縮尺1/3）……119
図78　SR-301-②層出土遺物(6)－弥生土器①－
（縮尺1/3）……120
図79　SR-301-②層出土遺物(7)－弥生土器②－
（縮尺1/3）……121
図80　SR-301-②層出土遺物(8)－弥生土器③－
（縮尺1/3）……122
図81　SR-301-②層出土遺物(9)－縄文土器－
（縮尺1/3）……122
図82　SR-301-②層出土遺物(10)－土製品・石器・鉄器－
（縮尺1/3・1/2・2/3）……123
図83　SR-301-③層出土遺物(1)－古代土師器①－
（縮尺1/3）……127
図84　SR-301-③層出土遺物(2)－古代土師器②－
（縮尺1/3）……128
図85　SR-301-③層出土遺物(3)－古代土師器③－
（縮尺1/3）……129
図86　SR-301-③層出土遺物(4)－須恵器①－
（縮尺1/3）……130
図87　SR-301-③層出土遺物(5)－須恵器②－
（縮尺1/3）……131
図88　SR-301-③層出土遺物(6)－須恵器③－
（縮尺1/3）……133
図89　SR-301-③層出土遺物(7)－須恵器④－
（縮尺1/3）……134
図90　SR-301-③層出土遺物(8)－須恵器⑤－
（縮尺1/3）……135
図91　SR-301-③層出土遺物(9)－須恵器⑥－
（縮尺1/3）……136
図92　SR-301-③層出土遺物(10)－須恵器⑦－
（縮尺1/3）……137
図93　SR-301-③層出土遺物(11)－須恵器⑧－
（縮尺1/3）……138
図94　SR-301-③層出土遺物(12)－須恵器⑨－
（縮尺1/3）……139
図95　SR-301-③層出土遺物(13)－須恵器⑩－
（縮尺1/3）……140
図96　SR-301-③層出土遺物(14)－須恵器⑪－
（縮尺1/3）……141
図97　SR-301-③層出土遺物(15)－須恵器⑫－
（縮尺1/3）……142
図98　SR-301-③層出土遺物(16)－須恵器⑬－
（縮尺1/3）……143
図99　SR-301-③層出土遺物(17)－須恵器⑭－
（縮尺1/3）……144
図100　SR-301-③層出土遺物(18)－須恵器⑮－
（縮尺1/3）……145
図101　SR-301-③層出土遺物(19)－瓦①－
（縮尺1/3）……146
図102　SR-301-③層出土遺物(20)－瓦②－
（縮尺1/3）……147
図103　SR-301-③層出土遺物(21)－古墳土師器①－
（縮尺1/3）……147
図104　SR-301-③層出土遺物(22)－古墳土師器②－
（縮尺1/3）……148
図105　SR-301-③層出土遺物(23)－弥生土器①－
（縮尺1/3）……150
図106　SR-301-③層出土遺物(24)－弥生土器②－
（縮尺1/3）……151
図107　SR-301-③層出土遺物(25)－弥生土器③－
（縮尺1/3）……152
図108　SR-301-③層出土遺物(26)－弥生土器④－
（縮尺1/3）……153
図109　SR-301-③層出土遺物(27)－弥生土器⑤－
（縮尺1/3）……155
図110　SR-301-③層出土遺物(28)－弥生土器⑥－
（縮尺1/3）……156
図111　SR-301-③層出土遺物(29)－弥生土器⑦－
（縮尺1/3）……157
図112　SR-301-③層出土遺物(30)－弥生土器⑧－
（縮尺1/3）……159

図113　SR-301-③層出土遺物(31)－弥生土器⑨－
（縮尺1/3）……160
図114　SR-301-③層出土遺物(32)－弥生土器⑩－
（縮尺1/3）……161
図115　SR-301-③層出土遺物(33)－弥生土器⑪－
（縮尺1/3）……162
図116　SR-301-③層出土遺物(34)－弥生土器⑫－
（縮尺1/3）……163
図117　SR-301-③層出土遺物(35)－弥生土器⑬－
（縮尺1/3）……164
図118　SR-301-③層出土遺物(36)－弥生土器⑭－
（縮尺1/3）……166
図119　SR-301-③層出土遺物(37)－弥生土器⑮－
（縮尺1/3）……166
図120　SR-301-③層出土遺物(38)－縄文土器①－
（縮尺1/3）……167
図121　SR-301-③層出土遺物(39)－縄文土器②－
（縮尺1/3）……168
図122　SR-301-③層出土遺物(40)－土製品－
（縮尺1/2）……169
図123　SR-301-③層出土遺物(41)－石器①－
（縮尺2/3）……170
図124　SR-301-③層出土遺物(42)－石器②－
（縮尺1/2・1/3）……171
図125　SR-301-③層出土遺物(43)－石器③－
（縮尺1/2）……172
図126　SR-301-③層出土遺物(44)－鉄器①－
（縮尺2/3）……173
図127　SR-301-④層出土遺物（縮尺1/3）……173
図128　その他の出土遺物(1)（縮尺1/3）……191
図129　その他の出土遺物(2)（縮尺2/3）……192
図130　18次調査・25次調査区の遺構の変遷(1)
（縮尺1/600）……194
図131　18次調査・25次調査区の遺構の変遷(2)
（縮尺1/600）……195
図132　25次調査・18次調査の各層・遺構における
出土型式の消長……197
図133　文京遺跡16次調査Ｂ区SB-001柱穴埋土
（西から）……201
図134　文京遺跡25次調査・18次調査Ａ区
・16次調査Ｂ区の古代遺構配置図
（縮尺1/600）……201
図135　道後城北における古代前半の遺跡
（縮尺1/20,000）……202

表目次

表１　周辺の既往調査一覧（2007年度末まで）……11
表２　Ⅱ-１層出土遺物観察表……32
表３　Ⅱ-２-①層（上層水田覆土）
出土遺物観察表……35
表４　Ⅱ-２-②層出土遺物観察表……53
表５　Ⅱ-２-③層出土遺物観察表……56
表６　Ⅱ-２-④層出土遺物観察表……74
表７　Ⅱ-２-④層とⅡ-２-⑤層の間の遺構
出土遺物観察表……78
表８　Ⅱ-２-⑤層出土遺物観察表……81
表９　Ⅱ-２-⑥層出土遺物観察表……99
表10　SR-301-①層出土遺物観察表……113
表11　SR-301-②層出土遺物観察表……124
表12　SR-301-③層出土遺物観察表……174
表13　SR-301-④層出土遺物観察表……189
表14　その他の出土遺物観察表……193

序　説

1　発掘調査の体制と経過

(1)　調査にいたる経緯

1998年12月から翌1999年８月まで文京18次調査を実施して、1999年度末には総合情報処理センターが新営された。直後の2000年度当初から、その北側にメディア開放センターの整備が計画され、計画段階では、埋蔵文化財調査室保管資料の展示・活用なども提起されていた。ところが、2000年９月にいたって、2001年度予算の前倒し（補正予算）により、メディア開放センターと基礎科学研究棟（理学部）の建設計画が急遽進められることとなった。埋蔵文化財調査室では、計画範囲の調査には、前者に約８ヶ月、後者に９ヶ月を要すると回答するとともに、過重な調査による調査室業務の支障を予告した。協議の結果、基礎科学研究棟（理学部）計画を優先することとなったが、2001年度の前倒し予算（補正予算）として決定したのは、基礎科学研究棟（理学部）全体予算の半分であった。これに伴い埋蔵文化財調査室では、文京遺跡21次調査（調査番号：00003）を実施することとなり、2001年１月15日から９月９日に及んだ。さらに、2001年度予算において同Ⅱ期工事分を文京遺跡24次調査（調査番号：00105）として、2001年10月１日から2002年３月26日に実施した。一方、新たに農学部寄付建物新営工事が2001年度中に浮上し、急遽2001年11月15日から2002年２月６日まで樽味遺跡６次調査（調査番号：00106）として実施した。

このような建設計画・調査の頻発により、先送りされていたメディア開放センター新営計画は、2001年度末に具体化し、2002年度予算において実施することが決定され、平成14年４月５日付けの施設部長発事務連絡により、埋蔵文化財調査室に発掘調査の依頼がなされた。

埋蔵文化財調査室では、総合情報処理センター新営時の文京遺跡18次調査（調査番号：99802）で、古代末から中世にかけての水田遺構を確認し、その北側テニスコートでも、文京遺跡22次調査（調査番号：00005）として2000年度構内遺跡確認調査を実施して、18次調査からの水田層の広がりを確認していた。これらの成果と建設計画を対照し、情報教育棟新営地点全域について埋蔵文化財に影響が及ぶと判断でき、事前に発掘調査を実施することとなった。

施設部からは、４月12日付けで発掘調査計画の依頼が埋蔵文化財調査室に出され、埋蔵文化財調査室は、施設部との協議により、具体的な発掘計画を立案し、４月19日付けで施設部に発掘調査計画を回答した。一方、４月12日付で文化財保護法第57条第３項に基づく通知を松山市教育委員会・愛媛県教育員会に提出し、これに対する通知を４月26日付けで松山市教育委員会より受け取った。そして、すぐさま同日付で、文化財保護法第57条第１項に基づく発掘調査の届出を松山市教育委員会・愛媛県教育員会に提出した。対象面積は1,022㎡である。この届出に対しては、５月14日付で松山市教育委員会から通知を得、文京遺跡25次調査（調査番号：00202）として実施することとなった（図１）。

なお、本格調査とは別に、事前の環境整備に伴う立会調査（調査番号：00203）と、調査終了後の工事変更に伴う立会調査（調査番号：00210）を実施している。

(2)　発掘調査の体制

文京遺跡25次調査に関わる2002（平成14）年度の埋蔵文化財調査委員会と埋蔵文化財調査室、施設部を含めた調査体制は、以下の通りである。

［埋蔵文化財調査委員会］

委員長

副学長　小松正幸

委　員

法文学部長	藤川研策
法文学部教授	下條信行
法文学部教授	松原弘宣
教育学部長	金藤泰伸
教育学部教授	川岡　勉
理学部長	柳澤康信
医学部長	小西正光
工学部長	鈴木幸一
農学部長	白石雅也

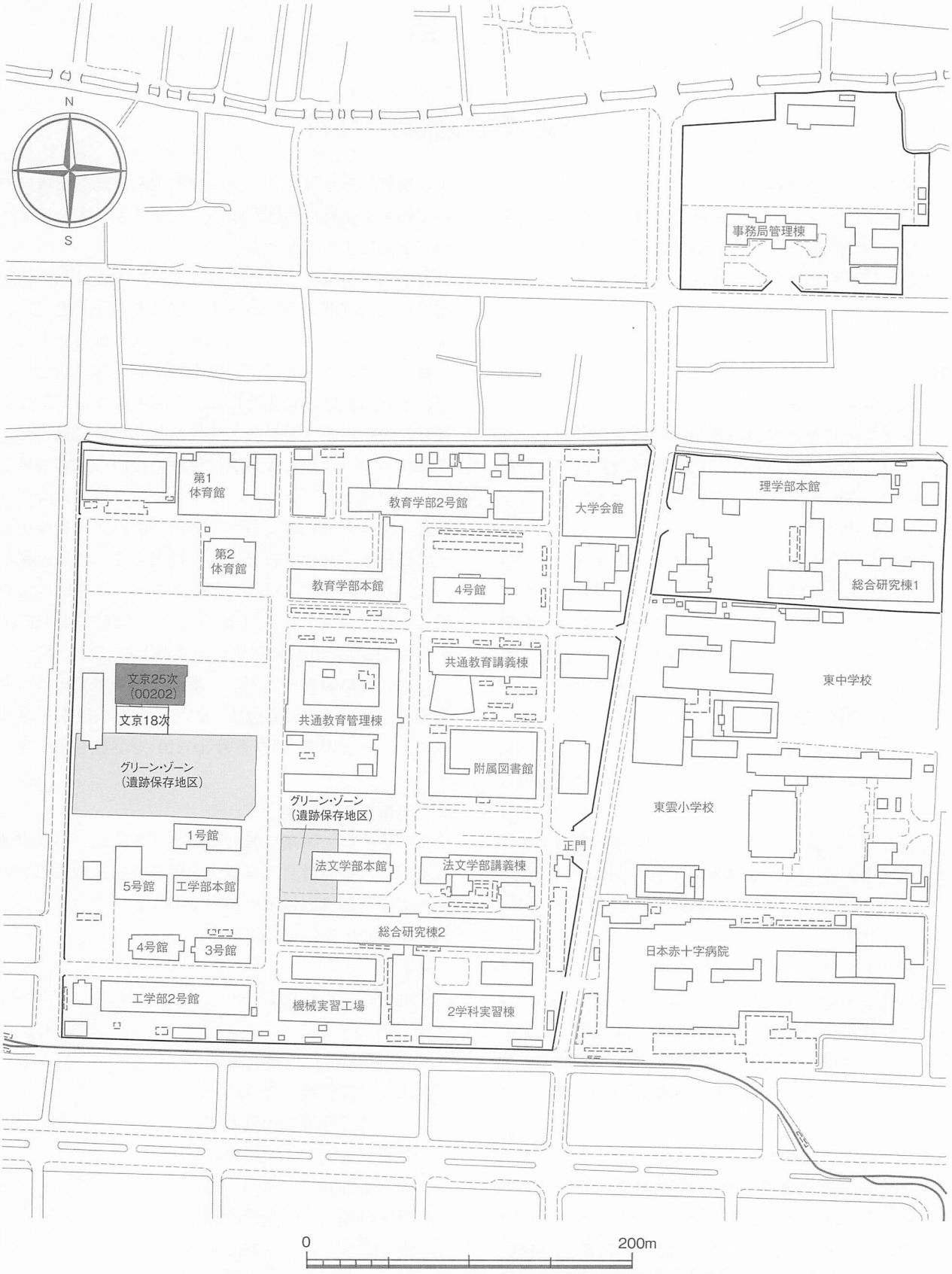


図1　文京遺跡25次調査地点とグリーンゾーン（遺跡保存地区）配置図（縮尺1/3,500）

事務局長　　塩谷幾雄
総務部長　　大和田和平
経理部長　　高橋伸一
施設部長　　土居昌弘

[埋蔵文化財調査室]

室　長　　下條信行（法文学部教授）
調査員　　田崎博之（法文学部教授）
吉田　広（法文学部講師・～ 2002.9）
（法文学部助教授・2002.10 ～）
三吉秀充（法文学部助手）
専門員　　松原弘宣（法文学部教授）
村上恭通（法文学部助教授）
川岡　勉（教育学部教授）
調査補助　宮崎直栄（施設部教務補佐員）
庶務担当　横本順子（施設部事務補佐員）

[施設部]

部　　長　　土居昌弘
企画課長　　秦　　稔
総務係長　　稲見俊光
企画係長　　氏原　修
施設課長　　杉下隆男
建築第一係長　西岡重義
建築第二係長　大工園幸郎

以上の体制のもと、施設部建築第二係監督により、実際の調査は吉田・三吉が担当した。

(3)　発掘調査の経過

今回の発掘調査は、先の18次調査や試掘調査成果から、地表下３ｍに及ぶ工事掘削深度の全てが調査対象となることが明らかであり、発掘調査及び工事段階での安全確保を目的として、調査区の北辺と西辺、東辺の一部に土留め用鋼矢板を打ち込むこととした。この作業に５月15日から着手するとともに、これに伴って一部立会調査（調査番号：00203）を５月17日に実施した。そして、先行調査で明らかに表土層と見なすことができた、現地表下100cmの範囲は、調査に先行して表土掘削を実施した。これをほぼ調査区全域で終えた６月３日から、発掘作業員20名を配して調査作業を開始した。

重機による掘削は、大型で全体を水平基調に下げる一方で、検出した練兵場時代の塹壕跡等の攪乱層を小型重機で行うとともに、西壁際等で土層確認のため一部先行して断ち割りを行っていった。重機による掘削は６月10日までを要し、これと入れ替わって同日から発掘作業員を40名に増員し、手作業による発掘調査を本格化した（図２）。

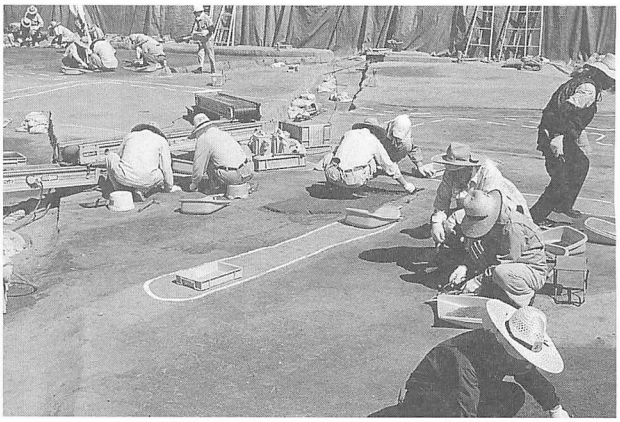


図２　調査作業風景

重機掘削の及ばなかった表土層及び攪乱層の掘り下げを手作業で行い、城北団地区割に基づき測量基準用の杭を設置し、表土掘削後の調査区全体を1/100で測量し、写真撮影を６月21日に行った（図版１）。

この後、上流部にあたる東側から、水田関連層の調査を開始した。調査にあたっては、18次調査で見いだされた３枚の水田層に対して、上層水田関連土層をａ層、中層水田関連土層をｂ層、下層水田関連土層をｃ層とし、さらにそれぞれ水田覆土層を１層、畦畔部土層を２層、水田耕作土層を３層、畦畔下部土層を４層とし、あわせてa3層等として、調査区割あるいは番号を付与した遺構単位で遺物の取り上げに用いた。残余のⅡ層を除去し、a1層の掘り下げを開始したのは６月27日。同時に清掃をかけながら水田畦畔の検出行っていくが、Ⅱ層の残存などにより、18次と連続的な位置に検出しきらない。梅雨後半の雨天もあり、調査区全域で水田畦畔の検出を終えたのは、７月23日。並行して、検出状況の平面図も1/100で作成する。一方で水田内の掘り下げを開始し、水田面での人馬の足跡等も検出した。最終的に、覆土層を取り除き、上層水田面を出したのは７月30日。翌31日には、高所作業車を用意して、全景撮影を行った（図版２・３）。その後、水田面の実測を1/50で行い、５cm単位の等高線も作成した。その間、掘り下げ作業は中断し、８月５日から９日まで、上層水田畦畔部と水田耕作土の掘り下げを行った。

そして、中層水田関連土層の調査に移ったのは、８月12日からである。14～ 18日の盆休みを挟んで水田

図３　現地説明会の様子

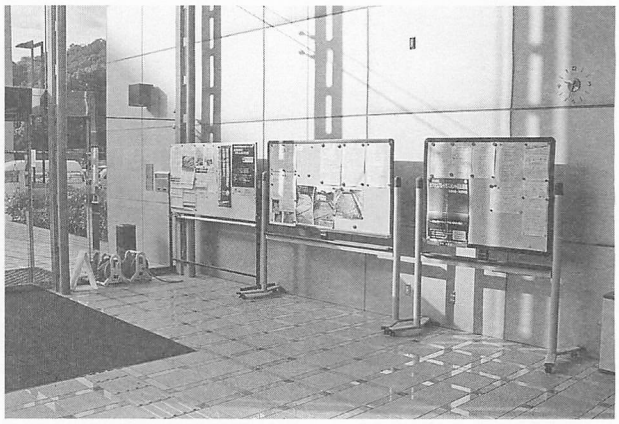


図４　情報処理センターエントランスホールでの掲示

畦畔の検出を行い、８月21日で全域の検出を終えた。1/100で検出状況平面図を作成するとともに、東側から水田面までの掘り下げを行い、28日にはその作業を全域で完了した。清掃に１日を要し、８月30日には再度高所作業車を擁して、中層水田の全景撮影を行った（巻頭図版１、図版４・５）。上層同様、水田面の実測は1/50・５㎝コンタで行い、１日間のみ作業員による掘り下げを停止した。続いて、中層水田畦畔部と水田耕作土の掘り下げを９月３日から９月13日まで行った。

下層水田関連土層の調査は、９月13日からである。覆土層を掘り下げながら水田畦畔の検出を行っていったが、途中、調査区西部で、下部の水田面を切り込む東西方向の溝１条を検出した。同様の層序の遺構は18次調査でも認められたが、面的な広がりをなさないことが確認できたため、個別の記録を取って、下部水田遺構の検出を続けた。結果、全域で水田畦畔の検出を終えたのは、９月30日。検出状況をやはり1/100で平面実測するとともに、水田面までの掘り下げを行い、10月９日に下層水田面の全景写真撮影を行った（巻頭図版２、図版６～８）。そして、1/50・５㎝コンタの水田面実測を11日まで行った。

この段階で、既に現地説明会を10月26日に設定していたため、公開用の水田遺構を残しながら、26日までの作業を進めることとした。すなわち、東半分は水田遺構を残し、その西側南北10m幅は水田耕作土と以下のシルト質土（ｄ層）まで掘り下げ、自然流路の最上部砂層を検出した状態、さらにその西側南北10m幅は自然流路（ｅ層）の最上部砂層（e1層）を掘り下げ、砂礫層（e2層）を検出した状態とした（図版９－１）。

このような状態として、現地説明会を10月26日㈯に開催した。当日は、あいにくの雨模様で、調査現場内への立ち入りは制限し、周囲から検出した水田遺構を見学し、西側からも水田より下層の堆積状況を確認できるよう配慮した。また、一部出土遺物を展示した。参加人数は約50名である（図３）。なお、現地説明会の他に、南側の情報処理センターエントランスホールでは、調査に関する写真や現地説明会資料の掲示を随時行った（図４）。

現地説明会を終えて、下層水田面以下の調査を本格化し、11月５日からは作業員50名体制である。まず、調査区東半に残した下層水田の畦畔部分を掘り下げた。その後西側から、水田耕作土、耕作土以下のシルト質土、自然流路内堆積に区分しながら掘り下げを行っていった。また、掘り下げを完了した範囲から、1/50・５㎝コンタの平面図と、1/20の調査区周辺畦の土層断面図の作成を行っていった。建築工事に伴う掘削深度の現地表下300㎝においては、調査区南北で流路底を一部検出したが、中央部ではなお流路内堆積が続いた。しかし、安全確保上困難であったため、これ以上の掘り下げは停止した。この状態で、自然流路の完掘全景写真を撮影したのが11月26日である（巻頭図版３、図版10・11）。

その後、土層観察用に残した調査区周辺の畦の掘り下げを行うとともに、土層断面図の補足を行った。そして最終的には、調査区全面を現地表下300㎝まで掘り下げて完掘とし、12月13日に完掘写真の撮影を行った（図版12）。

そして、後片付け作業を行い、12月18日にすべての作業を終了し、現場を撤収した。

2　整理作業の経過と体制

(1)　整理作業の経過

まず、基礎的な図面等の整理を終え、概要については、2003年度刊行の『埋蔵文化財調査室年報－2001・2002年度－』に報告した。先行調査出土遺物の整理のため、25次調査出土資料の整理はこれに遅れ、2004年度に洗浄・注記・接合・復元を行った。そして、正式報告書作成に向けた作業は2005年度に開始し、2005・2006年度に遺物の実測を行い、当初2006年度に報告書編集及び刊行を予定していたが、先行の18次調査報告書刊行が2007年４月までずれ込んだことと、2007年度の過密な発掘調査行程から、報告書編集・刊行は2008年度に持ち越すことになった。ただし、2008年度も、2007年度同様あるいはそれ以上のスケジュールとなり、その中での報告書編集作業となった。

(2)　整理作業の体制

文京遺跡25次調査の整理作業に関する、2003～2008（平成15～20）年度の埋蔵文化財調査委員会と埋蔵文化財調査室、施設部（施設基盤部）を含めた調査体制は、以下の通りである。

［埋蔵文化財調査委員会］

委員長

副学長　小林展章（2003年度）
理　事　小林展章（2004年度）
理　事　柳澤康信（2005年度）
副学長　林　和男（2006～2007年度）
副学長　亀井　崇（2008年度）

委　員

副学長	亀井　崇（2006～2007年度）
法文学部長	今泉元司（2003～2004年度）
	湯浅良雄（2005年度）
	森　孝明（2006年度）
	小淵　港（2007年度）
	森　孝明（2008年度）
法文学部教授	下條信行（2003～2007年度）
	田崎博之（2008年度）
	松原弘宣
教育学部長	金藤泰伸（2003年度）
	渡邊弘純（2004～2005年度）
	曲田清維（2006～2007年度）
	壽　卓三（2008年度）
教育学部教授	川岡　勉
理学部長	柳澤康信（2003～2004年度）
	野倉嗣紀（2005～2008年度）
医学部長	小西正光（2003～2004年度）
	橋本公二（2005～2006年度）
	大西丘倫（2007～2008年度）
工学部長	鈴木幸一（2003～2005年度）
	高松雄三（2006～2007年度）
	井出　敞（2008年度）
農学部長	白石雅也（2003～2004年度）
	泉　英二（2005年度～）
事務局長	田村幸男（2003～2004年度）
	門山　勇（2005年度）
総務部長	大和田和平（2003年度）
経営企画部長	山田勝治（2004～2005年度）
	山之内惠一（2006～2007年度）
	板橋俊夫（2008年度）
経理部長	白石薫二（2003～2004年度）
財務部長	八木修一（2005～2006年度）
	山村　滋（2007年度～）
施設部長	土居昌弘（2003年度）
	山地久司（2004年度）
施設基盤部長	山地久司（2005～2007年度）
	岡信孝則（2008年度）

［埋蔵文化財調査室］

室　長	下條信行（法文学部教授・～2007年度）
	田崎博之（法文学部教授・2008年度）
調査員	田崎博之（法文学部教授・～2007年度）
	吉田　広（法文学部助教授・～2006年度）
	（法文学部准教授・2007年度～）
	三吉秀充（法文学部助手・～2006年度）
	（法文学部助教・2007年度～）
専門員	松原弘宣（法文学部教授）
	村上恭通（法文学部助教授・～2005年度）
	（法文学部教授・2006年度）
	（東アジア古代鉄文化研究センター教授・2007年度～）
	川岡　勉（教育学部教授）
調査補助	宮崎直栄（施設部教務補佐員）

濱田美加（施設部事務補佐員
・2007年度～）
庶務担当　横本順子（施設部事務補佐員
・2003年度）
渡邉かおる（施設部事務補佐員
・2004～2006年度）
須之内慶子（施設部技術補佐員
・2007年度～）
整理作業担当（施設部技能補佐員）
丸岡美智子（～2005年度）
井手野文江
門田　都
松本美和子（～2005年度）
遺物実測担当（施設部技術補佐員）
濱田　美加（2004～2006年度）

［施設部（施設基盤部）］
部　長　土居昌弘（2003年度）
山地久司（2004～2007年度）
岡信孝則（2008年度）
企画課長　堤　達行（2003～2004年度）
施設企画課長　濱田慎二（2005年度）
小椋静夫（2006～2008年度）
総務係長　冨岡文夫（2003～2004年度）
施設総務 T.L.　冨岡文夫（2005年度）
沖野錬太郎（2006～2007年度）
藤村　宗（2008年度）

以上の体制のもと、整理作業は吉田・三吉指示により、接合･復元等の作業を、施設部技能補佐員の丸岡･井手野・門田・松本が行い、実測・製図等の作業を、施設部技術補佐員の濱田と施設部事務補佐員の宮崎が行った。

3　整理の方法

25次調査は調査番号として00202にあたるが、本格調査として次数を付し、略号としてBNK-25を冠している。

(1)　出土情報の登録

出土情報には出土地点と層位がある。出土地点については、文京遺跡全体の区割に基づく区割名があり、25次調査は東西にDQ～DY区、南北に45～50区に該当する。層位は、文京遺跡基本層序に基づくともに、Ⅱ層下部に相当する水田層について、調査時には上層水田に関わる土層（覆土含む）をａ層、中層水田に関わる土層（覆土含む）をｂ層、下層水田に関わる土層（覆土含む）をｃ層、下層水田下部のシルト質土層をｄ層、その下の自然流路内の砂層・砂礫層をｅ層としている。なお、これらの詳細は後述する。

今回の調査において、これらの層序の中で検出した遺構は水田関連遺構にほぼ限定できる。このうち、水田面と溝（水路）について遺構番号を与え、その間の畦畔や水口部分については、その水田面との関係において記述した。水田面については遺構番号に遺構略号としてSSを冠し、溝（水路）はSDを冠した。

上層水田に関わる遺構が001～042、中層水田に関わる遺構が101～139、中層と下層の間で検出した遺構が150、下層水田に関わる遺構が201～234である。

(2)　遺物の登録

出土遺物については、調査時に出土の原位置を記録したものについては、１からのＲ番号を取上遺物番号として与えた。ただし、水田関連遺構と自然流路という遺跡の性格上、原位置を記録した遺物は１点のみである。この他の出土原位置を記録していない遺物は、土層と調査区割単位あるいは遺構と埋土別の単位での取り上げで、袋単位の取り上げである。この取り上げ単位である袋に対して、整理時に1001からの４桁のｒを付した番号を登録し、接合他の検討を行った。r1001～1165がⅠ層・Ⅱ層・攪乱層、あるいは出土地不明遺物。r2001～2263が上層水田層（ａ層）に関わると判断した遺物、r3001～3333が中層水田層（ｂ層）に関わると判断した遺物、r4001～4334が下層水田層（ｃ層）に関わると判断した遺物、r5001～5111が下層水田層下のシルト質土層（ｄ層）出土遺物、r6001～6279が自然流路内堆積の砂層および砂礫層（ｅ層）出土遺物である。

さらに、報告書に記載すべき記録可能な個体を選別する時点で、１個体（実測図単位）に対して改めて10001からの５桁のＲ番号（実測遺物番号）を与え

た。r1000番台に対応するⅠ層出土遺物がR11001～11080、同じくⅡ層出土遺物がR12001～12022、r2000番台に対応する上層水田関連層（ａ層）出土遺物がR20001～20111、r3000番台に対応する中層水田関連層（ｂ層）出土遺物がR30001～30219、r4000番台に対応する下層水田関連層（ｃ層）出土遺物がR40001～40148、r5000番台に対応する下層水田層下のシルト質土層（ｄ層）出土遺物がR50001～50189、そして、r6000番台に対応する自然流路内堆積の上部砂層（e1層）出土遺物がR61001～61169、下部砂礫層（e2層）出土遺物がR62001～63710、下部砂礫・Ⅳ層混在層（e3層）出土遺物がR64001～64015、自然流路内詳細不詳遺物がR65001～65044である。なお、５桁の実測遺物番号を付したものでも、本書に掲載していないものが存在する。

(3)　遺物の保管

出土したすべての遺物については、文京遺跡25次調査を表すBNK-25と、出土遺構、取上遺物番号（Rあるいはｒを冠した４桁までの番号）を注記して、遺物台帳に記録し、出土層・遺構等の単位毎に、コンテナに番号を付して収納している。その中から、報告すべき遺物について抽出し、先に述べたような５桁の実測遺物番号を、別色で追加注記している。本報告の挿図番号との対応は、この実測遺物番号に拠っている。これらの遺物は１分の１の実測図を作成し、必要に応じて写真記録をとっている。また、報告書掲載遺物は、本報告挿図単位でコンテナに収納し、収納番号を付して、遺物台帳に記録している（図５・６）。

(4)　記録類の保管

発掘調査時の記録類には、遺構・土層の観察所見記録・実測図・写真がある。

遺構の観察所見記録は、埋土の土質・色調のメモ類で、遺構台帳を作成し、個々の観察記録とした。調査区内の遺構については、溝と水田水口部分等について20分の１の縮尺で実測し、それ以外の水田面については50分の１で全体図を作成し、５cmコンタを回した。これらの実測図には、１から50までの通し番号を付し、遺構図台帳に記録して整理・保管している。

調査の際には、35㎜モノクロ・カラースライド、６×７モノクロ・カラースライドによる写真記録をとっている。こうした写真類については、カットごとに検索用のカードを作成し、写真登録番号を付して、台帳に記録している。カットは、00202-001～065に及ぶ。また各フィルムについてもそれぞれ番号を与え、35㎜モノクロに３桁＋２桁（001-01～）、35㎜カラースライドには３桁（001～）、６×７モノクロ・カラースライドには４桁（0001～）の通しの登録番号を付し、検索用カードと写真台帳に併記している。

整理段階で作成したものとしては、遺物実測図・遺物写真がある。遺物実測図についても、出土層位（実測遺物番号）毎に通し番号を与え、台帳に記録している。また、報告書掲載用の遺物写真は、デジタルカメラで撮影しており、ファイルをそのまま調査室パソコン内に保存し、台帳を同時に作成している。

以上の方法で記録類と遺物を整理・保管しているが、本書に掲載した遺物については、本文中の遺物観察表に実測遺物番号の項を設けて表記し、報告書から遺物の検索ができるようにしている。

図５　遺物の保管状況１

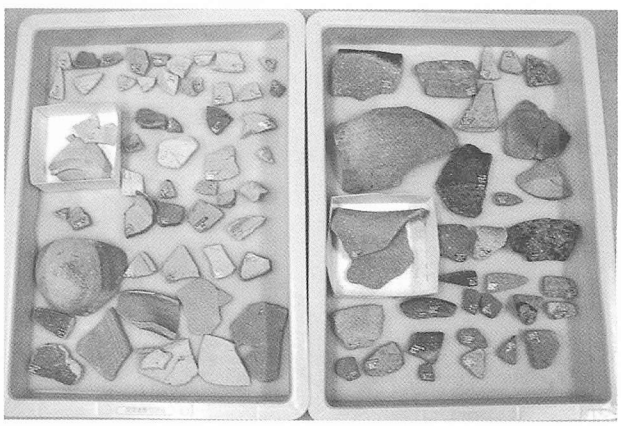


図６　遺物の保管状況２

Ⅰ　位置と環境

1　文京遺跡の位置と環境

文京遺跡の所在する道後平野は、四国北西部の高縄半島の南西基部に開けた平野である。平野の南部では、重信川が、石手川・小野川・砥部川などと合流しながら東から西へと流れ、複合扇状地性平野を形成している（図７）。

その中で弥生時代の遺跡は、平野周辺部の丘陵裾の段丘縁辺や扇状地の微高地上、あるいは狭い谷を挟んだ丘陵上に営まれ、平野内で10前後のまとまりをなす。このうち、旧石手川が形成した、勝山（城山）と御幸寺山に画された南北約１kmの扇状地上、東は道後温泉周辺から西に約２kmの範囲に広がりを有するのが、道後城北遺跡群である。標高は20～ 50m。北側では、祝谷の谷部から丘陵部にも遺跡が展開する。

道後城北遺跡群の展開する扇状地は、現在では緩やかに西に傾斜する地形となっている。ただし、これまでの調査成果から弥生時代においては、その北半部は旧流路である谷状の窪地が網目状に展開していた様子が復元されている。また、窪地間の微高地は窪地との比高差２～３mと1.5m前後の２つの地形面から構成され、集落遺跡はより高い微高地面を中心に営まれていたことも明らかとなっている（図８）。

文京遺跡は、このような道後城北遺跡群のほぼ中央部、最も広い微高地上に展開する。現在の愛媛大学城北団地を中心に、東は日本赤十字病院遺跡、西は松山大学構内遺跡、松山北高等学校構内遺跡へと広がり、これらを総称して「文京遺跡」と呼んでいる。

道後城北遺跡群内では、縄文晩期に道後今市遺跡や文京遺跡21次・24次調査で豊富な遺物の出土があり、弥生前期では文京遺跡４次・21次・24次調査地点で竪穴式住居が散在する集落が確認されている。また、持田町３丁目遺跡では墓域が出土している。前期末には、岩崎遺跡や祝谷畑中遺跡で大溝が掘削されるなど

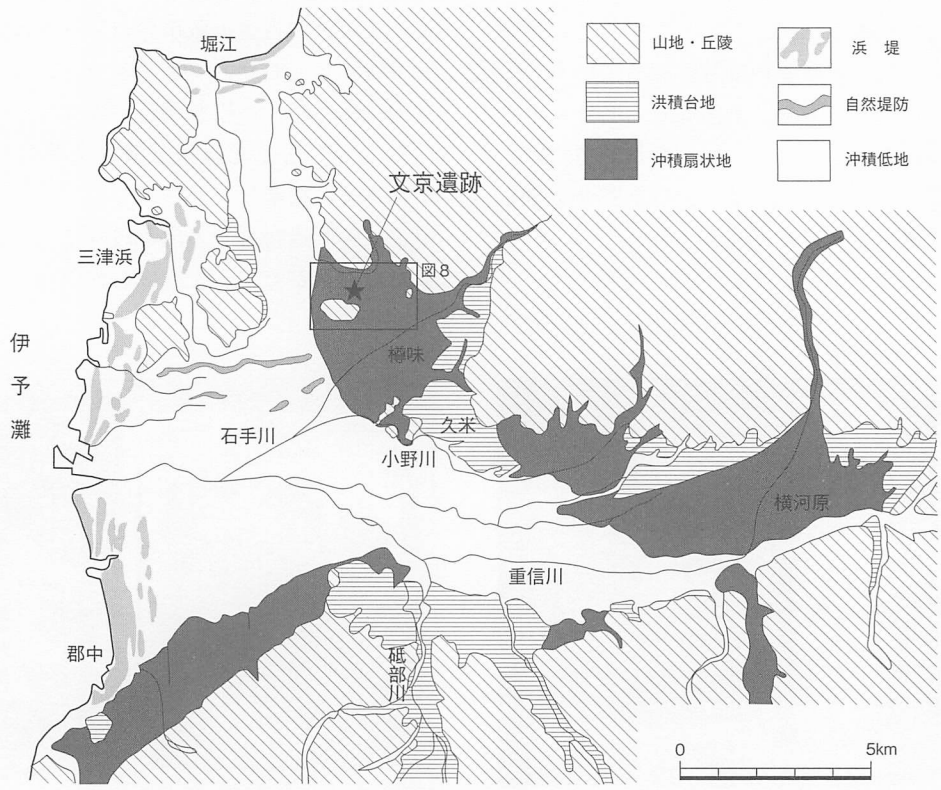


図７　道後平野の地形概要と文京遺跡位置（縮尺1/200,000）

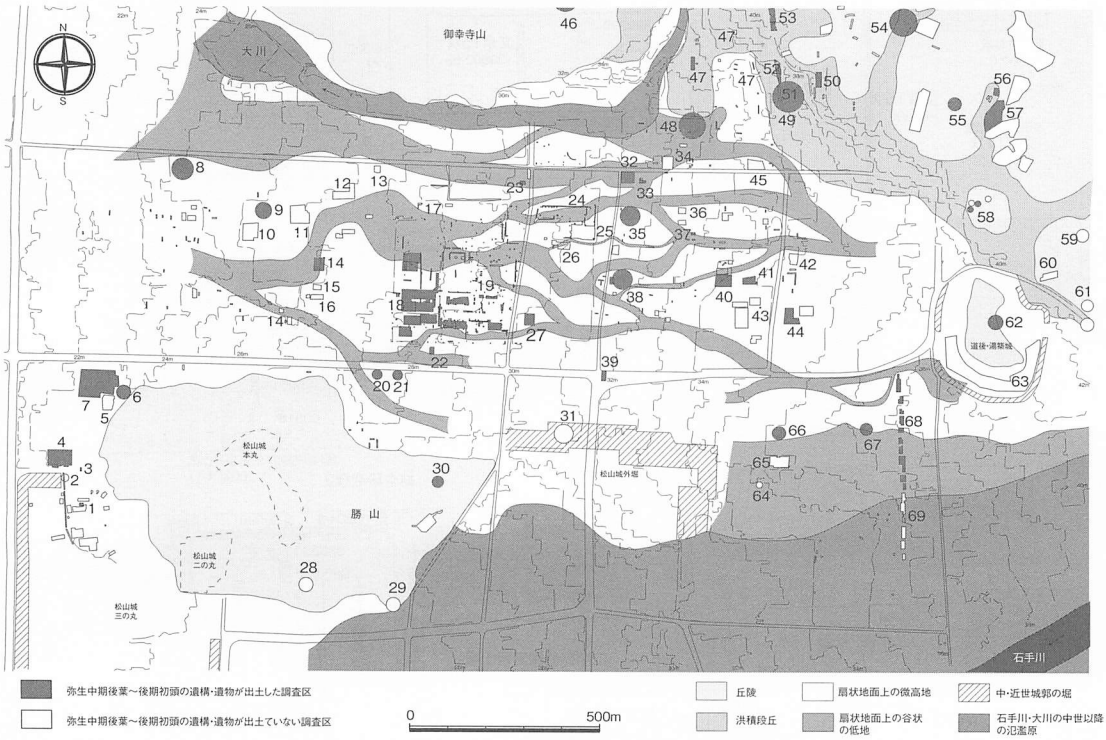
遺物数も増え、中期中葉以降は祝谷丘陵部へ遺跡が広がる。ところが、中期後葉には文京遺跡に遺構・遺物が集中し、後期中葉以降、再び拡散するような状況がある。なお、この遺跡群の特筆すべき要素として、道後一万（10本）、道後樋又（８本）、道後公園東山麓（３本）、祝谷六丁場（１本）といった、平形銅剣出土遺跡の集中がある。

2　周辺の既往調査

文京遺跡では、1951年頃から遺物が採集され、大学構内では1～3・5～34次にわたる本格・確認調査と試掘・立会調査で、縄文時代前期から近世に及ぶ集落遺跡・生産遺跡であることが判明している（図９・表１）。また、松山市埋蔵文化財包蔵地地図にも、「67. 文京遺跡（樋又遺跡・元練兵場遺物包含地」として、掲載・周知化されている。

まず、城北キャンパス内の旧微地形が、調査の累積により明確となっている。網の目状に流路と微高地が配された扇状地にあって、およそ城北キャンパスの南半が微高地にあたり、北半は流路が錯綜する（図10）。南半の微高地内にも１ｍ内外の比高差があり、中でも３次調査区・７次調査区・14次調査区が東西に延びる尾根状の微高地にあたる。一方北半は、流路が分流・合流しながら、間に一部微高地が残る。このうち、大講義室・共通教育講義棟から共通教育管理棟北半、そして25次調査区へと連なる流路が最も大きく、幅50ｍに達する場所もある。さらにこの北側にも流路が確認され、キャンパス北西部ではより幅広の流路帯を形成していた観がある（図11）。

以上のような地形環境のもと、各時代の遺跡が展開する。とりわけ、文京町３番構内においては、西南部



1:松山城跡（旧国立病院四国がんセンター）、2:堀之内遺跡、3:カキツバタ遺跡、4:若草町遺跡2次、5:若草町遺跡3次、6:府中町遺跡、7:若草町遺跡1次、8:勝山中学遺跡、9:松山大学構内遺跡、10:松山大学構内遺跡3次、11:松山大学構内遺跡2次、12:松山大学構内遺跡1次、13:道後城北RNB遺跡、14:松山北高遺跡4次、15:松山北高遺跡1次、16:松山北高遺跡2･3次、17:文京遺跡9次、18:文京遺跡1～3･5･7･10･12･14～17次、19:文京遺跡11次、20:通町遺跡、21:水口遺跡、22:平和通り遺跡、23:道後樋又遺跡2次、24:文京遺跡8次、25:文京遺跡21･24次、26:文京遺跡4次、27:日本赤十字病院遺跡、28:城ノ内古墳、29:城山遺跡、30:東雲神社遺跡、31:土器堀遺跡、32:今市遺跡、33:道後今市遺跡9次、34:道後北代遺跡、35:（伝）樋又銅剣出土推定地、36:道後今市遺跡10次、37:道後今市遺跡8次、38:道後今市遺跡･道後今市遺跡6次、39:道後一万遺跡、40:道後今市遺跡2･11次、41:道後今市遺跡1次、42:道後今市遺跡5次、43:道後今市遺跡3次、44:道後今市遺跡4次、45:緑台遺跡、46:山崎遺跡、47:緑台遺跡、48:土居窪遺跡、49:緑台遺跡、50:土居窪遺跡1次、51:土居窪遺跡2次1･2区、52:土居窪遺跡2次3区、53:祝谷畑中遺跡、54:土居の段遺跡、55:田高遺跡、56:道後鷺谷遺跡、57:道後鷺谷遺跡、58:冠山遺跡、59:伊佐爾波神社裏古墳、60:道後姫塚遺跡、61:義安寺遺跡、62:道後公園山麓遺跡、63:道後湯築城跡、64:持田遺跡、65:持田町3丁目遺跡、66:持田遺跡、67:道後南町2丁目遺跡、68:岩崎遺跡5･6区、69:岩崎遺跡3･4区

図８　道後城北における旧地形と発掘調査地点（縮尺1/20,000）

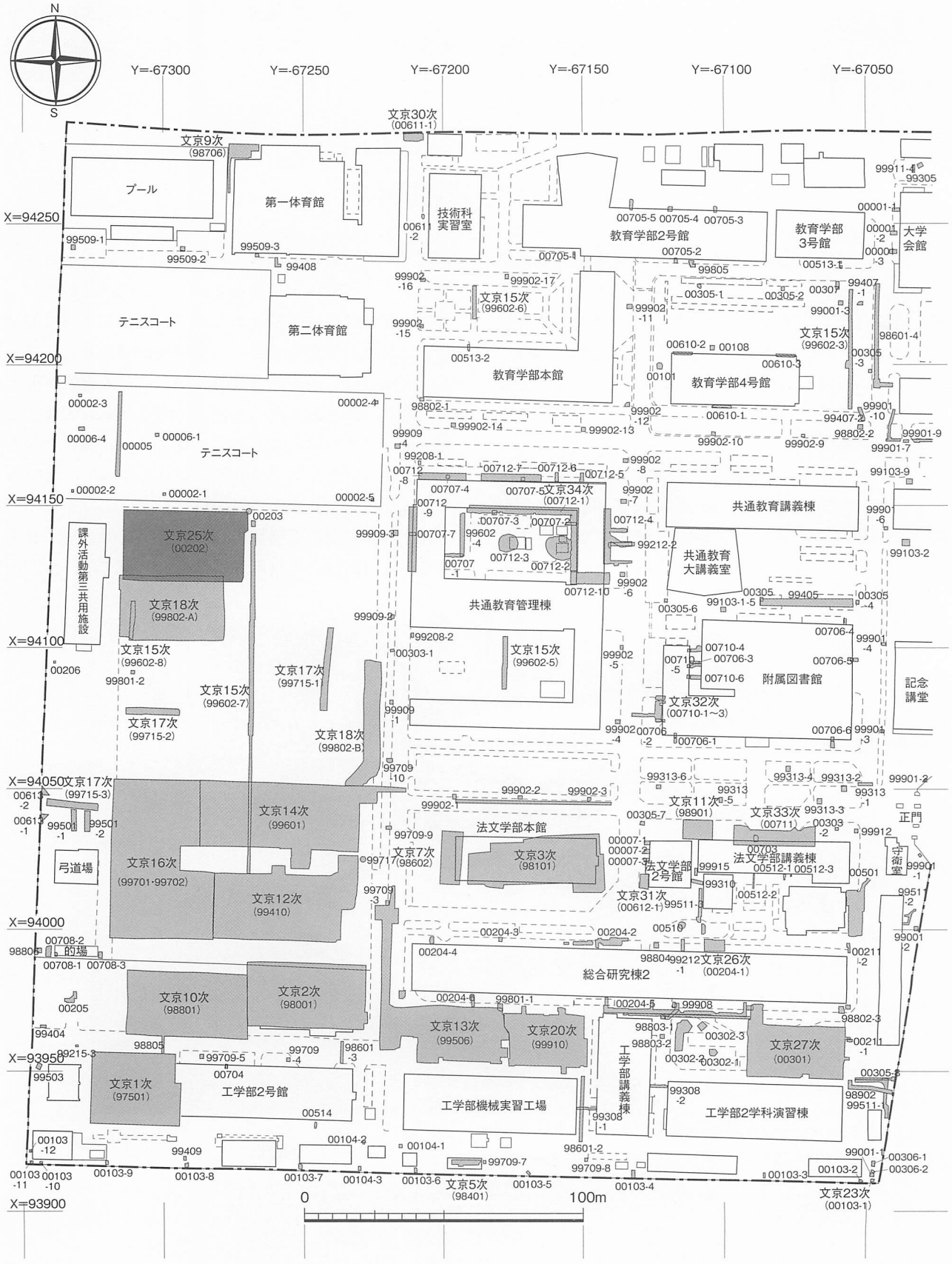


図９　城北団地西半部の調査地点（縮尺1/2,000）

表1　周辺の既往調査一覧（2007年度末まで）

調査番号	調査次数	調査種別	面積(㎡)	調査概要		文献
97501	1次	本格	750	弥生中期後葉～後期初頭の竪穴式住居4、土壙などが出土。		松山市報11
98001	2次	本格	600	弥生中期後葉～後期初頭の竪穴式住居9、掘立柱建物5、土壙5、円形周溝遺構1、土器溜1が出土。		松山市報28
98401	3次	本格	800	弥生中期後葉～後期初頭の竪穴式住居7、方形周溝遺構1、土壙8、大型掘立柱建物の一部が出土。		松山市報28
98601	5次	本格	18	弥生中期後葉～後期初頭の土壙？1、古墳後期の掘立柱建物1が出土。		松山市報28
98601	6次	本格	99	未報告。		未報告
98602	7次	本格	142	弥生中期後葉～後期初頭の竪穴式住居、大型掘立柱建物などが出土。		未報告
98706	9次	本格	62	地表下85cmでⅢ層を確認。層厚5cm。下位のⅣ層から縄文後期～晩期前葉の土器が出土。		調査室報Ⅱ
98801	10次	本格	1075	弥生中期後葉～後期前半の竪穴式住居4、掘立柱建物2、溝10、円形周溝遺構1、土壙6、土器溜12。土器溜から中国鏡片・板状鉄器・鉄鏃・ガラス滓が出土。		調査室報Ⅲ
98802		試掘	5	2トレンチ	Ⅲ層を確認。	調査室報Ⅴ
				3トレンチ	建物余堀りの攪乱部分。	
98803		試掘	2	1トレンチ	地表下40cmでⅢ層を確認。	調査室報Ⅴ
				2トレンチ	地表下40cmでⅢ層を確認。	
98804		試掘	1	建物余掘り部分で、攪乱を受けていた。		調査室報Ⅴ
98805		立会	6	北端部で小穴3基を確認。中央部以南は攪乱部分。		調査室報Ⅴ
98806		立会	3.4	地表下70cmでⅢ層を確認。Ⅲ層を掘り下げたが、遺物は出土していない。		調査室報Ⅴ
98901	11次	本格	85	Ⅲ層上面で古墳～中世の溝2が出土。Ⅲ層中位～Ⅳ層上面で弥生中期後葉～後期初頭の溝1・土壙2・小穴を検出、分銅形土製品・板状鉄斧が出土。Ⅳ層中位で縄文後期の野外炉3が出土、縄文土器・石皿・磨石が出土。		調査室報Ⅱ
98902		立会	2	西半は攪乱で破壊。中央部では地表下50cmでⅡ層直下にⅣ層があらわれる。東端部では地表下38cmでⅢ層を確認。層厚7cm。		調査室報Ⅴ
99001		試掘	3	1トレンチ	地表下50cmでⅢ層上位面を確認。	調査室報Ⅴ
				2トレンチ	地表下38cmでⅢ層上位面を確認。	
				3トレンチ	地表下50cmでⅢ層上位面を確認。	
99208		立会	2	1トレンチ	地表下75cmまで新旧の配管敷設のための攪乱がつづく。	調査室報Ⅴ
				2トレンチ	地表下75cmで自然流路堆積があらわれる。弥生土器もしくは土師器と考えられる土器片が出土。	
99212		立会	12	1トレンチ	地表下60cmでⅢ層を確認。Ⅳ層上面で円形の竪穴式住居の一部が出土。	調査室報Ⅴ
				2トレンチ	地表下55～98cmは黄褐色砂礫層が続き、下位のⅣ層上面で土壙1と小穴1を検出。小穴の上面からは縄文晩期末～弥生前期初頭の土器片が出土。	
99215		立会	2	3トレンチ	既設管路上で攪乱が続く。	調査室報Ⅴ
99305		立会	2	地表下60cmでⅡ層があらわれ、厚さ58cm以上を測る。		調査室報Ⅴ
99308		立会	8	1トレンチ	地表下70cmまで攪乱部分。	調査室報Ⅴ
				2トレンチ	地表下32cmでⅢ層があらわれる。Ⅲ層は厚さ15cm、出土遺物なし。	
99310		立会	4	地表下62cmでⅢ層があらわれる。Ⅲ層の厚さは12cm前後、Ⅳ層上面で弥生？の遺構を確認。遺物は出土していない。		調査室報Ⅴ
99313		試掘	15	1トレンチ	地表下68cmでⅢ層があらわれる。Ⅲ層は厚さ25cm、遺物は出土していない。	調査室報Ⅴ
				2トレンチ	地表下88cmでⅢ層があらわれる。Ⅲ層中位から溝が掘り込まれていた。時期は不明。Ⅴ層上面で落ち込みを確認。	
				3トレンチ	地表下70cmでⅢ層を確認。Ⅲ層からは土器細片が数点出土。	
				4トレンチ	地表下92cmでⅢ層を確認。Ⅲ層からは遺物は出土していない。表土下120～210cmにはⅣ層が堆積。Ⅳ層中位から縄文後晩期の土器片が出土。	
				5トレンチ	地表下95cmでⅢ層があらわれる。Ⅲ層の厚さは20～30cm。南に向かって次第に厚くなる。遺物は出土していない。Ⅲ層以下にはⅣ層が堆積。	
				6トレンチ	地表下70cmで厚さ10cmほどのⅢ層を確認。攪乱部分から縄文土器の破片が出土。	
99404		立会	1	地表下54cmで厚さ20cmのⅢ層を確認。Ⅲ層中からは、弥生中期後葉～後期初頭の甕や分銅形土製品が出土。遺構の埋土である可能性あり。		調査室報Ⅴ
99405		試掘	81.3	地表下95cmまで掘り下げたが、Ⅱ層が続く。		調査室報Ⅴ
99407		試掘	5.9	1トレンチ	地表下60cmまで新旧の配管敷設のための攪乱がつづく。	調査室報Ⅴ
				2トレンチ	地表下63cmのⅡ層直下でⅣ層があらわれる。	
99408		試掘	3.2	地表下75cmまで調査したが、攪乱されたⅠ層がつづく。		調査室報Ⅴ
99409		立会	1	地表下115cmでⅢ層上面を確認。Ⅲ層上面から弥生土器片が出土。		調査室報Ⅴ
99410	12次	本格	1183	弥生中期後葉～後期中頃の竪穴式住居30、掘立柱建物5以上、貯蔵穴14、溝1、土壙60以上、古墳後期の溝1が出土。弥生中期後葉～後期中頃の遺物には、石庖丁・扁平片刃石斧・打製石鏃・土製紡錘車・大量の炭化米などがある。古墳後期の溝からは馬の歯顎が出土。		調査室報Ⅴ
99501		立会	48	1トレンチ	地表下60cmでⅢ層を確認。	調査室報Ⅶ
				2トレンチ	地表下60cmでⅢ層を確認。	
				3トレンチ	地表下95cmでⅡ層があらわれ、120cmまでつづく。	
99503		立会	3	地表下85cmで厚さ13cmのⅢ層を確認。さらに、地表下100cmでⅣ層があらわれる。		調査室報Ⅶ
99506	13次	本格	890	弥生中期中葉～後期前葉の竪穴式住居11、大型掘立柱建物1、溝6、土壙13、土器溜2、古墳前期の竪穴式住居1、古墳後期の竪穴式住居14、掘立柱建物13、杭列3、鍛冶炉1、土壙17、焼土・灰ブロック12、古代～中世の溝2、土壙1などが出土。		調査室報ⅩⅡ
99509		立会	3	1トレンチ	地表下100cmで自然流路堆積があらわれる。層厚50cm。その直下はⅣ層。	調査室報Ⅶ
				2トレンチ	地表下60cmでⅢ層を確認。層厚6cm。下層のⅣ層への変化は漸移的。	
				3トレンチ	地表下100cmでⅢ層を確認。層厚6cm。下層のⅣ層への変化は漸移的。	
99511		立会	3	1トレンチ	トレンチ北半部では、地表下20cmでⅣ層上面があらわれ、中世～近世の溝1、土壙2が出土。南半部では、地表下25～30cmでⅢ層があらわれた。Ⅲ層は南に向かって次第に厚くなり南端で60cmを超える。弥生中期後葉の高坏や脚台付鉢が出土。	調査室報Ⅶ
				2トレンチ	地表下63cmで自然流路堆積である灰色砂礫層があらわれる。	
				3トレンチ	地表下60cmで厚さ23cmのⅢ層を確認。	
99601	14次	本格	1349	弥生中期後葉～後期中頃の竪穴式住居46・掘立柱建物・溝・土壙が出土。石庖丁・石斧・打製石鏃・土製紡錘車・分銅形土製品が出土。また、古墳後期の竪穴式住居が出土。		調査室報Ⅶ
99602	15次	確認	252.9	3トレンチ	地表下45～75cmでⅢ層を確認。Ⅲ層下面で、一辺5.5mの竪穴式住居1、自然流路1などが出土。	調査室報Ⅶ
				4トレンチ	地表下70cmでⅡ層があらわれる。層厚85cm前後。下部はⅡ-2層に対応すると考えられる。	
				5トレンチ	地表下70～95cmでⅣ層があらわれる。Ⅳ層を切り込む自然流路3、溝1を確認。	
				6トレンチ	地表下130cmでⅢ層を確認。層厚12～17cmで、粘性が強く、トレンチ北端では砂礫が多く混じる。	
				7トレンチ	南半地表下50～60センチでⅢ層確認し、その下で竪穴式住居跡5・溝3・土壙4出土。北半ではⅤ層が落ち込み、地表下120cm以下に古代から中世の水田層確認。	
				8トレンチ	99802（文京18次A区）内。	

調査番号	調査次数	調査種別	面積(㎡)	調査概要		文献
99701	16次	本格	1384	A区	弥生中期後葉～後期中頃の竪穴式住居36・溝15・土壙84、古墳後期の竪穴式住居２・土壙１・溝３、弥生もしくは古墳後期の掘立柱建物４、古墳後期～中世の柵列１が出土。弥生の遺物には滑石製指輪・南九州系土器がある。	調査室報Ⅷ
99702	16次	本格	627	B区	弥生中期後葉～後期中頃と古墳後期の竪穴式住居35以上、掘立柱建物２以上、土壙18、溝３が出土。	調査室報Ⅷ
99709		立会	12.2	3トレンチ	地表下110cmで厚さ25cmのⅢ層部分を部分的に確認。	調査室報Ⅷ
				4トレンチ	地表下130cmでⅢ層部分を確認。Ⅳ層上面で竪穴式住居が部分的に出土。	
				5トレンチ	地表下130cmまで撹乱を受けている。	
				6トレンチ	地表下130cmまで撹乱を受けている。	
				7トレンチ	地表下100cmでⅢ層があらわれ、古墳後期の２基の竪穴式住居の重複を確認。	
				8トレンチ	地表下45cmでⅢ層があらわれ、弥生後期終末の土壙ほかを確認。	
				9トレンチ	地表下80cmでⅢ層を確認。	
				10トレンチ	地表下82～98cmまで、層厚55cm前後のⅡ層が堆積。その直下からはⅣ層があらわれた。	
99715	17次	確認	154	1トレンチ	竪穴式住居跡２＋α、土壙４、溝２、自然流路１などを確認。	調査室報Ⅷ
				2トレンチ	竪穴式住居跡10、土壙３、溝１などを確認。	
				3トレンチ	竪穴式住居跡６、土壙１、自然流路１などを確認。	
99717		緊急		埋蔵文化財調査室に連絡がないまま工事に着手。Ⅲ層の一部を破壊。地表下55cmでⅢ層を確認。		調査室報Ⅷ
99801		立会	1	1トレンチ	地表下120cmでⅢ層上面を確認。	調査室報Ⅷ
				2トレンチ	地表下75cmまでⅡ層がつづく。	
99802	18次	本格	1192	A区	北半低地部で古代～中世の自然流路１、３面の水田層（水田57・水路22・水溜１）出土。南半微高地で弥生時代の掘立柱建物５・土壙２、古代～中世の掘立柱建物10・土壙７出土。	調査室報ⅩⅥ
				B区	弥生時代の竪穴式住居８・掘立柱建物１・土壙15、古墳時代の竪穴式住居５・掘立柱建物３・溝２・土壙４、古代～中世の掘立柱建物１・溝４出土。	
99805		立会	3	既設の配管路上で地表下100cmまで撹乱されたⅠ層がつづく。		調査室報Ⅷ
99901	19A	本格	31	1トレンチ	地表下70cmで厚さ17cmのⅢ層を確認。遺物は出土していない。	調査室報Ⅹ
				2トレンチ	地表下45cmで自然流路を確認。	
				3トレンチ	地表下75cmでⅢ層を確認。層厚30cmで、粘性が強い。	
				4トレンチ	地表下69cmでⅢ層を確認。層厚10cmで、粘質がある。	
				6トレンチ	地表下140cmまでⅡ層が続き、直接Ⅳ層があらわれる。	
				7トレンチ	道路舗装面から45cmでⅢ層を確認。層厚は40cmで、砂礫や小石が多く混じる。	
				9トレンチ	地表下45cmでⅢ層を確認。砂礫や小石が多く混じる。弥生中期後葉～後期の遺物が出土。	
				10トレンチ	地表下40cmでⅢ層を確認。砂礫や小石が多く混じる。弥生中期後葉～後期の遺物が出土。	
99902	19B	本格	43	1トレンチ	地表下55cmでⅢ層を確認。弥生中期後葉～後期初頭の竪穴式住居１が出土。	調査室報Ⅹ
				2トレンチ	地表下70cmのⅠ層直下でⅣ層があらわれる。Ⅲ層は削平されているものと考えられる。	
				3トレンチ	地表下80cmのⅠ層直下でⅣ層があらわれる。Ⅲ層は削平されているものと考えられる。	
				1-3トレンチ間	地表下40cmでⅢ層を確認。弥生中期後葉～後期初頭の竪穴式住居７、土壙９、溝３などが出土。。	
				4トレンチ	地表下58cmでⅢ層を確認。層厚22cm。最下面のⅣ層との層界には灰白色の砂礫層が薄く堆積。	
				5トレンチ	地表下約50cmまでⅡ層が続き、Ⅱ層の直下でⅣ層があらわれる。	
				6トレンチ	地表下65cmでⅣ層があらわれ、その上面で断面逆台形の溝を確認。灰黄色や明黄褐色の砂礫土が混じる埋土で、古代～中世の溝と考えられる。	
				7トレンチ	地表下100cmまで掘り下げたが、撹乱層が続く。	
				8トレンチ	地表下100cmのⅡ層直下でⅣ層があらわれる。	
				9トレンチ	地表下40cmでⅢ層を確認。層厚30cmで、下面で弥生中期後葉の土壙と小穴が出土。	
				10トレンチ	地表下40cmでⅢ層を確認。層厚30～40cmで、下面で弥生中期後葉の土壙もしくは竪穴式住居と考えられる落ち込みが出土。	
				11トレンチ	地表下80cmでⅢ層を確認。Ⅲ層には本来混じらないⅣ層の小塊がみられるので、遺構の埋土と判断。弥生土器もしくは土師器と考えられる土器片が出土。	
				12トレンチ	地表下120cmまで掘り下げたが、撹乱層が続く。	
				13トレンチ	地表下80cmのⅠ層直下でⅣ層があらわれる。Ⅳ層からは縄文中期前半と考えられる土器が出土。	
				14トレンチ	地表下90～ 170cmまでⅡ層が続く。Ⅱ層の下半部は18次調査A区で出土した古代～中世の水田層に対応するものと考えられる。	
				15トレンチ	地表下140cmでⅢ層を確認できたが、二次堆積の可能性が考えられる。下位のⅣ層からは縄文土器と考えられる土器片が出土。	
				16トレンチ	地表下150cmでⅢ層を確認できたが、二次堆積の可能性が考えられる。	
				17トレンチ	地表下145cmのⅡ層直下でⅣ層があらわれる。Ⅳ層上面で自然流路もしくは溝と考えられる落ち込みを確認。	
99908		立会	8.4	地表下40～ 50cmでⅢ層を確認。Ⅲ層は10～15cmの厚さを測る。Ⅳ層上面で竪穴式住居１、土壙２、小穴などを平面検出。		調査室報Ⅹ
99909		立会	8	1トレンチ	調査前に地表下80cmまで掘削。	調査室報Ⅹ
				2トレンチ	調査前に地表下80cmまで掘削。	
				3トレンチ	調査前に地表下80cmまで掘削されていたが、Ⅰ層内におさまる。	
				4トレンチ	調査前に地表下80cmまで掘削。	
99910	20次	本格	588	弥生中期後葉～後期中頃の竪穴式住居１、古墳後期の竪穴式住居５、中世の溝群が出土。		調査室報ⅩⅣ
99911		試掘	9	4トレンチ	地表下70cmでⅢ層を確認。層厚12～ 15cmで、粘性が高く、砂礫・小石が混じる。	調査室報Ⅹ
99912		立会	0.5	地表下62cmで厚さ23cmのⅢ層を確認。Ⅲ層からは遺物は出土していない。		調査室報Ⅹ
99915		立会	1	建物余掘りの撹乱部分。		調査室報Ⅹ
00001		立会	9	1トレンチ	地表下92cmまで撹乱されたⅠ層がつづく。建物余掘範囲内。	調査室報Ⅹ
				2トレンチ	地表下70cmでⅢ層を確認。層厚15cm。	
				3トレンチ	地表下72cm前後でⅢ層を確認。上部は暗褐色砂質シルトであるが、下部は暗褐色の砂礫層となる。Ⅲ層の二次堆積か？	
00002		試掘	2.2	1トレンチ	地表下30cmまで調査したが、Ⅰ層がつづく。	
				2トレンチ	地表下50cmでⅡ層を確認。95cmまでⅡ層がつづく。	
				3トレンチ	地表下68cmでⅡ層を確認。104cmまでⅡ層がつづく。	
				4トレンチ	地表下10cmでⅡ層を確認。80～88cmまでⅡ層がつづき、直下にⅣ層があらわれる。	
				5トレンチ	地表下15cmでⅡ層を確認。92cmまでⅡ層がつづく。	
00005	22次	確認	33	谷状の窪地と中世以前の水田層を確認。		調査室報Ⅹ
00006		立会	1	1トレンチ	地表下25cmでⅡ層を確認。90cmまでⅡ層がつづく。	調査室報Ⅹ
				4トレンチ	地表下50cmでⅡ層を確認。95cmまでⅡ層がつづく。	

調査番号	調査次数	調査種別	面積(㎡)	調査概要		文献
00007		立会	5	1トレンチ	建物余掘部分にあたり、攪乱が続く。	調査室報X
				2トレンチ	建物余掘部分にあたり、攪乱が続く。	
				3トレンチ	建物余掘部分にあたり、攪乱が続く。	
00103	23次	本格	17.3	1トレンチ	地表下70cmで厚さ20cmのⅢ層を確認。Ⅲ層から弥生土器片が出土。	調査室報XⅣ
				2トレンチ	地表下70cmで厚さ60cmのⅢ層を確認。Ⅲ層から弥生土器片が出土。	
				3トレンチ	地表下22cmで自然流路上面を確認。	
				4トレンチ	地表下62cmで土壙を確認。	
				5トレンチ	地表下100cmで厚さ6cmのⅢ層を確認。Ⅲ層下面で小穴が出土。	
				6トレンチ	地表下95～100cmで古墳後期の土壙を確認。	
				7トレンチ	地表下75～80cmでⅢ層があらわれる。Ⅲ層上面で溝を確認。中位からも弥生と古墳の小穴が掘り込まれている。	
				8トレンチ	地表下100～105cmで自然流路を確認。	
				9トレンチ	地表下82cmでⅢ層を確認。Ⅲ層下面で弥生中期後葉の土器溜や柱穴を確認。	
				10トレンチ	地表下65cmで厚さ22cmのⅢ層を確認。Ⅲ層から遺物は出土していない。	
				11トレンチ	地表下70cmで厚さ20cmのⅢ層を確認。Ⅲ層下部で小穴が出土。	
				12トレンチ	地表下95cmまで攪乱がつづく。	
00104		立会	1	1トレンチ	地表下65cmまで攪乱がつづく。	調査室報XⅠ
				2トレンチ	地表下60cmで厚さ15cmのⅢ層を確認。	
				3トレンチ	地表下65cmまでⅡ層がつづく。	
00108		緊急	3	埋蔵文化財調査室に連絡がないまま、地表下70cmで掘削されていた。Ⅱ層内に収まると判断。		調査室報XⅠ
00202	25次	本格	1022	本書報告。		調査室報XⅩ
00203		立会	1	既設の配管路上で攪乱されたⅠ層がつづく。		調査室報XⅠ
00204	26次	本格	144.7	1トレンチ	弥生時代中期後葉～後期初等の竪穴式住居1，掘立柱建物1、土壙3などが出土。SK-27の床面からは炭化した板材が2枚並んで出土。また、Ⅲ層中から分銅形土製品が出土。	調査室報XⅠ
				2トレンチ	弥生時代の竪穴式住居1、土壙3、溝3などが出土。竪穴式住居からは龍を描いたと考えられる絵画土器が出土。	
				3トレンチ	弥生時代の土壙1などが出土。	
				4トレンチ	地表下80cmでⅢ層上面、120～125cmでⅣ層上面を確認。遺構・遺物は出土していない。	
				5トレンチ	弥生時代の竪穴式住居1、土壙7、溝1などが出土。	
				6トレンチ	弥生時代の土壙1などが出土。	
00205		立会	3	地表下105cmでⅢ層を確認。Ⅲ層上部は砂礫が多く混じり、下部の砂質シルトへ漸移的に変化。		調査室報XⅠ
00206		試掘	0.5	地表下90cmで褐灰色砂礫層を確認。115cmまでつづく。		調査室報XⅠ
00211		立会	1.9	1トレンチ	共同溝設置に伴う余掘りで破壊。	調査室報XⅠ
				2トレンチ	地表下40cmでⅢ層を確認。層厚25cmで、砂礫が多く混じる。	
00301	27次	本格	703	近世の溝1、性格不明遺構3、中世の掘立柱建物1、溝4、土壙2、弥生時代中期後葉～後期の竪穴式住居6、掘立柱建物1、溝1、土壙2、縄文時代の土壙1、性格不明遺構2などが出土。とくにSC-9からは分銅形土製品5、茸形土製品1が出土。		調査室報XⅠ
00302		立会	39	1トレンチ	地表下32cmでⅣ層がⅠ層の直下にあらわれる。Ⅳ層直上で中世の遺物が出土。	調査室報XⅢ
				2トレンチ	地表下40cmまで調査したが、Ⅰ層がつづく。	
				3トレンチ	地表下40cmまで調査したが、Ⅰ層がつづく。	
00303		立会	3.1	1トレンチ	地表下70cmまで調査したが、攪乱部分が続く。	調査室報XⅢ
				2トレンチ	地表下60～65cmでⅢ層を確認。	
00305		立会	12	1トレンチ	地表下70cmでⅢ層を確認。	調査室報XⅢ
				2トレンチ	地表下80cmでⅢ層を確認。	
				3トレンチ	地表下54cmでⅣ層を確認。Ⅳ層上面で竪穴式住居と考えられる落ち込みが出土。	
				4トレンチ	地表下95cmでⅢ層を確認。Ⅲ層は砂礫が多く混じる。	
				5トレンチ	地表下115cmでしまりのない砂礫混じりのにぶい黄褐色シルト層があらわれる。	
				6トレンチ	地表下105cmで灰黄褐色粘質土層があらわれる。その下層に、しまりのない砂礫混じりのにぶい黄褐色シルト層がみられる。	
				7トレンチ	地表下55cmでⅢ層を確認。	
				8トレンチ	西半部～中央部は攪乱で破壊。東半部では地表下45～50cmでⅢ層を確認。下層のⅣ層最上面から縄文土器の細片が出土。	
00306		立会	1.4	1トレンチ	地表下90cmでⅢ層を確認。層厚18cm。下面から弥生中期後葉の土器が出土。	調査室報XⅢ
				2トレンチ	地表下110cmでⅢ層を確認。層厚22～40cm。弥生中期後葉～後期の絵画土器を含む遺物が出土。	
00307		立会	2.6	既設の共同溝余掘り部分にあたる。		調査室報XⅢ
00403		立会	8.7	1トレンチ	古墳時代の柱穴1、古代～中世の溝1が出土。	調査室報XⅤ
				2トレンチ	地表下30cmでⅢ層を確認。層厚30cm。	
00404		立会	3.5	1トレンチ	地表下40cmでⅢ層を確認。層厚20cm。弥生土器細片出土。	調査室報XⅤ
				2トレンチ	地表下35～40cmでⅢ層を確認。層厚25cm。	
00501		立会	78.5	弥生中期後葉の竪穴式住居1・溝1、弥生後期前葉の溝1、弥生後期中葉～古墳前期の竪穴式住居1・土壙1、中世以降の溝1等が出土。		調査室報XⅦ
00502		立会	38.6	1トレンチ	地表下25～100cmまでⅡ層を確認。	調査室報XⅦ
				2トレンチ	地表下50～85cmまでⅡ層を確認。	
				3トレンチ	地表下40～100cmまでⅡ層を確認。	
				4トレンチ	地表下55～150cmまでⅡ層を確認。	
00503		試掘	12.4	地表下70cmでⅡ層を確認。		調査室報XⅦ
00508		試掘	9.8	1トレンチ	範囲内Ⅰ層で余掘確認できず。	調査室報XⅦ
				2トレンチ	地表下65cmでⅢ層確認、層厚35cm。外壁から3.5mまで余掘り。	
				3トレンチ	地表下75cmでⅢ層確認、層厚40cm。外壁から3.5mまで余掘り。	
				4トレンチ	地表下85cmでⅢ層確認。	
00510		立会	3.2	地表下60cmまでⅠ層を確認。		調査室報XⅦ
00512		試掘	4.3	1トレンチ	地表下65cmでⅢ層確認。外壁から1.2mまで余掘り。	調査室報XⅦ
				2トレンチ	地表下45cmでⅢ層確認。	
				3トレンチ	地表下70cmまでⅠ層を確認。	
00513		試掘	2.7	1トレンチ	北半地表下80cmまでⅠ層、南半も地表下100cmまでⅠ層を確認。	調査室報XⅦ
				2トレンチ	地表下85cmで褐灰色～灰褐色シルト層出土。外壁から2mまでは余掘り。	
00514		試掘	1.5	地表下80cmでⅢ層確認。外壁から2mまで余掘り。		調査室報XⅦ

調査番号	調査次数	調査種別	面積(㎡)	調査概要		文献
00515		立会	24.2	1トレンチ	地表下40cmでⅢ層確認。溝１・小穴２検出。	調査室報XⅦ
				2トレンチ	地表下45cmでⅢ層確認。小穴３検出。	
				3トレンチ	地表下42cmでⅢ層確認。	
				4トレンチ	地表下40cmでⅣ層確認。竪穴式住居跡１・小穴２検出。	
				5トレンチ	地表下42cmでⅢ層確認。	
				6トレンチ	地表下40cmでⅢ層確認。	
				7トレンチ	地表下40cmでⅢ層確認。	
				8トレンチ	地表下40cmでⅢ層確認。	
				9トレンチ	地表下40cmでⅢ層確認。	
				10トレンチ	地表下45cmでⅢ層確認。	
				11トレンチ	地表下35cmまでⅠ層を確認。	
				12トレンチ	地表下35cmまでⅠ層を確認。	
				13トレンチ	地表下35cmまでⅠ層を確認。	
				14トレンチ	地表下35cmまでⅠ層を確認。	
				15トレンチ	地表下35cmまでⅠ層を確認。	
				16トレンチ	地表下35cmまでⅠ層を確認。	
				17トレンチ	地表下35cmまでⅠ層を確認。	
				18トレンチ	地表下35cmまでⅠ層を確認。	
				19トレンチ	地表下35cmまでⅠ層を確認。	
				20トレンチ	地表下35cmまでⅠ層を確認。	
00610		立会	12	1トレンチ	地表下120cmでⅣ層を確認。	調査室報XⅧ
				2トレンチ	地表下120cmでⅣ層を確認。	
				3トレンチ	地表下105cmでⅣ層を確認。	
00611	30次	本格	17.7	1トレンチ	地表下70cmでⅡ-２層、120cmでⅢ層、130cmでⅣ層を確認。Ⅳ層からは縄文土器出土。	調査室報XⅧ
				2トレンチ	地表下85cmでⅡ-２層、130cmでⅣ層を確認。	
00612	31次	立会	25	1トレンチ	地表下80cmのⅣ層上面で古墳後期の土壙６・柱穴７・小穴17出土。Ⅳ-3b層上面で縄文後期の土壙４・小穴９出土。縄文後期の包含層出土。	調査室報XⅧ
				2トレンチ	地表下100cmまでⅠ層を確認。	
00613		立会	8	1トレンチ	地表下95cmでⅢ層出土。	調査室報XⅧ
				2トレンチ	地表下93cmでⅢ層出土。	
00701		試掘	9.2	1トレンチ	地表下170cmまでⅠ層を確認。外壁から1.5mまでは余掘。	調査室報XⅨ
				2トレンチ	地表下170cmまでⅠ層を確認。外壁から1.5mまでは余掘。	
				3トレンチ	地表下90cmでⅡ層を確認。外壁から2.0mまでは余掘。	
				4トレンチ	地表下55cmでⅡ層を確認。外壁から0.75mまでは余掘。	
00703		試掘	3	地表下70cmでⅢ層を確認、層厚は15～20cm。外壁から0.95mまでは余掘。		調査室報XⅨ
00704		試掘	1.5	地表下150cmまでⅠ層を確認。外壁から2.4mまでは余掘。		調査室報XⅨ
00705		試掘	11.8	1トレンチ	地表下105cmでⅢ層を確認、層厚は10cm。	調査室報XⅨ
				2トレンチ	地表下150cmまでⅠ層を確認。外壁から2.6mまでは余掘。	
				3トレンチ	建物あるいは共同溝により地表下165cmまでⅠ層を確認。	
				4トレンチ	地表下40cm以下にさらに管路埋設を確認。	
				5トレンチ	地表下85cmでⅡ層、108cmで近世以前の自然流路を確認。外壁から2.1mまでは余掘。	
00706		試掘	18	1トレンチ	地表下75cmでⅡ層、110cmでⅣ層を確認。外壁から2.8mまでは余掘。	調査室報XⅨ
				2トレンチ	地表下80cmでⅡ層、110cmでⅣ層を確認。外壁から1.2mまでは余掘。	
				3トレンチ	地表下90cmでⅢ層を確認、層厚は15cm。東側外壁から1.9m、西側外壁から2.7mまでは余掘。	
				4トレンチ	地表下70cmでⅢ層を確認、層厚は20cm。外壁から1.4mまでは余掘。	
				5トレンチ	地表下75cmでⅢ層を確認、層厚は20cm。外壁から1.9mまでは余掘。	
				6トレンチ	地表下93cmで自然流路、103cmでⅢ層を確認。Ⅲ層厚は17cm。外壁から2.5mまでは余掘。	
00707		試掘	27.8	1トレンチ	地表下100cmでⅡ-2層、145cmで中世以前の自然流路を確認。外壁から1.5mまでは余掘。	調査室報XⅨ
				2トレンチ	地表下100cmでⅡ-2層、140cmで中世以前の自然流路を確認。余掘は外壁から0.75m以下。	
				3トレンチ	地表下90cmでⅡ-2層を確認。余掘りは外壁から0.7m以下。	
				4トレンチ	地表下90cmでⅡ-2層、140cmで中世以前の自然流路を確認。余掘は外壁から0.65m以下。	
				5トレンチ	地表下80cmでⅡ-2層、110cmで中世以前の自然流路を確認。余掘は外壁から0.65m以下。	
				6トレンチ	地表下100cmで自然流路を確認。Ⅳ層中に土壌化した層を確認し、縄文土器出土。余掘は外壁から0.75m以下。	
				7トレンチ	地表下85cmでⅡ-2層、135cmで中世以前の自然流路を確認。外壁から1.5mまでは余掘。	
00708		立会	13.2	1トレンチ	地表下50cmで自然流路、60cmで弥生後期前葉の竪穴式住居出土。	調査室報XⅨ
				2トレンチ	地表下67cmで弥生後期前葉の竪穴式住居出土。	
				3トレンチ	地表下70cmでⅢ層が出土し、層厚は55cm。以下で弥生中期後葉の遺構出土。	
00710	32次	本格	23	1トレンチ	古代後半～中世の小穴５、縄文後期の自然流路１出土。	調査室報XⅨ
				2トレンチ	地表下90cmでⅢ層が出土し、層厚は30cm。	
				3トレンチ	地表下92cmでⅢ層が出土し、層厚は８cm。	
				4トレンチ	地表下120cmまでⅠ層を確認。	
00711	33次	本格	161.5	中世～古代の溝４、弥生時代の土壙５・溝３、縄文晩期末の土壙３、そして縄文後期の土壙２・野外炉１が出土。		調査室報XⅨ
00712	34次	本格	533.3	1トレンチ	中世以前の水田層・溝・自然流路、弥生時代の自然流路出土。	調査室報XⅨ
				2トレンチ	地下構造物解体に伴う撹乱で堆積確認。地表下100cmでⅡ-2層、135cmで自然流路が出土。	
				3トレンチ	地下構造物解体に伴う撹乱で堆積確認。地表下80cmでⅡ-2層、110cmで自然流路が出土。	
				4トレンチ	中世以前の水田層・溝・自然流路が出土。Ⅳ層中に土壌化した堆積確認。	
				5トレンチ	中世以前の水田層・自然流路が出土。	
				6トレンチ	中世以前の水田層・自然流路が出土。	
				7トレンチ	中世以前の水田層・自然流路が出土。	
				8トレンチ	中世以前の水田層・溝・自然流路が出土。	
				9トレンチ	中世以前の水田層・自然流路、弥生時代から古墳時代の竪穴式住居出土。	
				10トレンチ	古墳時代初頭の自然流路が出土。	

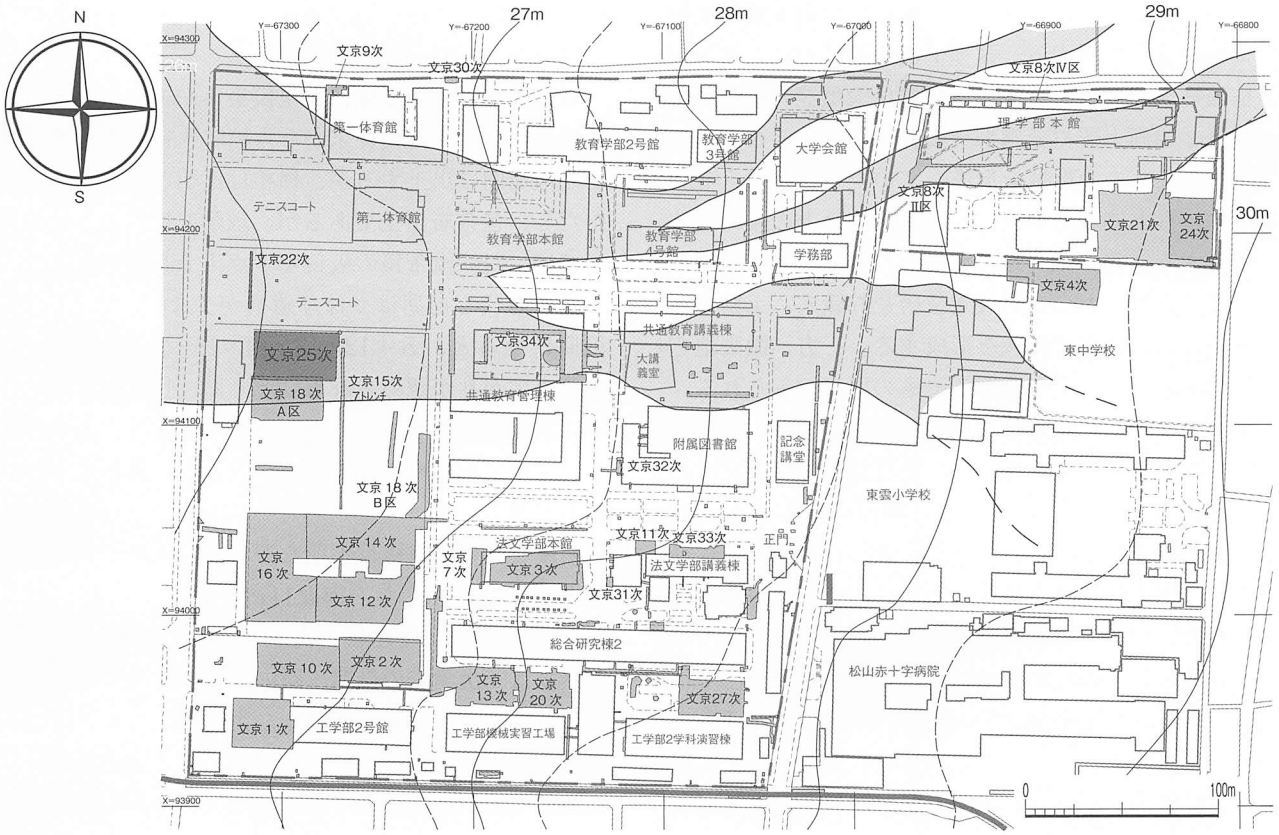


図10　城北団地の旧地形復元図（縮尺1/4,000）

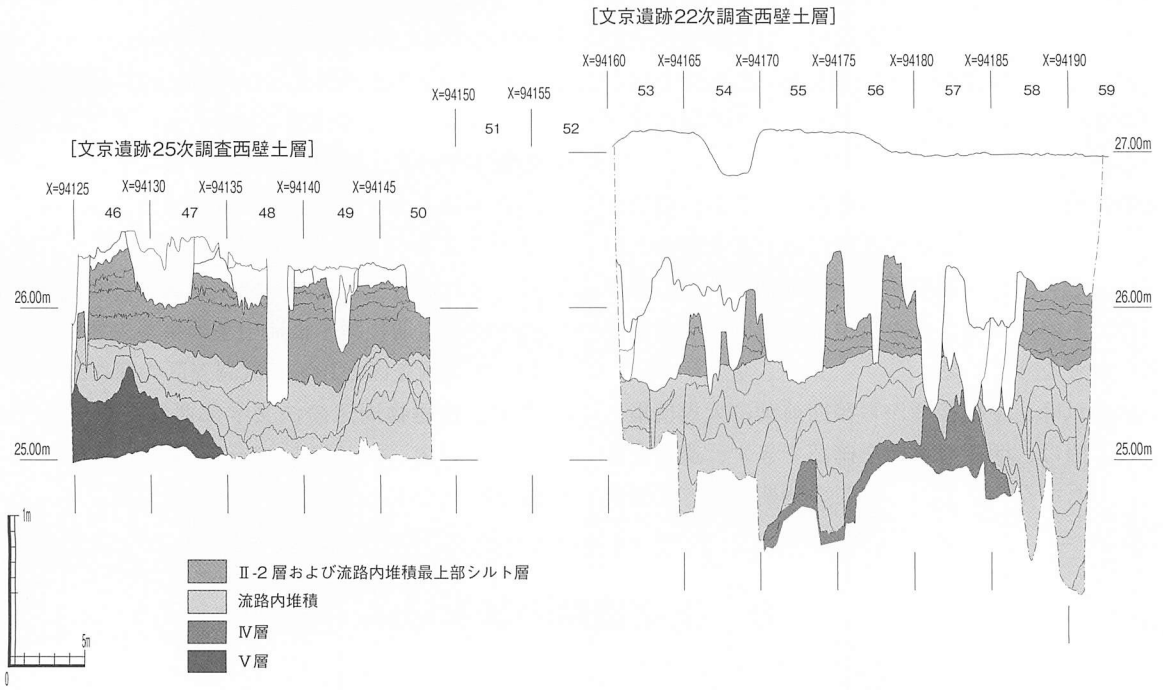


図11　文京遺跡22次調査西壁および文京遺跡25次調査西壁土層図（縮尺1/500・1/50）

を中心に、全国的にも有数の弥生時代中期後葉～後期中葉の集落が展開する。３・７次調査区では、大型掘立柱建物や方形周溝遺構、さらには大型竪穴式住居がみられ、絵画土器や分銅形土製品も集中するなど、一帯が弥生集落の中枢域を形成していたことが窺える。地形的にも上述した東西に延びる微高地上の東側高位に位置する。その微高地の西側延長部分、12・14・16次調査区では、大小の竪穴式住居や貯蔵穴、土壙、柱穴が累重し、密集居住域を形成する。一方、微高地を外れた南北では、やや異なる遺構の展開がみられる。まず、北側流路の岸辺付近の18次調査区では、倉庫とみられる掘立柱建物がみられ、集落縁辺部を倉庫域として利用していたとみられる。同様の倉庫群は、南側の２次調査区でも認められる。微高地の南側ではこの他に、20次調査区で石器製作を行った小型竪穴式住居があり、12次・13次調査区や23次調査９トレンチでは土器焼成関連資料が出土し、さらに10次調査区では鉄器・ガラス小玉が集中するなど、多様な生産活動が窺える。このように、大型掘立柱建物を中心に、大規模密集型集落が機能的に展開していた様子が復元できる。

大規模密集型の弥生集落以外の時代についても、多様な遺跡が展開する。最古の人の活動痕跡は、理学部構内24次調査区のⅣ層最下部で出土した縄文前期末の土器である。その後、縄文後期には、11次調査区や27次調査区、21･24次調査区、30次調査区、31次調査区、32次調査区の各所で土器の出土や焼土・炭化物の集中が確認されている。

縄文時代晩期になると、理学部構内で多数の遺物が出土する。そして、弥生時代前期には大溝を掘削し竪穴式住居が散在する初期農耕集落の様相が、同じ理学部構内の21・24次調査区から東中学校構内の４次調査区で明らかとなっている。

弥生前期以降、中期後葉から後期前葉に大規模集落が営まれる間は、明確な遺構を確認できず、遺物もほとんど出土してない。替わってこの時期には、北側祝谷の丘陵域に遺跡が形成され、文京遺跡が大規模化する中期後葉には、縮小傾向がある。

文京遺跡においては、大規模集落が縮小した後期後葉後以後、弥生時代終末から古墳時代初頭の遺構・遺物が散発的に出土するが、様相は不明な部分が多い。ただし、包含層出土であるが、理学部構内の24次調査区では、斜縁獣帯鏡の破鏡が１点出土している。

古墳時代も前期はやはり遺構が少ない。ところが、後期になると、５・12・13・14・16・20次調査区で、集落の広がりが認められる。とりわけ14次調査区を中心に、カマドをもった方形の４本柱竪穴式住居が密集し、フイゴ羽口や鉄滓の出土がみられ、鉄器生産の存在も予測される。

明確な古代の遺構は不明ながら、16次調査区では、長方形の掘方をもち、南北11m・東西４～4.5mの６間×３間の掘立柱建物が出土している。また、古代の遺物は25次調査の自然流路内堆積から出土し、近在での遺跡の存在が予想される。古代末から中世になると、その自然流路の埋没とともに、18・25次調査区の低地部で水田層が確認できるようになる。また、13・20・27次調査区では、基幹水路とみられる東西に走る直線的な溝が150m以上確認され、一部は近世にも及ぶ。

近世には、一部墓地としての利用が20次調査区で認められたが､基本的には農地であったらしい。そして、近代に陸軍第22連隊が松山城堀之内に設置されるに及び、練兵場として利用される。その痕跡は、縦横に走る塹壕や弾丸・薬莢の出土にみることができる。

以上のような展開を見せる文京遺跡も、多くの部分は大学建物建設等に伴い、既に失われてしまっている。これに対し、遺跡範囲確認調査により判明した、弥生時代中期後葉～後期中葉の集落主要部分が残る、14・16次調査区と18・25次調査区の間約5,525㎡と、大型掘立柱建物周辺の法文学部西側駐車場部分約1,270㎡について、グリーンゾーンとして積極的に活用を図っていくことが表明されている（図１）。

３　文京遺跡の基本層序

城北団地内の基本層序については、上位からⅠ～Ⅴ層を設定している。その上で、各調査では大区分を基本層序に準拠し、それを構成する細かな土層ごとに枝番号を付けている。基本層序の内容は、以下の通りである。

Ⅰ層：表土層にあたる瓦礫を含む造成土部分。
Ⅱ層：城北団地造成以前の灰色系の古代・中世～近代の水田層。さらにⅡ層は２分する。
Ⅱ-１層；Ⅱ層のうち、近世から近代の水田層
Ⅱ-２層；Ⅱ層のうち、古代から中世の水田層
Ⅲ層：弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を包含する黒色～暗褐色系の土層。
Ⅳ層：黄褐色系のシルト～砂質土層で、下部には礫が混じる。縄文時代の遺構・遺物が確認されている。
Ⅴ層：Ⅳ層下の花崗岩を主体とする砂礫ないし礫層。

4　文京遺跡の区割

愛媛大学構内の大半に及ぶ文京遺跡の調査にあたっては、その位置関係を、日本測地系（Tokyo Datum）平面直角座標系第Ⅳ系にしたがって、測量・記録し、独自の区割を設定している。1998年に設定した区割は、日本測地系（Tokyo Datum）平面直角座標系第Ⅳ系の、（X=93900, Y=-66800）を基点として、東から西へ向かって５ｍおきに、AA・AB・AC……AY・AZ・BA・BB……EN・EO・EP、南から北へ向かって５ｍおきに、1・2・3・4・5・6……15・116・117・118・119・120とし、両者を組み合わせた５ｍ方眼の調査区画によるものである。さらに必要に応じて、この区画内を１ｍ方眼に分け、南東隅から西に１～５、そして北側列を６～10と、北西隅に到る25区画に細分する。したがって、この１ｍ方眼を示す場合は、「DC27-14」のように呼称することとなる。

なお、城北団地内には、これらの区割および測量の基準として、以下の３級基準点を設置・利用している（図12）。

No. 1 ：X ＝94189.370, Y ＝－67208.921, H ＝28.274
No. 2 ：X ＝94178.099, Y ＝－67052.098, H ＝29.342
No. 3 ：X ＝93971.166, Y ＝－67057.373, H ＝29.209
No. 5 ：X ＝93976.415, Y ＝－67214.492, H ＝28.740

[既刊文京遺跡報告書]
松山市文化財調査報告書11：森光晴・大山正風・西田栄1976『文京遺跡』
松山市文化財調査報告書28：栗田茂敏編1992『文京遺跡－第２・３・５次調査－』
松山市文化財調査報告書30：栗田茂敏1992「文京遺跡４次調査」（梅木謙一・宮内慎一編）『道後城北遺跡群』
愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ：宮本一夫編1990『文京遺跡第８・９・11次調査』
愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ：宮本一夫編1991『文京遺跡第10次調査』
愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅴ：田崎博之編1997『愛媛大学構内遺跡調査集報Ⅰ－1987～1994年度における立会・試掘確認調査成果の報告－』
愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅶ：吉田広編2001『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－1995・1996年度－』
愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅷ：田崎博之編2002『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－1997・1998年度－』
愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅹ：田崎博之編2003『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－1999・2000年度－』
愛媛大学埋蔵文化財調査報告ⅩⅠ：吉田広編2004『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2001・2002年度－』
愛媛大学埋蔵文化財調査報告ⅩⅡ：田崎博之編2004『文京遺跡Ⅲ－文京遺跡13次調査報告－』
愛媛大学埋蔵文化財調査報告ⅩⅢ：田崎博之編2005『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2003年度－』
愛媛大学埋蔵文化財調査報告ⅩⅣ：吉田広編2005『文京遺跡Ⅳ－文京遺跡20次調査・文京遺跡23次調査－』
愛媛大学埋蔵文化財調査報告ⅩⅤ：吉田広編2006『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2004年度－』
愛媛大学埋蔵文化財調査報告ⅩⅥ：田崎博之編2007『文京遺跡Ⅴ－文京遺跡18次調査報告－』
愛媛大学埋蔵文化財調査報告ⅩⅦ：田崎博之編2007『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2005年度－』
愛媛大学埋蔵文化財調査報告ⅩⅧ：田崎博之編2008『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2006年度－』
愛媛大学埋蔵文化財調査報告ⅩⅨ：田崎博之編2009『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2007年度－』
愛媛大学埋蔵文化財調査報告ⅩⅩ：吉田広編2009『文京遺跡Ⅵ－文京遺跡25次調査－』（本書）

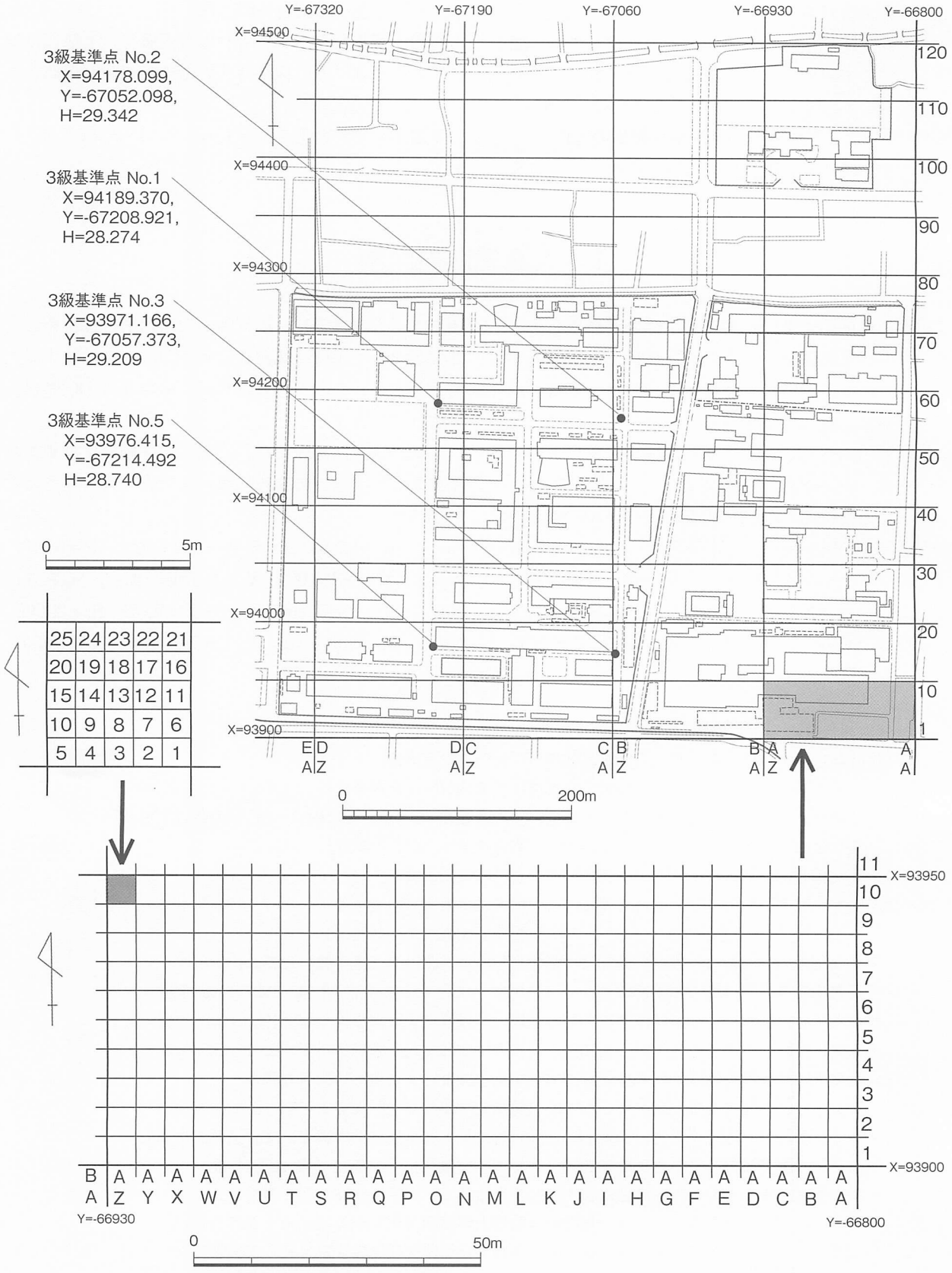


図12　文京遺跡の区割（縮尺1/5,000、1/1,000、1/200）

Ⅱ　調査の記録

１　調査の概要

(1)　土層の堆積状況

（図13～15、巻頭図版３－２・３、図版11-２）

南に隣接する18次調査地点Ａ区が、東西に延びる微高地から谷状の窪地への転換点にあたるのに対し、25次調査地点は、谷状の窪地内に位置する。そのため、各層とも傾斜は大きくなく、比較的水平に近い堆積をなしている。

表土層であるⅠ層は、旧グラウンド真砂土層・砕石層の下に、城北団地造成土や配管埋土、戦前の演習用塹壕埋土等があり、現地表下120cm前後にまで及ぶ（図版１）。

その下は、城北団地造成前の耕作土層であるⅡ層が、調査区内全面に広がる。Ⅱ層は、18次調査区の北壁にあたる情報処理センター建物北側余掘南壁と、表土掘削後の調査区西壁際及び北壁際断ち割りにおいて、18次調査同様、本調査区においても砂礫層を挟んで上下に大別できた。上部のⅡ-１層は、数枚の連続した耕作土層であるが、出土遺物から近世から城北団地造成直前までの水田関連土層である。調査時には、Ⅱ-１層をⅡ層と呼称して遺物を取り上げている。一方、砂礫層を含んだ下部のⅡ-２層は、上部のⅡ-１層に比べて色調がやや暗く、土質のしまりも良い。18次から連続する３枚の水田層が認められ、出土遺物からも中世に遡る。それぞれ、上層水田、中層水田、下層水田である。

調査段階では、上中下それぞれの水田層に関わる土層を、ａ層・ｂ層・ｃ層とし、さらに覆土層を１層、畦畔盛上土層を２層、耕作土層を３層、畦畔下部層を４層として、a1層あるいはc3層等として遺物取り上げの層名として用いた。ただし、３層と４層はほとんど区別することなく、３・４層等として、水田面単位でなく、区割単位で取り上げを行っている。また、耕

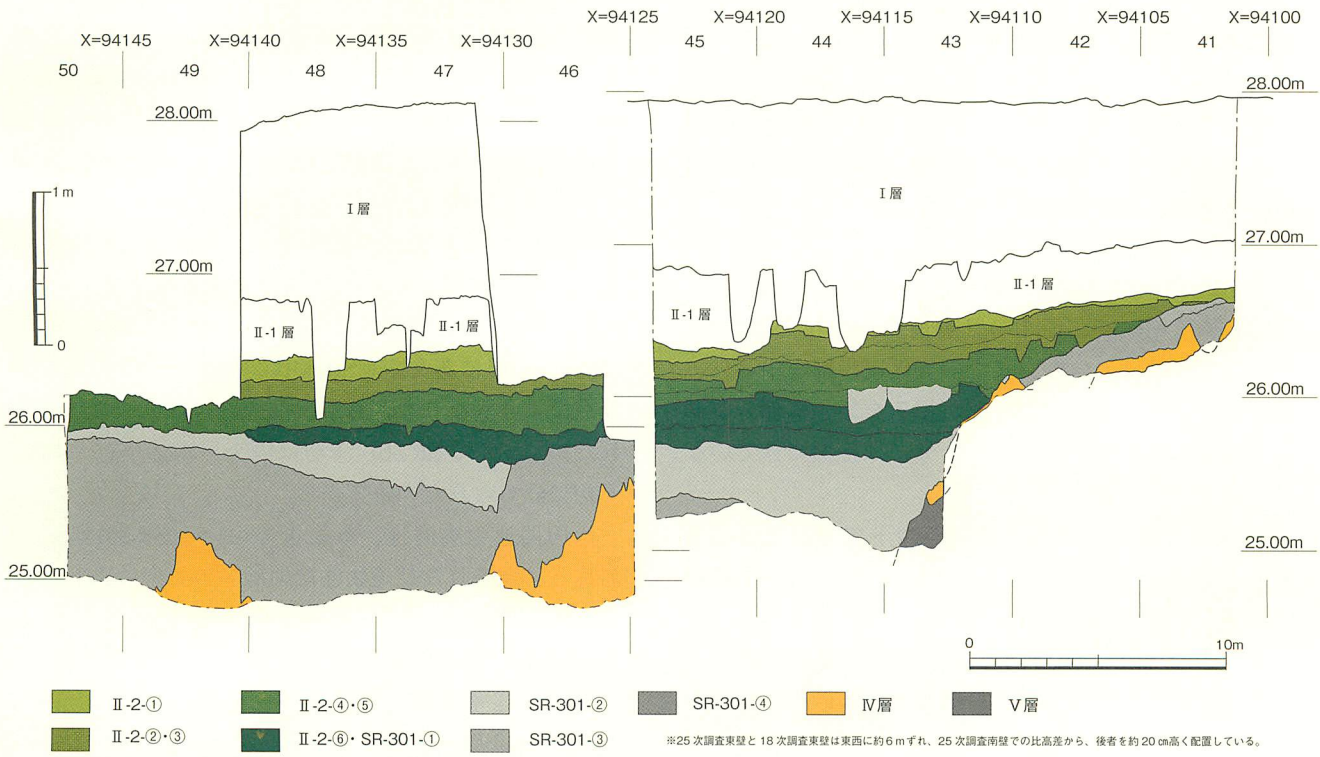


図13　東壁土層模式図（縮尺1/300・1/50）

作土層部分と床土部分の明確な区分は行えてなく、一括して耕作土として報告する。

本報告で用いる水田関連土層の名称と、調査時及び遺物注記の層名の対応は以下の通りである。

Ⅱ-2-①層＝上層水田覆土層
←調査時 a1層
Ⅱ-2-②層＝上層水田層
←調査時畦畔部 a2層、耕作土 a3・4層
Ⅱ-2-③層＝中層水田覆土層
←調査時 b1層
Ⅱ-2-④層＝中層水田層
←調査時畦畔部 b2層、耕作土 b3・4層
Ⅱ-2-⑤層＝下層水田覆土層
←調査時 c1層
Ⅱ-2-⑥層＝下層水田層
←調査時畦畔部 c2層、耕作土 c3・4層

また、水田面上の覆土層である、Ⅱ-2-①層・Ⅱ-2-③層・Ⅱ-2-⑤層は、まず水田畦畔検出までは城北団地区割単位で取り上げたが、検出後は水田面単位での取り上げに変えた。そのため、前者を水田覆土の上部、後者を下部として報告する。

調査進行段階では、それぞれ土層の違いを確認しながら、掘り下げを順次進めたが、土層実測の際に、各水田面の記録に留まったため、上部水田耕作土・床土と下部水田覆土の層界を漏らしてしまっている。Ⅱ-2-①層は記録しているものの、Ⅱ-2-②層とⅡ-2-③層、Ⅱ-2-④層とⅡ-2-⑤層、そしてⅡ-2-⑥層と後述する自然流路埋土最上部層であるSR-301-①層が、土層図において一括されている。

各土層の特徴は以下の通り。

Ⅱ-2-①層は、にぶい黄色から黄褐色の砂質土で、Ⅱ-1層に比べて、径1～2㎜前後の砂粒・砂礫を、特に層下部に多く含む。また調査区南半部を中心に、層下部は鉄分の沈着により明黄褐色を呈する部分がある。ただし、平面的広がりを十分には把握できていなかった可能性が高い。

Ⅱ-2-②層は、黄褐色砂質シルトで、径1㎜前後の砂粒を多く含む。ただし、その量はⅡ-2-①層に及ばず、粘性がややある。

Ⅱ-2-③層も、土層図ではⅡ-2-②層と一括した黄褐色砂質シルトであるが、その下部の砂粒・砂礫を多く含む部分にあたる。

Ⅱ-2-④層は、黄褐色砂質シルト。径1㎜前後の砂粒を多く含む。下部は鉄分の沈着により、明黄褐色を呈する。なお、調査区東部では、Ⅱ-2-④層中にさらに水田面とみられる層界が一部認められ、調査区西部では、Ⅱ-2-④層とⅡ-2-⑤層の間で一部遺構が出土している。

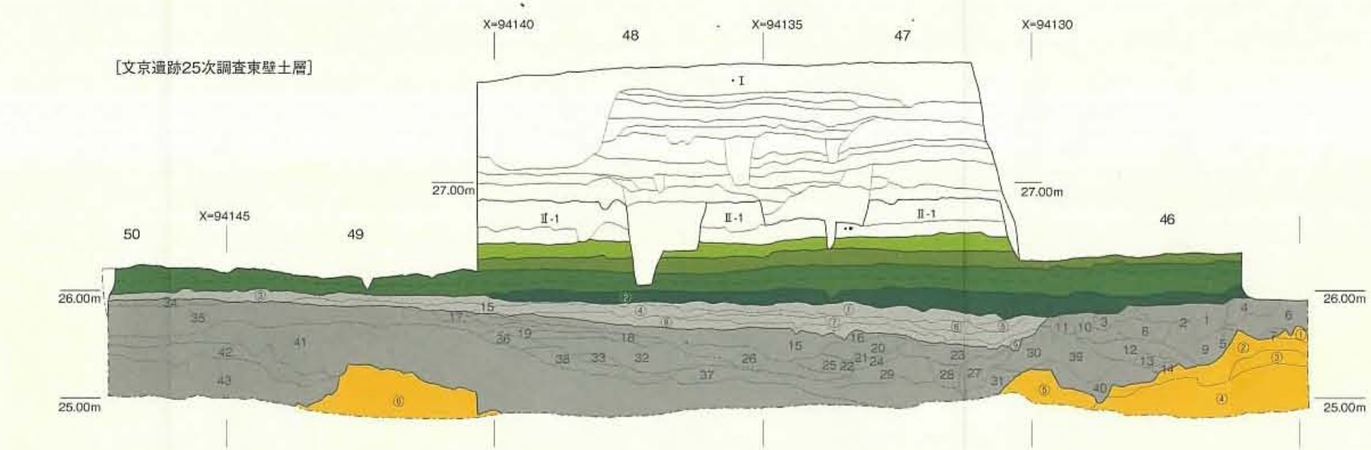
Ⅱ-2-⑤層は、土層図でⅡ-2-④層と一括した黄褐色砂質シルト。そのうち下部の、径1㎜前後の砂粒を多く含む部分で、鉄分の沈着により、明黄褐色を呈する。

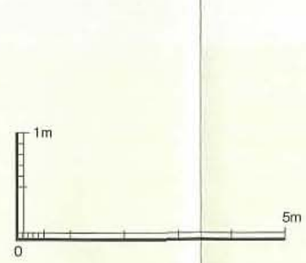
Ⅱ-2-⑥層は、にぶい黄色から黄褐色シルトで、上部のⅡ-2-④・⑤層に比べて、砂粒・砂礫の割合は少なく、径1～20㎜前後の円礫を少量含む。なお、東部では、1㎜前後の砂粒層を斑状に含み、径5～20㎜前後の砂礫を多く含む、より砂質の強い層となり、北東部ではⅡ-2-⑥層自体が存在しない範囲がある。後述するSR-301-①層と土層図では一括しているが、調査段階では、攪拌を受けた上部10cm前後をⅡ-2-⑥層としている。

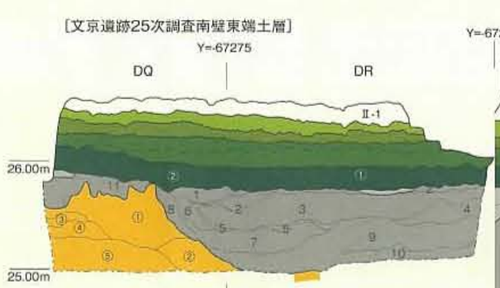
以上の水田関連土層の下は、自然流路SR-301の堆積となる（図版9－1）。まず、最上部は下層水田層の基盤層ともなるシルト質土が堆積する。調査段階では、Ⅱ-2-⑥層に比べて、攪拌をほとんど受けていないと判断した土層である。ほぼ調査区全面に広がり、10～40cmの厚さがある。調査時点ではd層として、遺物の取り上げを行い、報告ではSR-301-①層と大別する層である。その下は、流水による砂・砂礫・塊石層となり、調査時点ではe層として大別した。そのうち最上部の、塊石を含まず粒度の細かい砂・砂礫層をe1層、砂・砂礫に人頭大前後の塊石を多く含む砂礫層をe2層、人頭大前後の塊石間に、再堆積した城北団地基本層序のⅢ・Ⅳ層のブロックを混在するe3層とした。それぞれ、本報告のSR-301-②層、SR-301-③層、SR-301-④層にあたる。SR-301-②層と③層は、厚さが地点により異なりながらも、調査区ほぼ全域で認められたのに対し、SR-301-④層は調査区南西隅部と他わずかに認められたのみである。

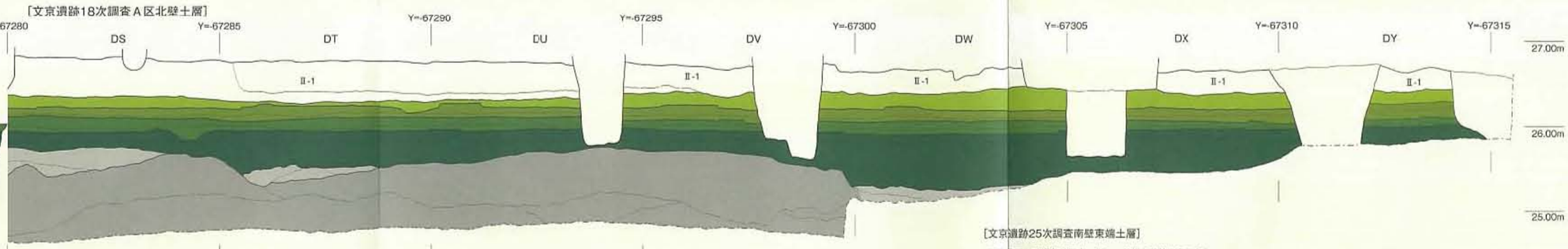
水田関連土層同様、本報告で用いるSR-301埋土の名称と、調査時及び遺物注記の層名の対応は以下の通りである。

SR-301-①層＝シルト質土層　←調査時 d 層
SR-301-②層＝砂・砂礫層　←調査時 e1層
SR-301-③層＝砂礫・塊石層　←調査時 e2層
SR-301-④層＝Ⅲ・Ⅳ層再堆積含　←調査時 e3層









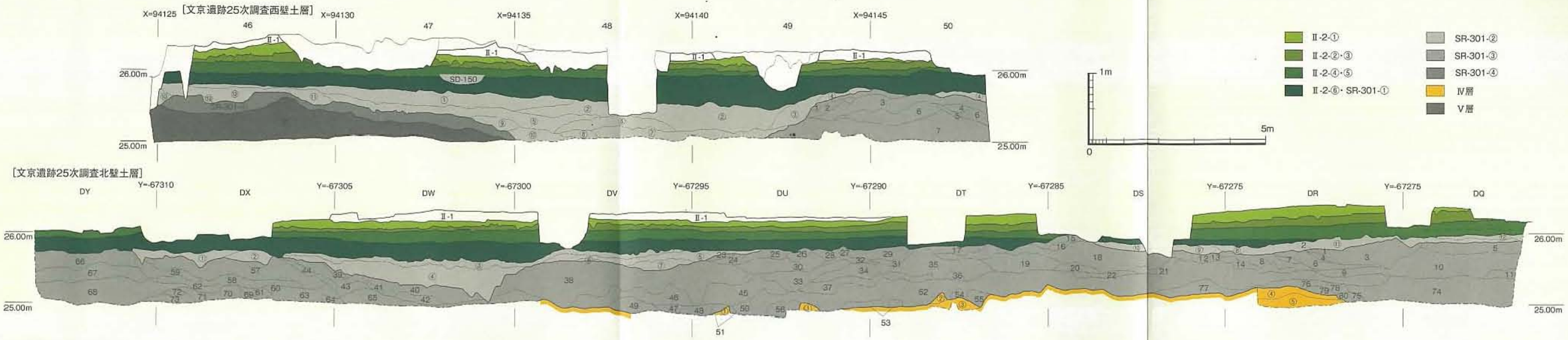
[文京遺跡25次調査東壁土層]

Ⅱ-2-①層：黄褐色砂質土。径1㎜前後の砂粒を多く含む。
Ⅱ-2-②・③層：黄褐色砂質シルト。径1㎜前後の砂粒を含むが上層に比べ割合は少ない。やや粘性あり。
Ⅱ-2-④・⑤層：黄褐色砂質シルト。径1㎜前後の砂粒を含む。やや粘性は弱い。
Ⅱ-2-⑥層・SR-301-①層：にぶい黄色砂質シルト。きめは細かい。径1㎜前後の砂粒を含む。
SR-301-②層
①：暗灰黄色砂質土。きめは細かく、径1㎜前後の砂粒を含む。
②：灰黄色砂質土。きめは細かい。
③：灰黄色砂。灰白色砂を若干含み、径0.5～2㎜の砂粒を多くラミナ状に含む。
　黄褐色シルトの1㎝大のブロックを少し含む。
④：にぶい黄色砂。きめ細かい砂質土。しまりややあり。
⑤：上部は明黄褐色、下部は暗灰黄色の砂質土。きめは細かい。
⑥：にぶい黄色砂質土。きめは細かい。
⑦：暗灰黄色砂質土。径1㎜前後の砂粒を少量含む。
⑧：暗灰黄色砂質土また浅黄色砂質土。きめは細かい。
⑨：灰黄褐色シルト。
SR-301-③層
1：灰黄褐色シルト。小指先大の円礫少量含む。
2：灰黄色砂質土。径2～3㎜の砂粒混。
3：暗灰黄色砂礫。径1㎜～小指先大の円礫。
4：黄灰色砂質土。きめは細かい。
5：黒褐色シルト。
6：黄灰色砂礫。小指大の砂礫に、褐灰色シルトのブロックが混じる。
7：明黄褐色シルトと褐灰色シルト。下層は黄灰色砂質土も混じる。
8：灰黄色砂質土。きめは細かい。
9：浅黄色砂質土。きめは細かい。小指先大の円礫少量混じる。
10：灰黄色砂質土。きめは細かい。
11：褐灰色砂質土とにぶい黄色砂質土の丸いブロック混じる。親指先大の円礫。
12：灰黄色砂礫。径2㎜から親指先大の円礫。
13：浅黄色砂質土。
14：灰黄色砂質土。きめは細かい。
15：暗灰黄色砂。径0.5～3㎜の砂粒・砂礫に、細かく均質な砂粒をラミナ状に少し含む。しまり弱い。
16：浅黄色から黄灰色砂質土。きめは細かい。
17：にぶい黄色砂。径0.1㎜前後の細かく均質な砂。径3～5㎜の砂礫を少し含む。
18：にぶい黄色砂質土。きめは細かい。
19：にぶい黄色砂質土。径0.1～0.5㎜の砂粒、しまり弱い。
20：黄灰色砂質土。きめは細かい。
21：黄褐色シルト。
22：灰黄色砂質土。きめは細かい。
23：にぶい黄色砂質土。径1㎜前後の砂粒～小指先大の円礫を含む。
24：灰黄色砂質土。きめは細かい。
25：灰白色砂質土。径1～2㎜前後の砂粒主体で、きめはやや粗い。
26：灰白色砂質土。
27：黄褐色シルト。
28：黄灰色砂質土。
29：きめの細かい。灰黄色砂質土を主体に、にぶい黄色砂質土のブロックが混じる。
30：灰黄色砂質土。
31：黄灰色砂質土。小指先大～親指先大の円礫混じる。
32：黄灰色砂質土。小指先大～親指先大の砂礫を多く含む。
33：灰黄色砂礫。径1㎜前後の砂粒に径5㎝以下の砂礫混じる。
34：灰黄色砂質土。きめは細かい。
35：黄褐色砂質土。径0.5～1㎜の砂粒を主体に径5㎜以下の砂礫多く含む。径5㎜前後の黄褐色シルトブロックを少し含む。しまりあり。
36：にぶい黄色砂。径0.5～5㎜の砂粒・砂礫を主体に、径1～5㎝の円礫多く含む。しまりやや弱い。
37：灰黄色砂質土。
38：黄灰色砂質土。きめは細かい。
39：明黄褐色砂質土。きめは細かい。
40：にぶい黄色砂質土。小指先大～親指先大の円礫含む。
41：灰黄色砂礫。小指先大の円礫。
42：にぶい黄色砂。径1～3㎜の砂粒・砂礫を主体に、径1～2㎝の砂礫、径0.1㎜前後の黄褐色砂、黒褐色シルト（Ⅲ層）のブロックを多く含む。
43：灰白色砂質土。きめは細かい。小指先大の円礫をごく少量含む。
Ⅳ層
①：浅黄色砂質土。きめは細かい。
②：浅黄色砂質土。小指先大の円礫少量含む。
③：明黄褐色砂質土。
④：暗灰黄色砂質土。小指先大～親指先大の円礫。
⑤：明黄褐色砂質土。きめは細かい。
⑥：注記漏れ。

[文京遺跡25次調査南壁東端土層]

Ⅱ-2-②層：黄褐色砂質土。径1㎜前後の砂粒を多く含む。
Ⅱ-2-②・③層：黄褐色砂質シルト。径1㎜前後の砂粒を含むが上層に比べ割合は少ない。やや粘性あり。
　中位でシルト質が強く、下に鉄分とマンガン分の沈着があり、部分的にもう1面水田存在する可能性あり。
Ⅱ-2-④・⑤層：黄褐色砂質シルト。径1㎜前後の砂粒を含む。やや粘性は弱い。
Ⅱ-2-⑥層・SR-301-①層：①にぶい黄色～黄褐色砂質シルト。きめは細かい。径1㎜前後の砂粒を含み、この位置では砂質が増す。
　②黄褐色砂質土。①に比べ砂質がかなり強く、径1㎜前後の砂粒を含み、径5～20㎜の砂礫を多く含む。
SR-301-②層：黄褐色砂。径0.1㎜以下の細かく均質な砂。部分的に径1㎜前後の砂粒をラミナ状に含む。
SR-301-③層
1：黄灰色砂質土。下部に褐色シルトと、にぶい黄褐色シルトを3㎜大のブロック状に含み、粘性高い。径5㎜以下の砂礫を多く含む。
2：黄褐色砂。径5～20㎜の砂礫を多く含む。明黄褐色シルト質土の5㎜大のブロックを多く含む。しまりややあり。
3：黄灰色砂。径5㎜以下の砂粒・砂礫がラミナ状に重なる。しまり弱い。
4：黄灰色砂。径0.1㎜以下のきめ細かく均質な砂がラミナ状に重なる。
5：暗灰黄色砂質シルト。きめ細かな砂にシルト質が加わる。
6：灰黄褐色砂。径1～5㎜の砂粒・砂礫を主体に、径5～10㎜の砂礫をラミナ状にやや多く含む。しまり弱い。
7：灰黄褐色砂。径1～5㎜の砂粒・砂礫を主体に径5～10㎜の砂礫をラミナ状にやや含む。しまり弱い。
8：暗灰黄色砂。径1～10㎜の砂粒・砂礫を主体に、褐色からにぶい黄褐色シルトの5㎜大以下のブロック含む。しまりややあり。
9：灰黄褐色砂礫。径0.5～1㎜の砂粒を主体に、径5㎝以下の砂礫を多く含み、しまり弱い。
10：灰黄褐色砂。径0.5～1㎜の砂粒を主体に。径5㎝以下の砂礫を少量含み、にぶい黄褐色シルトの10㎝大以下のブロックを多く含む。
11：黄灰色砂礫。小指大の砂礫に、褐灰色シルトのブロックが混じる。
Ⅳ層
①：にぶい黄褐色砂質シルト。若干色調は薄く、砂質が強い。
②：灰黄褐色砂。径0.1㎜前後の砂層をラミナ状に多く含み、径1～10㎝の砂礫を多く含む。
③：浅黄色砂質土。小指先大の円礫少量含む。
④：明黄褐色砂質土。
⑤：暗灰黄色砂質土。小指先大～親指先大の円礫。

図14　文京遺跡25次調査の土層図 (1) －東壁・南壁－（縮尺1/100・1/50）



[文京遺跡25次調査西壁土層]

Ⅱ-2-①層：にぶい黄色～黄褐色砂質土。Ⅱ-1層に比べ径１～２㎜の砂粒を多く含む。下半は鉄分沈着。
Ⅱ-2-②・③層：黄褐色砂質シルト。径１㎜前後の砂粒を多く含む。
Ⅱ-2-④・⑤層：黄褐色砂質シルト。径１㎜前後の砂粒を多く含む。下半は鉄分沈着。
SD-150埋土：暗灰黄色砂質土。径１～３㎜の砂粒・砂礫を多く含む。
Ⅱ-2-⑥層・SR-301-①層：にぶい黄色～黄褐色砂質シルト。きめは細かい。径１㎜前後の砂粒を含む。
SR-301-②層
①：暗灰黄色砂質土。きめは細かい。明黄褐色質土の小指～親指先大程度のブロックが混じる。
②：暗灰黄色砂質土。①に比べ明黄褐色砂質土のブロックを含まず、砂粒が少し混じる。細かい黄灰色砂をラミナ状にやや多く含む。
③：暗灰黄色砂質土。①に比べ１㎝前後の小石を少量含み、同大の明黄褐色砂質土のブロックを少量、黄灰色砂を斑状に含む。しまりややあり。
④：暗灰黄色砂質土。③に比べ、径５～１０㎜の砂礫を多く含み、黄灰色砂は含まない。しまりあり。
⑤：暗灰黄色砂質土。①よりさらに砂質強く、明黄褐色ブロックは含まない。層下部に淺黄色～明黄褐色の砂質土塊を一部含む。
⑥：暗灰黄色砂質土。⑤に比べ細かな黄灰色砂が多く混じり、径0.5～５㎜の黄灰色砂をラミナ状にやや多く含む。
⑦：灰黄色砂質土。⑤よりさらに黄灰色砂を含む。
⑧：黄灰色砂。径0.５～５㎜の砂粒・砂礫からなり、しまり弱い。ブロック状に黄灰色砂を少し含む。
⑨：にぶい黄色砂質シルト。きめは粗かく小指先大の円礫を含む。
⑩：にぶい黄色砂質シルト。⑨とほぼ同じだが、ややきめの細かい径２～３㎜の砂礫を含む。
⑪：灰黄色砂質土と明黄褐色砂質土の混在層。Ⅲ・Ⅳ層の再堆積。
⑫：暗灰黄色砂礫。径１～３㎜の砂粒・砂礫。
⑬：灰黄色砂質土と明黄褐色砂質土の混在層。Ⅲ・Ⅳ層の再堆積。
SR-301-③層
１：暗灰黄色砂礫。径0.5～５㎜の砂粒・砂礫を主体に、径３㎝前後の小礫を多く含み、しまりあり。
２：灰黄色砂質土。径0.１～０.5㎜の砂粒を主体に、径１㎜前後の砂粒と径１㎝前後の小石をラミナ状に含む。
３：黄灰色砂礫。径0.5～３㎜の砂粒・砂礫に、径３㎜前後の円礫多く含む。黄褐色砂質土の５㎝大の円形ブロックも少量含む。
４：黄灰色砂礫。径0.5～３㎜の砂粒・砂礫に、径５㎜前後の円礫多く含む。しまり弱い。
５：灰黄色砂。径１㎜以下の砂粒からなり、６に比べて細かく粘性ややあり。
６：灰黄色砂。径0.5～５㎜の砂粒・砂礫。明黄褐色砂質土を径５㎜前後のブロック状に少量含む。
７：黄灰色砂礫。０.5～３㎜の砂粒・砂礫に、径１～５㎜大の円礫多く含み、20㎝大の円礫も含む。
SR-301-④層：暗灰黄色砂質土。径0.5～２㎜の砂粒を主体に、20㎝大までの円礫を多く含み、Ⅲ・Ⅳ層の再堆積土が５㎝前後のブロック状に混じる。しまりあり。
Ⅴ層：灰黄色砂。径0.5～３㎜の砂粒を主体に、20㎝大までの円礫を含む。部分的に、細かな砂層や３㎝前後の円礫層をラミナ状に含む。しまり弱い。

[文京遺跡25次調査北壁土層]

Ⅱ-2-①層：にぶい黄色～黄褐色砂質土。Ⅱ-1層に比べ径１～２㎜の砂粒を多く含む。下半は鉄分沈着。
Ⅱ-2-②・③層：黄褐色砂質シルト。径１㎜前後の砂粒を多く含む。
Ⅱ-2-④・⑤層：黄褐色砂質シルト。径１㎜前後の砂粒を多く含む。下半は鉄分沈着。
Ⅱ-2-⑥層・SR-301-①層：にぶい黄色～黄褐色砂質シルト。きめは細かい。径１㎜前後の砂粒を含む。
SR-301-②層
①：にぶい黄色砂質土。径１㎜前後の砂粒多く含む。まれに小指先大の円礫あり。層下面に鉄分沈着。
②：にぶい黄色砂質土。一部鉄分の沈着により橙色。径１㎜前後の砂礫～小指先大の円礫含む。
③：淺黄色砂質土。径１㎜前後の砂粒混じる。下層に比べて砂質強い。
④：にぶい黄色砂質土。径１㎜前後の砂粒混じる。
⑤：にぶい黄色砂。径0.1㎜以下のきめ細かい砂。上層に比べシルト質土ほとんど含まず、灰白色砂をラミナ状に多く含み、砂質強い。
⑥：暗灰黄色砂。径0.5㎜以下の砂粒からなり、径0.5～１㎜の砂粒をラミナ状に含む。
⑦：黄灰色砂。径0.5～２㎜の砂粒からなり、ラミナ状に上層のにぶい黄色砂を多く含む。
⑧：淺黄色砂質土。径１㎜前後の砂粒が少量混じる。
⑨：灰黄色砂礫。明黄褐色砂質土の丸いブロックを少量含む。
⑩：淺黄色砂質土。径１～３㎜の砂粒・砂礫含む。
⑪：淺黄色砂質土。径１㎜～小指先大の灰黄色砂礫、径２～５㎜前後の明黄褐色砂質土ブロックが混じる。
⑫：灰黄色砂。下層灰白色砂を若干含み、径0.5～２㎜の砂をラミナ状に多く含む。黄褐色シルトの１㎝大ブロックを少し含む。
SR-301-③層
１：灰白色砂質土。小指先大の円礫を少量含む。
２：灰白色砂礫。小指先大の円礫。
３：灰黄色砂質土。きめ細かい。小指先大の円礫が少量混じる。
４：淺黄色砂質土。きめは細かい。
５：黄褐色。径0.5～１㎜の砂粒を主体に、径１～５㎜前後の砂礫を多く含む。黄褐色シルトの５㎜大前後のブロックを少量含む。しまりあり。
６：灰白色砂質土。径1㎜前後の砂粒を主体に、小指～親指先大の円礫が混じる。
７：淺黄色砂質土。径２㎜～親指先大の灰黄色砂礫が混じる。
８：注記漏れ。
９：注記漏れ。
10：灰黄色砂礫。小指先大の円礫からなる。
11：にぶい黄色砂。径１～３㎜の砂粒・砂礫を主体に、10～20㎜大の黄褐色砂礫、黒褐色シルト（Ⅲ層）のブロックを多く含む。
12：灰白色砂礫。径１㎜前後の砂粒と小指先大の円礫含む。
13：灰白色砂質土。小指先大の円礫を少量含む。
14：灰黄色砂質土ブロックに灰白色砂質土が混じる。小指先大の円礫を多く含む。
15：淺黄色砂礫。径１㎜前後の砂粒～小指先大の円礫。
16：暗灰黄色砂質土。きめは細かい。
17：灰白色砂質土。径１～２㎜の砂粒からなる。小指先大の円礫を少量含む。
18：灰黄色砂質土。きめは細かい。
19：灰白色砂質土。きめは細かい。
20：灰黄色砂質土。きめは細かい。
21：灰黄色砂質土。きめは細かい。
22：灰色砂質土。
23：淺黄色砂質土。径２～３㎜の砂礫を多く含む。
24：黄灰色砂礫。径1㎜前後の砂粒から親指先大の円礫含む。
25：にぶい黄色砂質土。径１～２㎜の砂粒、明黄褐色砂質土の丸いブロックを含む。
26：淺黄色砂礫。径1㎜前後の砂粒から親指先大の円礫含む。
27：淺黄色砂礫。径1㎜前後の砂粒から親指先大の円礫含む。
28：にぶい黄色砂質土。径１～３㎜の砂粒・砂礫からなる。
29：淺黄色砂質土。径１～２㎜の砂粒からなる。
30：暗灰黄色砂礫。径１㎜前後の砂粒から親指先大の円礫含む。
31：灰黄色砂質土。きめは細かい。
32：暗灰黄色砂質土。きめは細かい。
33：灰黄色砂礫。径１㎜前後の砂粒から親指先大の円礫を含み、黄褐色シルトの丸いブロックを少量含む。
34：灰黄色砂質土。きめ細かい。
35：灰白色砂礫。径３㎜前後の砂礫から親指先大の円礫含む。
36：灰黄色砂質土。暗灰黄色シルトのブロックが混じる。
37：暗灰黄色シルト主体で、小指先大の円礫が混じる。
38：黄灰色砂礫。径２～３㎜の砂粒・砂礫から親指先大の円礫含む。
39：黄灰色砂礫。径１～２㎜の砂粒・砂礫。
40：黄灰色砂礫。径１～２㎜の砂粒から親指先大の円礫含む。
41：黄灰色砂礫。径１～２㎜の砂粒から親指先大の円礫含む。
42：黄色砂礫。径１～２㎜の砂粒から親指先大の円礫含む。
43：淺黄色砂質土。径１㎜前後の砂粒を多く含む。
44：淺黄色砂質土。きめは細かい。
45：にぶい黄色砂質土。わずかに粘性あり。砂粒をほとんど含まない。
46：黄灰色砂礫。にぶい黄色砂質～シルト質土を径３～５㎝のブロック状に多数含み、５㎝以下の砂礫からなる。
47：灰黄色砂。径0.1～１㎜の砂粒からなり、しまり弱い。
48：暗灰黄色砂。シルト質土に近い細かな砂。
49：黄灰色砂礫。径５㎜以下の砂粒・砂礫からなり、しまりやや弱い。
50：灰色砂質土。きめは細かい。
51：淡黄色砂礫。径１㎜前後の砂粒から親指先大の円礫含む。
52：灰黄色砂礫。小指～親指先大の円礫に、きめの細かい灰白色砂質土を含む。
53：暗灰黄色シルト。
54：暗灰黄色シルトブロック。
55：暗灰黄色シルトに黄褐色砂質土が混じる。
56：暗灰黄色シルト。
57：黄灰色砂礫。径１㎜前後の砂粒から親指先大の円礫を多数含む。
58：注記漏れ
59：淺黄色砂質土。きめは細かい。
60：淺黄色砂質土。きめは細かい。
61：黄灰色砂礫。径２～３㎜の砂粒から親指先大の円礫を多数含む。
62：黄褐色砂質土。きめは細かい。小指先大の円礫を少量含む。
63：灰黄色砂礫。径１～２㎜の砂粒から親指先大の円礫。
64：黄褐色砂質土。きめは細かい。
65：にぶい黄色砂礫。径１㎜前後の砂粒に親指先から握り拳大の円礫含む。
66：黄灰色砂礫。径0.5～３㎜の砂粒・砂礫に、径３㎜前後の円礫多く含む。黄褐色砂質土の５㎝大前後の円形ブロックも少量含む。
67：灰黄色砂。径0.5～５㎜の砂粒・砂礫。明黄褐色砂質土が５㎜大前後のブロック状に少し混じる。
68：黄灰色砂礫。径0.5～３㎜の砂粒・砂礫に、１～５㎝大の円礫多く含む。
69：にぶい黄色砂質土。きめは細かい。
70：灰黄色砂礫。径１㎜前後の砂粒と小指先大の円礫。
71：黄褐色砂質土。きめは細かい。
72：灰黄色砂礫。径２～３㎜の砂粒・砂礫から親指先大の円礫多く含む。
73：にぶい黄色砂質土。きめは細かい。
74：灰白色砂質土。きめは細かい。小指先大の円礫をごく少量含む。
75：灰白色砂礫。親指先大の円礫。
76：灰白色砂質土。径１～２㎜の砂粒からなる。層下部に小指先大の円礫が見られる。
77：にぶい黄色砂質土。きめはやや粗い。小指先大の円礫を少量含む。
78：灰黄色砂質土。きめ細かい。
79：灰黄色砂質土。小指先大から径４～５㎝の円礫含む。
80：暗灰黄色粘土ブロック。

Ⅳ層
①：明黄褐色砂質土。きめは細かい。
②：にぶい黄色シルト。
③：淺黄色砂質土。きめは細かい。
④：にぶい黄色砂質土。径１～２㎜の砂粒からなり、部分的に褐色。
⑤：灰白色砂質土。径１～２㎜の砂粒を主体に、小指先大の円礫少し含む。

図15　文京遺跡25次調査の土層図(2)ー西壁・北壁ー（縮尺1/100・1/50）

図16　文京遺跡25次調査・18次調査のⅡ-2-②層（上層水田）出土遺構配置図（縮尺1/300）

(2)　遺構と遺物

25次調査ではほぼ全域で、Ⅱ-2層中のⅡ-2-②層上面、Ⅱ-2-④層上面、Ⅱ-2-⑥層上面で、それぞれ水田面が出土した。そして、Ⅱ-2層下では、自然流路が出土した。いずれも、南側18次調査から連続する遺構群である。また、各水田層および水田覆土層から遺物が出土するとともに、とりわけ自然流路からは多くの遺物が出土した。

［上層水田］

Ⅱ-2-②層上面では、畦畔で区画された水田面を調査区全域で確認した（図16、図版２・３）。ただし、詳細は後述するが、本来の上層水田面に達していない範囲が狭くない。確認した遺構は、

水田：36面（SS-001～004・006・007・009～015・017・024～028・031・045～048・032～040・049・043・042）

図17　文京遺跡25次調査・18次調査のⅡ - 2 - ④層（中層水田）出土遺構配置図（縮尺1/300）

溝：４条（SD-005・023・044・041）
に及ぶ。

Ⅱ - 2 - ②層を覆うⅡ - 2 - ①層からは一部14世紀後半に降る遺物があるが、基本的に13世紀前半までの遺物が出土している。Ⅱ - 2 - ②層も、やはり14世紀前半の遺物が少し伴うものの、他は13世紀前半までの遺物にほぼ収まる。

[中層水田]

Ⅱ - 2 - ④層上面では、畦畔で区画された水田面を調査区全域で確認した（図17、巻頭図版１、図版４、５－１・２）。出土した遺構は、

水田：36面（SS-101～ 129、133～ 139）
のみで、溝は調査区内で出土していない。

Ⅱ - 2 - ④層を覆うⅡ - 2 - ③層からは12世紀末葉から13世紀前葉の遺物が出土し、Ⅱ - 2 - ④層からも12

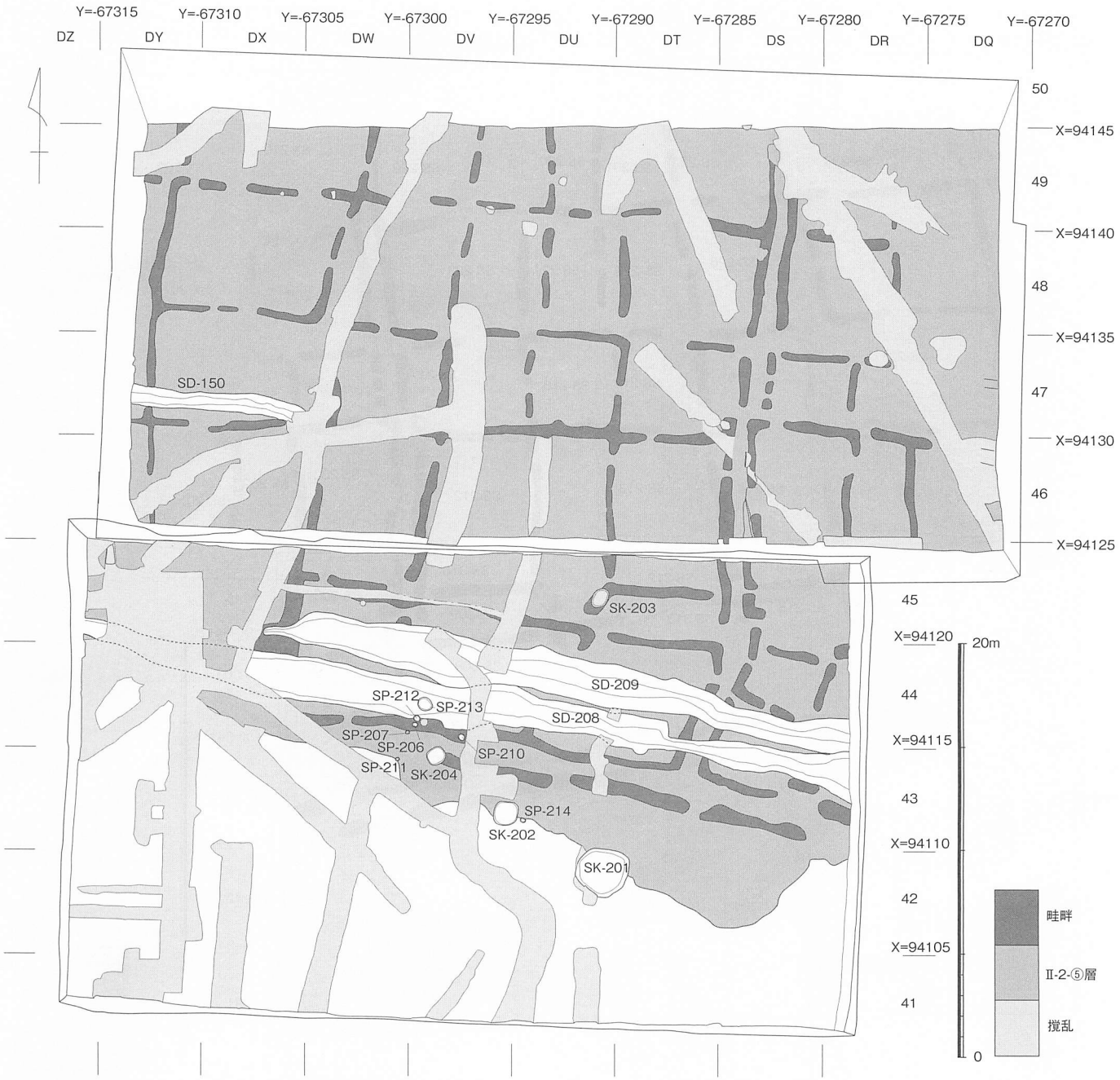


図18　文京遺跡25次調査・18次調査のⅡ-2-⑥層上面出土遺構配置図（縮尺1/300）

世紀末葉から13世紀前葉頃の遺物が出土している。

[中ー下層水田間]

Ⅱ-2-⑥層上面において、Ⅱ-2-④層より下位の、Ⅱ-2-⑤層内で掘り込まれた遺構を検出した（図18、図版５－３）。出土遺構は、

溝：１条（SD-150）

のみであるが、18次調査SD-208・SD-209と同一層位にあってほぼ平行し、中層水田耕作により削平された水田に伴った遺構とみられる。

ただし、出土遺物はほとんどない。

[下層水田]

Ⅱ-2-⑥層上面では、畦畔で区画された水田面を調査区北東部を除いて確認した（図19、巻頭図版２、図版６～８）。出土遺構は、

水田：30面（SS-201～206・208・212～234）

溝：１条（SD-211）

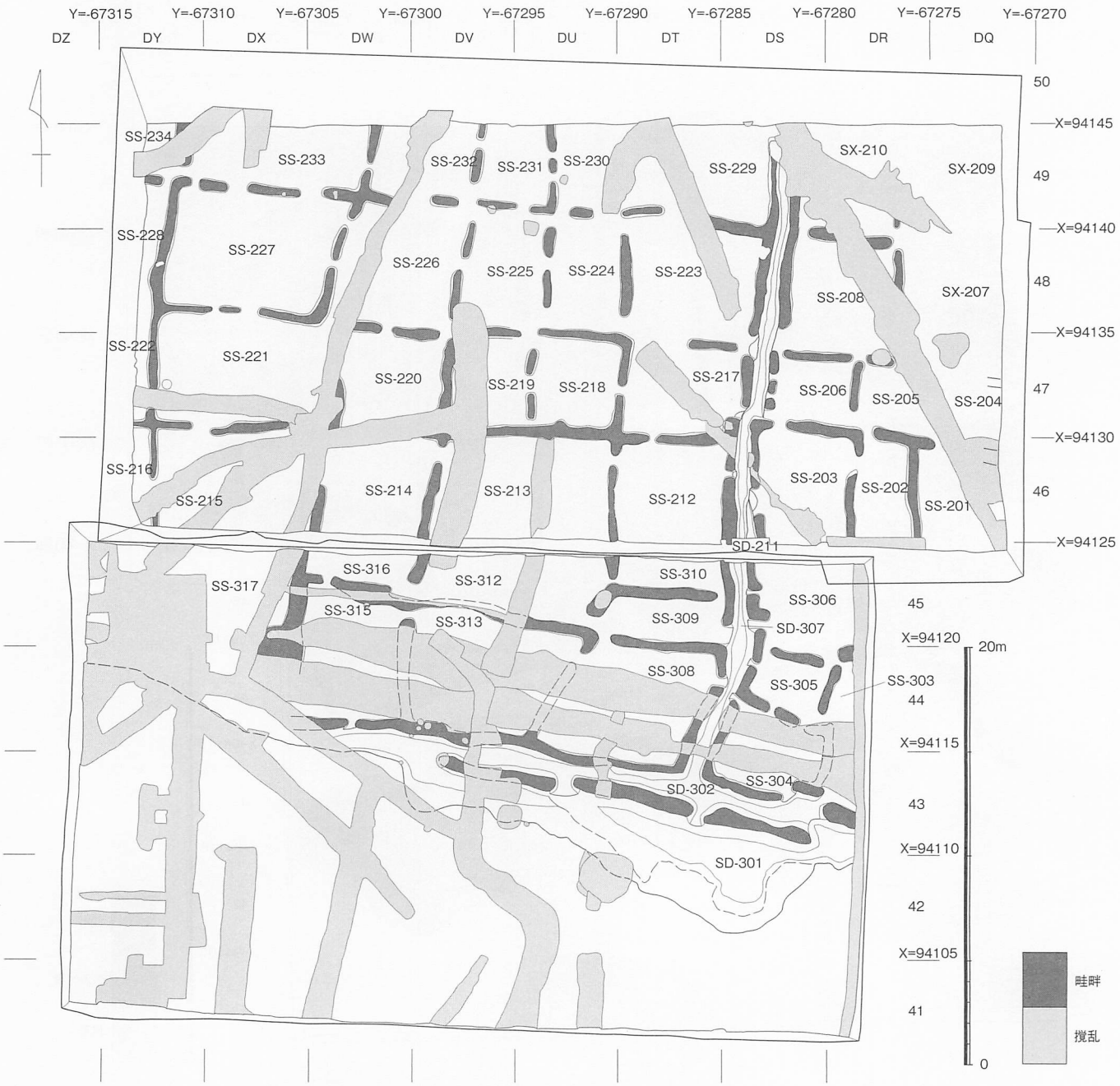


図19　文京遺跡25次調査・18次調査のⅡ - 2 - ⑥層（下層水田）出土遺構配置図（縮尺1/300）

である。なお、当初水田面としながら、最終的に水田外と判断した範囲として、SX-207・209・210がある。

Ⅱ - 2 - ⑥層を覆うⅡ - 2 - ⑤層では、13世紀前半までの遺物が出土するが、他ほとんどは12世紀前半頃までに収まる。また、Ⅱ - 2 - ⑥層の出土遺物は、一部12世紀後半頃の遺物がみられるが、他は基本的に11世紀後半までに収まる。

[自然流路]

Ⅱ - 2層の下では、SR-301が埋没していた（図20、巻頭図版３、図版９～11）。西流する幅40m以上に達する流路である。

出土遺物には、縄文時代から古代に及び、とくに弥生時代と古代の遺物が多い。最上部のシルト質土層からは、11世紀中頃から後半までの遺物が出土し、以下

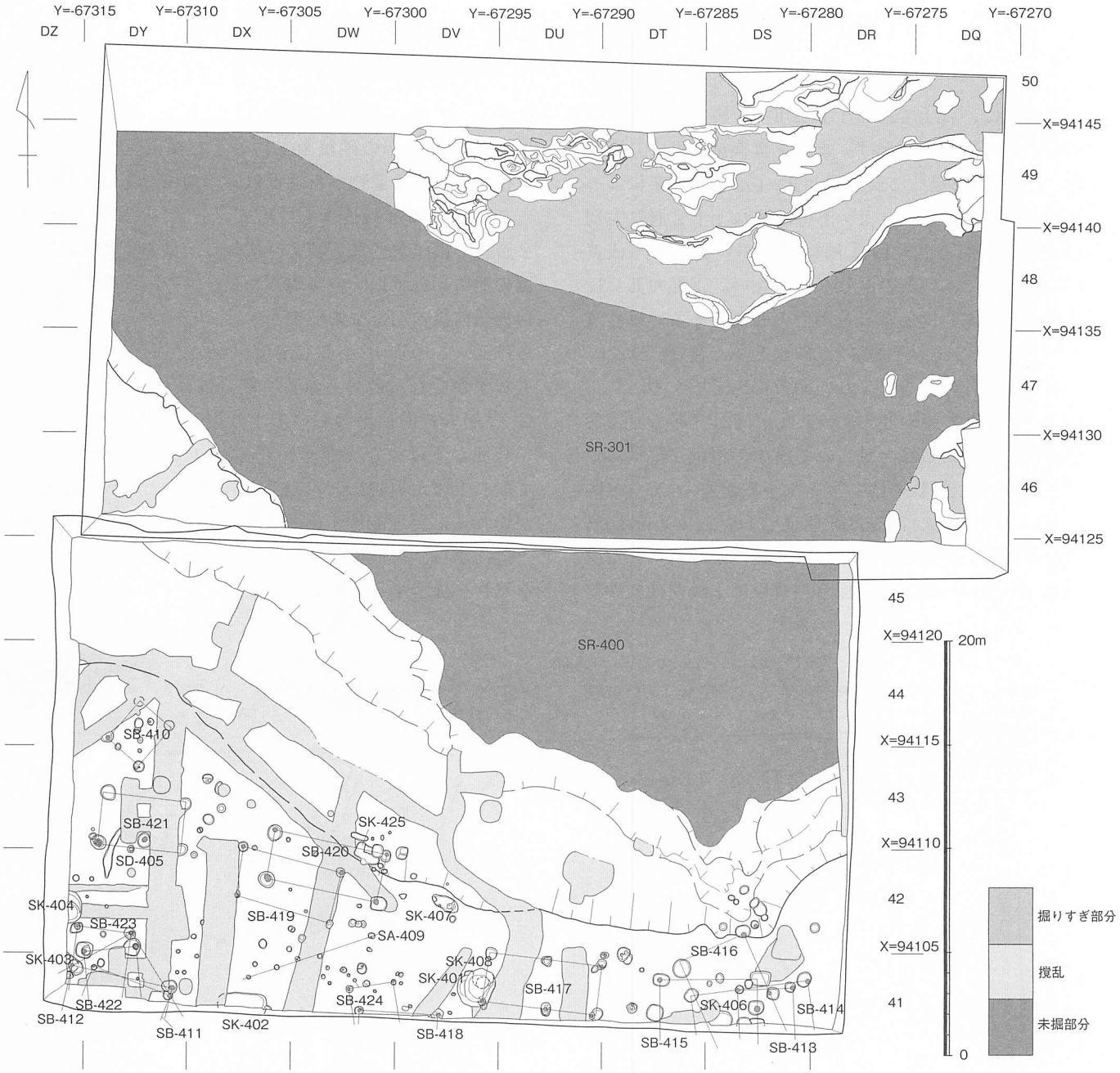


図20　文京遺跡25次調査・18次調査の自然流路と微高地上出土遺構配置図（縮尺1/300）

の砂・砂礫層は９世紀後半、最下部の砂礫・塊石層からは８世紀後半から９世紀前半頃までの遺物が出土している。なお、これらの中には、赤彩土師器や奈良二彩、須恵器硯など古代の特徴的な遺物がある。

2　Ⅱ - 1層と出土遺物

調査では、表土であるⅠ層とⅡ - 1層（調査時にはⅡ層として遺物取り上げ）までを重機掘削により取り除いたが、一部残った表土層とⅡ - 1層を手作業によって掘り下げを行った。Ⅱ - 1層は概ね上下2層に大別される。上部のⅡ - 1 - ①層は、にぶい黄色から浅黄色の砂質土で、砂礫の混じりは少ない。下部のⅡ - 1 - ②層は、にぶい黄色から黄褐色の砂質土あるいは砂質シルトで、径2㎜以下の砂粒･砂礫を多く含む。また、一部では鉄分の沈着により、明黄褐色を呈する。

Ⅱ - 1層除去後のⅡ - 2層上面が図21である。練兵場時代の演習用塹壕と見られる溝状の攪乱が縦横に走るとともに、土壙状の落ち込みや小穴が並んでいる（図版1）。そのうち、調査区北西部のDW ～ DY49区で、明らかに埋土が異なる溝状の落ち込みが認められた。上部（①層）のにぶい黄橙色粘質土は1㎜前後の砂粒を含み、下部（②層）は含まない。また、下部の一部には径0.1～1㎜の砂粒を主体とした褐灰色砂質土が堆積する。出土遺物から近世以降の堆積である。

この溝状の落ち込みも含めて、Ⅱ - 1層には、Ⅱ - 2層以下に包含される縄文時代から中世の土器、陶磁器の他に、近世以降の陶磁器や瓦を含む。このうち、14世紀前後の羽釜や備前焼がまとまってみられ、これらはⅡ - 2 - ①層中からも定量出土し、Ⅱ - 2 - ②層にもわずかながら認められる。詳細は後述するが、Ⅱ - 2 - ②層の遺構検出において十分掘り下げきっていない範囲が実は少なくなく、Ⅱ - 2 - ①層から②層として取り上げた遺物に、本来Ⅱ - 1層出土とすべき遺物が紛れ込んだ可能性がある。したがって、Ⅱ - 1層出土遺物から、14世紀前後の遺物を中心に、ほか特徴的な遺物を提示する（図22、図版13－1・2、表2）。

図21　Ⅱ - 2 - ①層上面出土遺構配置図（縮尺1/300、1/20）

１～10は土師質土器羽釜。いずれも調査区西半での出土である。１～５は口縁部で、１～３は口縁端部から少し下がった位置に突帯を貼り付ける。対して、４・５は口縁端部に接して、断面三角形の突帯を貼り付ける。６～10は脚部で、６～８は体部との接合部である。９は表面を丁寧にナデ仕上げする。11は備前焼擂鉢の口縁部。

12・13は土製品。12は、フイゴ羽口の一部と考えられる。破片の半分は激しい被熱により黒変している。13は土玉。径２cm前後でやや扁球形で、孔はない。

14はサヌカイト製の石鏃。先端部は使用時に破損した可能性が高い（図版13－２）。

15・16は鉄製品。15は釘と考えられる。頭部は片側から巻き込まれて成形されている。16は15と同じく頭部は片側から巻き込まれた作りになっているが、先端が幅狭で丸く、釘とは考えがたい。17は鉄滓。

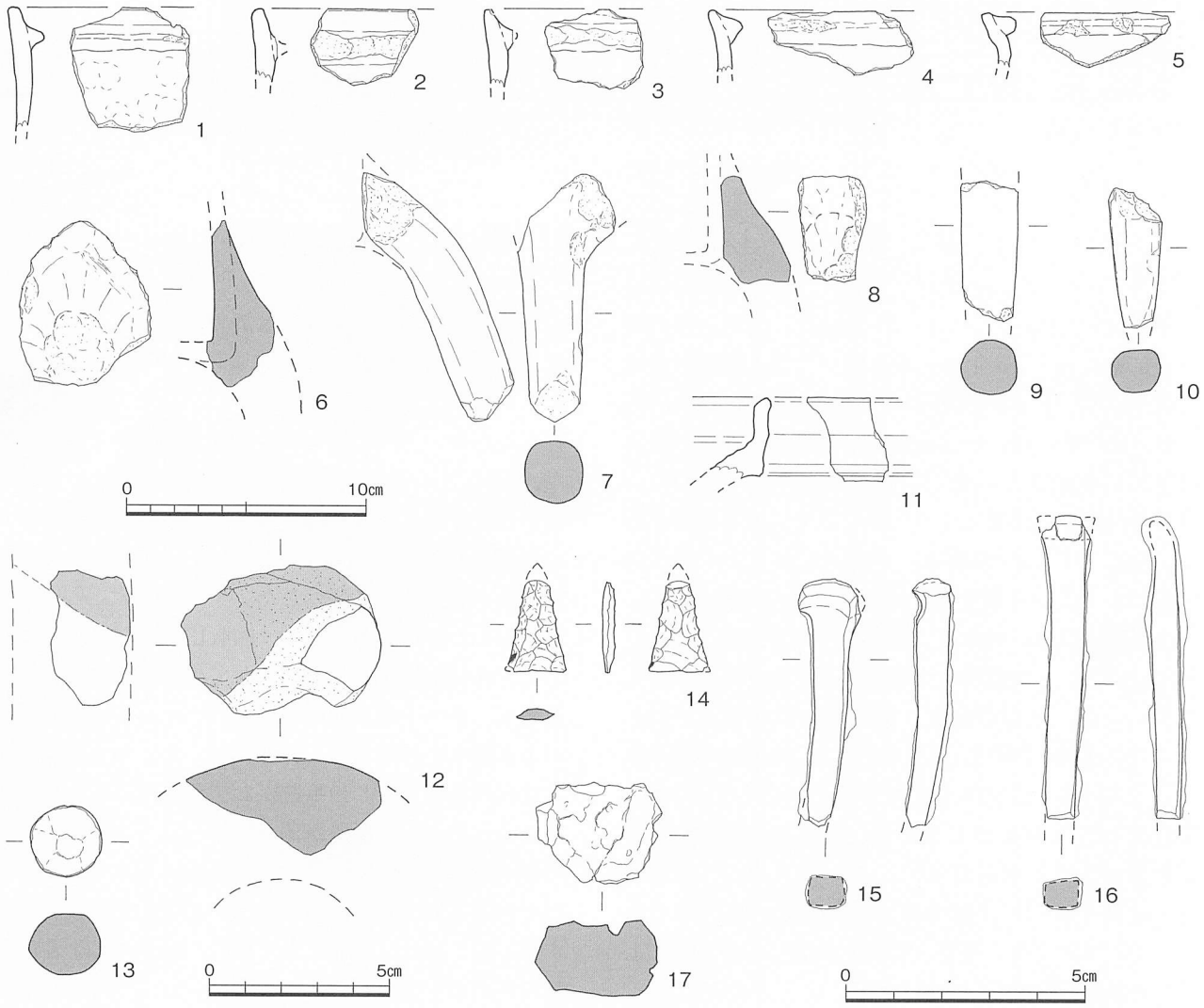


図22　Ⅱ-１層出土遺物（縮尺1/3・1/2・2/3）

表２　Ⅱ－１層出土遺物観察表

図22　Ⅱ－１層出土遺物

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
1	R12030	r1137	Ⅱ層	DW49	土師質土器	羽釜	口縁部	口縁部横ナデ、外面オサエ。内外面にぶい橙色。石英・長石・雲母多く含む。	1
2	R12031	r1140	Ⅱ層	DW・DX49(溝)	土師質土器	羽釜	口縁部	内外面にぶい橙色。石英・長石・雲母多く含む。	1
3	R12028	r1135	Ⅱ層	DW49	土師質土器	羽釜	口縁部	内面にぶい黄橙色、外面灰黄褐色。石英・長石・雲母多く含む。	1
4	R12027	r1129	Ⅱ層	DW46	土師質土器	羽釜	口縁部	内面横ハケ目、口縁部横ナデ。内面橙色、外面にぶい橙色。石英・長石・雲母含む。	1
5	R12025	r1123	Ⅱ層	DV49	土師質土器	羽釜	口縁部	口縁部横ナデ。内面灰黄褐色、外面褐灰色。石英・長石・雲母含む。	1
6	R12024	r1120	Ⅱ層	DV48	土師質土器	羽釜	脚部	内外面にぶい黄橙色。石英・長石・雲母多く含む。	1
7	R12029	r1136	Ⅱ層	DW49	土師質土器	羽釜	脚部	にぶい褐色。石英・長石・雲母多く含む。	1
8	R12023	r1112	Ⅱ層	DU49	土師質土器	羽釜	脚部	にぶい黄橙色。石英・長石・雲母多く含む。	1
9	R12032	r1151	Ⅱ層	DY47	土師質土器	羽釜	脚部	外面丁寧なナデ。灰黄褐色。石英・長石・雲母含む。	1
10	R12026	r1124	Ⅱ層	DV49	土師質土器	羽釜	脚部	にぶい橙色。石英・長石・雲母多く含む。	1
11	R12012	r1130	Ⅱ層	DW47	須恵質陶器	鉢	口縁部	内外面横ナデ。灰色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	1
12	R12016	r1142	Ⅱ層	DX46	土製品	フイゴ羽口		被熱のため全体脆い。淡黄色だが、破片半分は激しい熱により黒変。石英・長石の砂粒～細礫非常に多く、微細な雲母わずかに含む。	1
13	R12005	r1104	Ⅱ層	DS45(畔)	土製品	土玉		球形。灰褐色。石英・長石の砂粒多く含む。現重量6.7g。	1
14	R12015	r1140	Ⅱ層	DW・DX49(溝)	石器	石鏃		サヌカイト製。先端部は使用時に破損か。現重量0.6g。	1
15	R12004	r1101	Ⅱ層	DR45	鉄器	釘？		先端部欠損。現重量7.7g。	16
16	R12018	r1143	Ⅱ層	DX47	鉄器	不明		先端部欠損。現重量9.4g。	16
17	R12010	r1120	Ⅱ層	DV48	鉄器	鉄滓		現重量9.5g。	16

※出土位置の層位は取り上げ及び注記時の記載をそのまま示し、遺構・地区については報告に際して変更した内容を付記した。表３～14も同。

3　Ⅱ－２－①層（上層水田覆土）と出土遺物

調査時にa1層としたⅡ－２－①層は、上層水田の覆土層にあたる。Ⅱ－１層を取り除いた後、調査区全域に広がった。にぶい黄色から黄褐色の砂質土で、Ⅱ－１層に比べて、径１～２㎜前後の砂粒・砂礫を、特に層下部に多く含む。また、調査区南半部を中心に、層下部は鉄分の沈着により明黄褐色を呈する部分がある。ただしⅡ－２－①層は、平面的広がりを十分には把握できず、Ⅱ－１層を掘り残していた可能性が高い。

出土遺物には、中世の土師器、土師質土器、瓦器、陶磁器の他、それ以前の土師器、須恵器、瓦、弥生土器や、石器、鉄器がある。出土遺物の取り上げは、まず城北団地区割の５ｍ区画で行い、水田畦畔検出後は、水田区画単位で出土遺物を取り上げた。したがって、Ⅱ－２－①層の出土遺物は、城北団地区割に基づく上部と、検出水田面単位に基づく下部の二者がある。前者をⅡ－２－①層上部、後者をⅡ－２－①層下部として、報告する。なお、石器・鉄器については、上部と下部を一括する（表３）。

(1)　Ⅱ－２－①層上部出土遺物

Ⅱ－２－①層上部で取り上げた遺物の中に、後述する14世紀代の土師質土器羽釜より、明らかに時代の降るものがある。DR47区からは近現代陶器片が出土し、DT50区畔から近現代磁器片、DX50区畔から須恵質陶器片、DW45区畔から近世染付、備前焼擂鉢が出土している。このうち、後３者は調査区周辺の土層観察用畦出土遺物で、最初の攪乱掘り下げが十分でないままに、調査終了段階に乾燥しきった状態で掘り下げを行ったため、上部の遺物が紛れ込んだものである。また、DR47区の近現代陶器片も、大きく攪乱が入り込んだ地点であり、攪乱掘り残しの可能性が高い。以上の判断から、これらはⅡ－２－①層上部の時期を直接には示さないとして除外した。

図化したのは23点（図23、図版13－３）。

１～８は土師器。１は外傾してのびる坏または埦の口縁部。２～７は平底の坏底部。いずれも底面からそのまま緩やかに内湾して体部にいたる。２・５の底面には回転糸切り離しの痕跡がわずかに残る。８は細く高い高台を有し、器壁が薄い。

９～11は瓦器埦口縁部。９は端部に丸みをもつもののやや尖り気味で、内面に横ナデによる弱い稜線を有する。10・11は、端部を丸く収め、横ナデにより口縁部内外面がやや凹む。

12は龍泉窯系と考えられる、削り出し高台の青磁底部。青みがかった薄緑色の釉を施す。13は青白磁体部で、壺類の可能性がある。薄青色の釉を施し、内面は露胎。この他にも、青磁・白磁小片の出土は少なくない。

14～19は土師質土器羽釜。14・15は口縁部。14は外傾する口縁部で、面をなす端部より、やや下方に断面

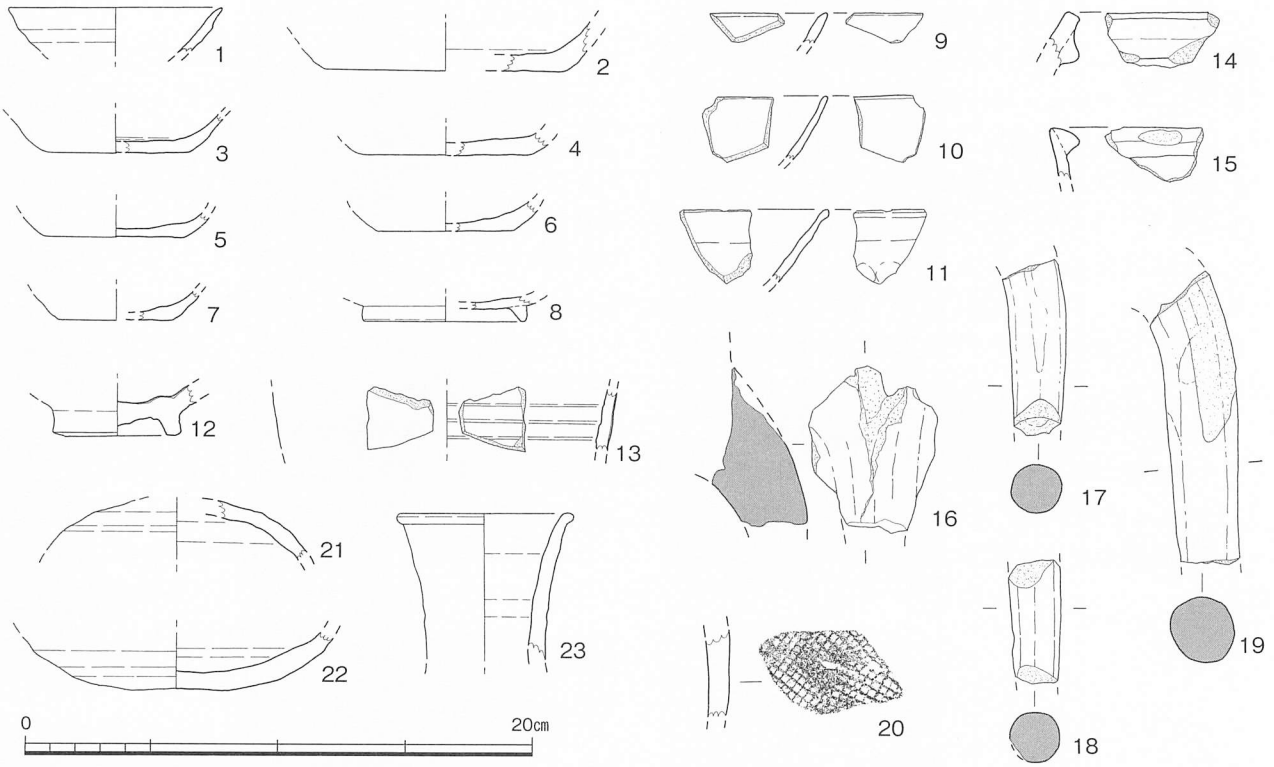


図23　Ⅱ-2-①層（a1層）上部出土遺物（縮尺1/3）

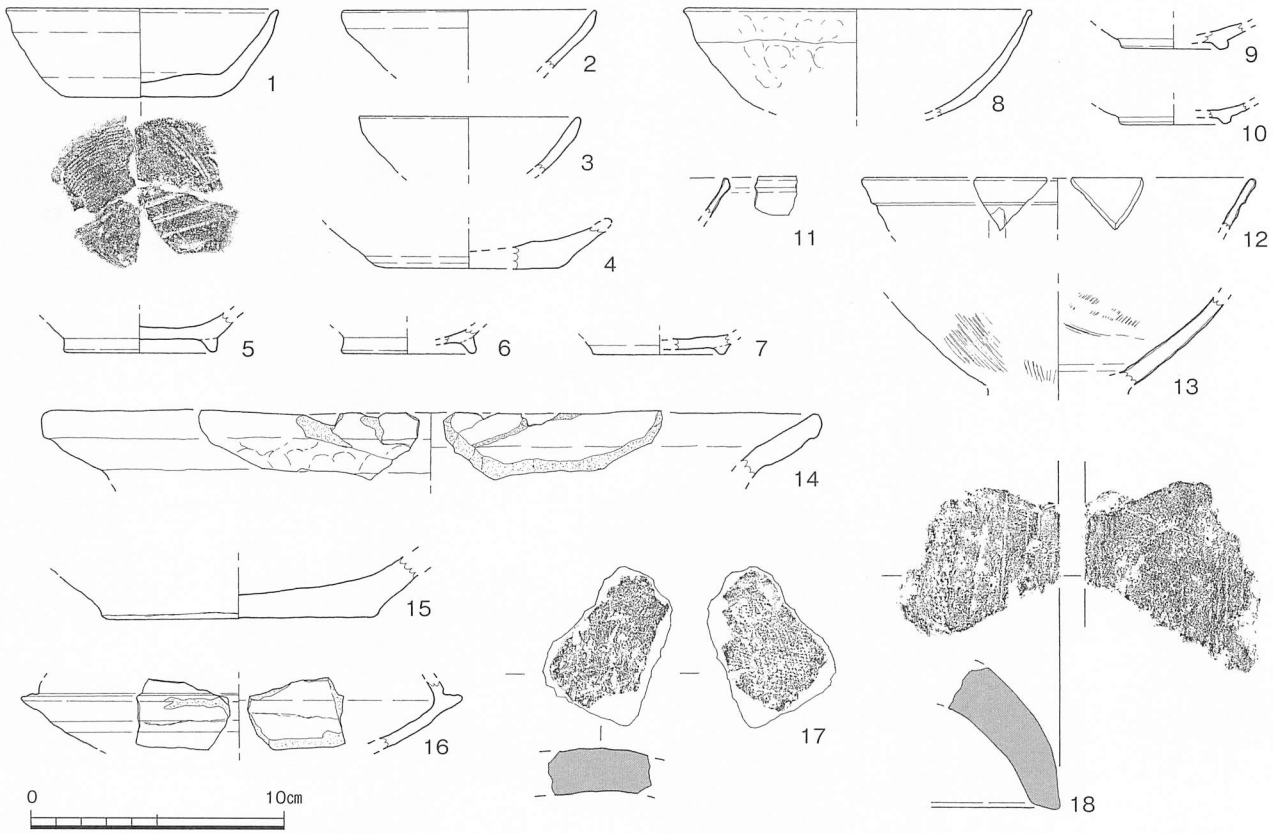


図24　Ⅱ-2-①層（a1層）下部出土遺物（縮尺1/3）

三角形状の突帯を貼り付ける。15は内傾する口縁部で、口縁端部に接して断面三角形状の突帯を貼り付け、14世紀後半まで下がる。16は体部との接合部付近の脚上部、17～19は脚中部破片。17には成形時の粘土巻き込み痕が残る。以上の土師質土器羽釜の多くは、調査区でも西寄りで出土し、Ⅱ－１層出土土師質土器羽釜の出土状況と符合する。また、16が出土した地点は、上層水田を検出した標高が高い。

20は亀山焼甕の胴部片と考えられる。外面に炭素を吸着させており、格子状タタキ目が見られる。

21～23は須恵器。21は坏蓋天井部付近の破片で、天井部と口縁部の境は不明瞭。22は坏身体部片で、体部の2/3程度に回転ヘラケズリ調整を施す。23は長頸壺の口縁部。緩やかに外傾して伸び、口縁端部で短く屈曲する。

⑵　Ⅱ－２-①層下部出土遺物

Ⅱ－２-①層下部で取り上げた遺物の中には、上部と異なり、明らかな後世の混じり込みは認められなかった。また、土師質土器羽釜については、図示できなかったが、DV46区のSS-032で体部片が、DW46区のSS-038で口縁から下がった位置に突帯が付く口縁部片が出土している。

提示する遺物は18点（図24、図版13－４、表３）。

１～７は土師器。１は破片から全形を復元した土師器坏。体部は回転ナデ調整による凹凸はみられるものの直線的で、口縁端部付近は狭い範囲をナデ調整し、外方へ小さく屈曲させる。底部は回転糸切り離しで板目状圧痕が認められる。２・３は外傾してのびる坏または埦の口縁部。４は平底の土師器坏底部。底面から一度立ち上がって外傾する。５～７は埦底部で、いずれも貼付高台を有する。５は器壁がやや厚く、幅広で

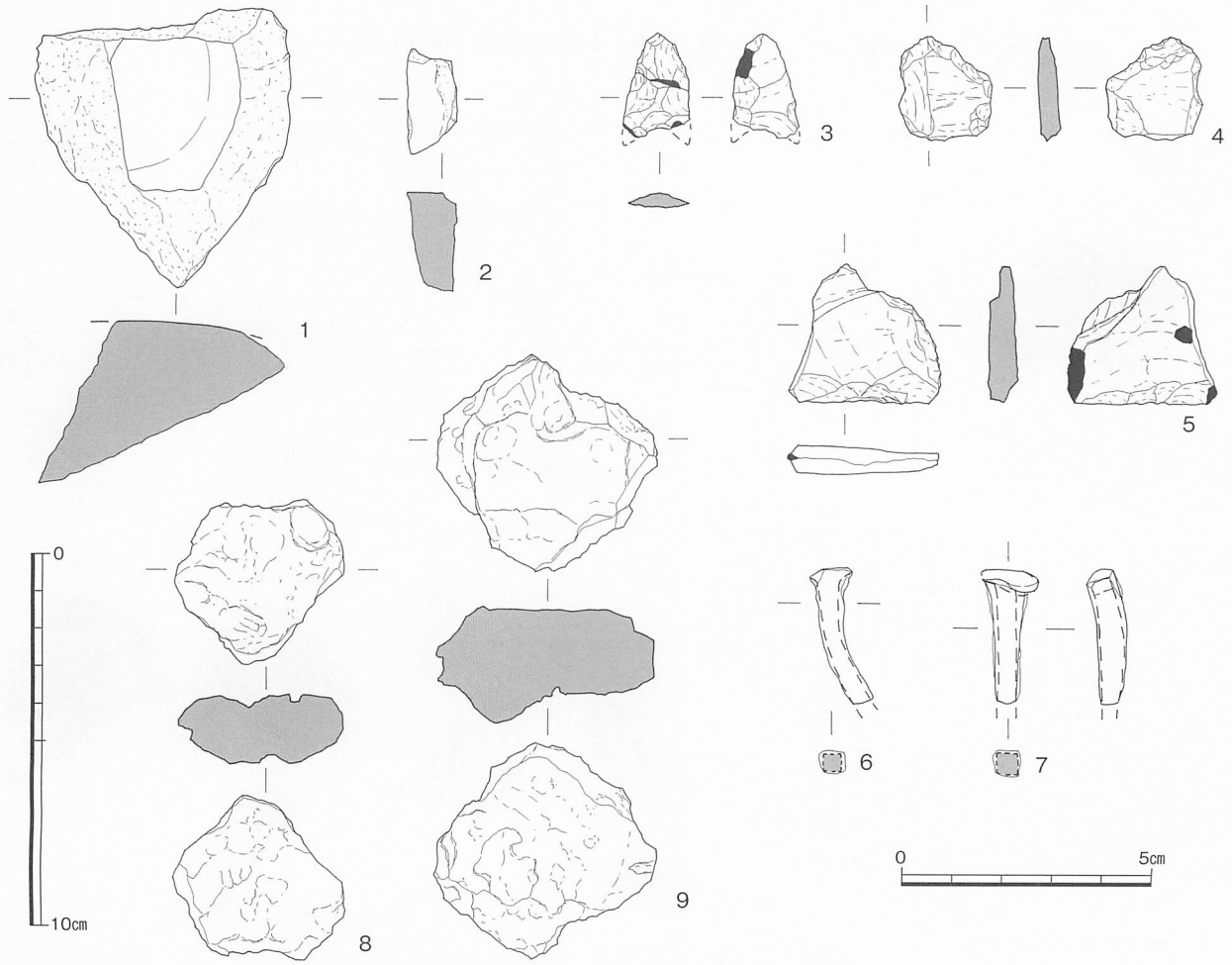


図25　Ⅱ－２-①層（a1層）出土遺物－石器・鉄器－（縮尺1/2、2/3）

表3　Ⅱ-2-①層（上層水田覆土）出土遺物観察表

図23　Ⅱ-2-①層（a1層）上部出土遺物

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
1	R20009	r2029	a1層	DU47	土師器	坏 or 埦	口縁部	全面磨滅、外面横ナデ。外面にぶい黄褐色、内面にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒、赤色粒わずかに含む。	2
2	R20062	r2159	a1・2層	DR45	土師器	坏	底部	全面磨滅。外面灰白色、内面浅黄橙色。石英・長石の砂粒、赤色粒やや多く含む。	2
3	R20012	r2033	a1層	DV48	土師器	坏	底部	全面磨滅。内外面横ナデ。にぶい橙色。石英・長石の砂粒、赤色粒多く含む。	2
4	R20063	r2159	a1・2層	DR45	土師器	坏	底部	全面磨滅、内面横ナデか。内外面黄灰色、断面浅黄橙色。石英・長石の砂粒多く含む。	2
5	R20021	r2049	a1層	DX49	土師器	坏	底部	全面磨滅。灰白色。微細な石英・長石まばらに含む。	2
6	R20011	r2031	a1層	DU48	土師器	坏	底部	外面磨滅。内面横ナデ、内底面不定方向ナデ。灰白色。微細な石英・長石やや多く含む。	2
7	R20006	r2018	a1層	DS47・48	土師器	坏	底部	全面磨滅、内面横ナデか。浅黄橙色。微細な石英・長石・赤色粒わずかに含む。	2
8	R20016	r2044	a1層	DX48	土師器	埦	底部	全面磨滅。灰白色。微細な石英・長石・赤色粒わずかに含む。	2
9	R20008	r2028	a1層	DT49	瓦器	埦	口縁部	全面磨滅、内外面横ナデか。内外面暗灰色、断面灰白色。胎土精良。	2
10	R20007	r2028	a1層	DT49	瓦器	埦	口縁部	全面磨滅、内外面横ナデか。内外面暗灰色、断面灰白色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	2
11	R20004	r2016	a1層	DR49	瓦器	埦	口縁部	全面磨滅、口縁部横ナデ、外面下半指オサエか。外面暗灰色、内面灰色、断面灰黄色。微細な石英・長石わずかに含む。	2
12	R20064	r2159	a1・2層	DR45	青磁	碗	底部	高台時計回りの削り出し。内面施釉・青緑色、外面露胎。磁胎灰白色。微細な黒色粒・白色粒やや多く含む。	2
13	R20072	r2174	a1・2層	DY47 畦	青白磁	壺？	体部	内面回転ナデ。外面施釉・明オリーブ灰色、磁胎灰白色。微細な空隙あり。	2
14	R20022	r2051	a1層	DY47	土師質土器	羽釜	口縁部	内外面磨滅、横ナデか。内外面にぶい黄橙色、断面褐灰色（黒化層）。石英・長石の砂粒多く含み、微細な雲母と赤色粒をわずかに含む。	2
15	R20017	r2044	a1層	DX48	土師質土器	羽釜	口縁部	内外面磨滅、横ナデか。にぶい橙色。石英・長石の砂粒～中礫多く、微細な雲母、赤色粒わずかに含む。	2
16	R20065	r2160	a1・2層	DR45	土師質土器	羽釜	脚部	全面磨滅、ナデ調整か。石英・長石の砂粒～細礫多く、微細な雲母わずかに含む。炭化木片含む。	2
17	R20013	r2037	a1層	DW49	土師質土器	羽釜	脚部	ナデ調整。にぶい黄褐色。石英・長石の砂粒を多く含み、微細な雲母、赤色粒わずかに含む。	2
18	R20018	r2044	a1層	DX48	土師質土器	羽釜	脚部	ナデ調整。にぶい橙色。石英・長石の砂粒～細礫を多く含み、微細な雲母、赤色粒わずかに含む。	2
19	R20010	r2030	a1層	DU49	土師質土器	羽釜	脚部	ナデ調整。にぶい橙色、断面上部黒褐色（黒化層）。石英・長石の砂粒多く、微細な雲母、赤色粒わずかに含む。上半部に薄く煤付着。	2
20	R20067	r2162	a1・2層	DS45 畦	亀山焼	甕	体部	傾き任意。外面正格子状タタキ、内面横ナデ。焼成軟質。外面黒色、内断面灰黄褐色。石英・長石の砂粒多く含む。	2
21	R20068	r2163	a1・2層	DS50 畦	須恵器	坏蓋	天井部	破片上部の反りからつまみをもつ可能性高い。内外面回転ナデ。内外面灰色（外面自然釉）、断面赤灰色。石英・長石の砂粒わずかに含む。内外面に1㎜大炭化物付着。	2
22	R20071	r2165	a1・2層	DU50 畦	須恵器	坏身	底部	内外面回転ナデ後、体部2/3程度に回転ヘラケズリ。灰色。石英・長石の細礫まばらに含む。	2
23	R20020	r2048	a1層	DX49	須恵器	長頸壺	口縁部	内外面回転ナデ。外面黄灰色（自然釉）、内面灰色、断面灰赤色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	2
		r1136	Ⅱ層	DW49					

図24　Ⅱ-2-①層（a1層）下部出土遺物

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
1	R20034	r2076	a1層	SS015（旧SS16）	土師器	坏	全形	破片から全形を復元。全面磨滅、内外面横ナデ。外底面回転糸切り離し痕・板目状圧痕。内外面灰白色。微細な石英・長石・赤色粒わずかに含む。	2
		r2082	a1層	SS025（DT47）					
		r2141	a1層	SD023（DT47）					
2	R20031	r2075	a1層	SS015（旧DS47SS16）	土師器	坏 or 埦	口縁部	全面磨滅、内外面横ナデか。外面浅黄橙色、内面橙色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	2
3	R20046	r2112	a1層	SS038（DW46）	土師器	坏 or 埦	口縁部	全面磨滅。灰白色。石英・長石の砂粒、微細な赤色粒まばらに含む。	2
4	R20032	r2075	a1層	SS015（旧DS47SS16）	土師器	坏	底部	全面磨滅。灰白色。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。	2
5	R20027	r2063	a1層	SS011（DR47）	土師器	埦	底部	全面磨滅。高台周辺横ナデか。灰白色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	2
6	R20047	r2112	a1層	SS038（DW46）	土師器	埦	底部	外面横ナデ、内面磨滅。にぶい黄色。微細な石英・長石まばらに含む。	2
7	R20050	r2125	a1層	SS042（DY50）	土師器	埦	底部	全面磨滅。外面灰白色、内面黄灰色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	2
8	R20028	r2063	a1層	SS011（DR47）	瓦器	埦	口縁部	全面磨滅。外面指オサエ後口縁部横ナデ。内面は横方向のミガキか。内外面暗灰色、断面灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	2
		r1018	攪乱	北東部					
9	R20035	r2082	a1層	SS025（DT47）	瓦器	埦	底部	全面磨滅、高台部横ナデか。内外面暗灰色、断面灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	2
10	R20048	r2112	a1層	SS038（DW46）	瓦器	埦	底部	全面磨滅、高台部周辺横ナデか。内外面灰色、断面灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	2
11	R20033	r2075	a1層	SS015（旧DS47SS16）	青白磁	碗	口縁部	内外面施釉。微細な黒色粒わずかに含む。灰白色。	2
12	R20039	r2092	a1層	SS-048（旧DT49SS29）	青磁	碗	口縁部	外面蓮弁文か。内外面施釉・にぶい黄色、磁胎淡黄色。微細な黒色粒と空隙あり。	2
13	R20051	r2126	a1層	SS043（DY46）	青磁	碗	体部	同安窯系。外面クシ目文、内面ヘラ描き文と列点文。内外面施釉・灰オリーブ色、磁胎灰白色。微小な空隙あり。	2
14	R20041	r2095	a1層	SS-045（旧DV47SS30）	土師質土器	鍋	口縁部	口縁部外面指オサエ。口縁端部～内面横ナデ。外面黒褐色（煤付着）、口縁端部～内面にぶい橙色、断面褐灰色（黒化層）。石英・長石の砂粒～中礫多く含む。	2
15	R20026	r2061	a1層	SS009（DR48旧SS9）	須恵質陶器	こね鉢？	底部	内外面ナデ。灰色。石英・長石の砂粒～細礫と炭化物多く含む。	2
16	R20045	r2110	a1層	SS037（DW48）	須恵器	坏身	受部	内外面回転ナデ、体部下半回転ヘラケズリ。口縁部外面～内面灰赤色、体部外面灰色。石英・長石の砂粒、赤色粒まばらに含む。焼成はやや軟質。	2
17	R20043	r2101	a1層	SS032（DV46）	瓦	丸瓦		凹面に布目痕。灰色。石英・長石の砂粒～中礫多く含む。	2
18	R20052	r2127	a1層	SS043（DY47）	瓦	丸瓦		側端部面取り。灰白色、断面黄灰色。石英・長石の砂粒～中礫多く、微細な赤色粒わずかに含む。	2

図25 Ⅱ-2-①層（a1層）出土遺物－石器・鉄器－

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
1	R20036	r2082	a1層	SS025（DT47）	石器	砥石		粗砥。花崗岩製。現重量159.1g。	2
2	R20040	r2092	a1層	SS-048（旧DT49SS29）	石器	砥石		火山岩製。現重量12.0g。上面のみ砥面として使用。側面は未整形で、被熱のため薄く黒変。	2
3	R20070	r2164	a1・2層	DT45 畦	石器	石鏃		サヌカイト製。凹基式、両端部欠損。現重量0.8g。風化のため表面白色。	2
4	R20023	r2054	a1層	DY48	石器	石鏃未製品？		赤色頁岩製。縁辺部に調整剥離を施す。現重量2.1g。	2
5	R20019	r2044	a1層	DX48	石器	楔形石器？		サヌカイト製。上下端に階段状剥離。現重量5.7g。	2
6	R20001	r2002	a1層	DQ47・48	鉄器	釘	上半部	先端部欠損。断面方形。現重量1.3g。	16
7	R20025	r2055	a1層	DY49	鉄器	釘	上半部	先端部欠損。断面方形。現重量2.4g。	16
8	R20030	r2066	a1層	SS012（DR46）	鉄器	鉄滓		現重量36.3g。砂粒まばらに付着。やや鉄分を含む。	16
9	R20024	r2054	a1層	DY48	鉄器	鉄滓		現重量136.5gやや鉄分を含む。	16

低めの高台を有し、体部が直線的にのびると想定される。６は器壁が薄く、細く高い高台を有する。７は著しく磨滅しているが、低い高台をもつと推定される。

８～10は瓦器埦。８は口縁部で、端部を丸く収め、横ナデにより口縁部内外面がやや凹む。９・10は貼付高台をもつ底部で、高台部分は断面方形、あるいは断面三角形状を呈する。

11は端部がやや肥厚する青白磁口縁部で、内外面に薄い青色の釉を施す。12・13は青磁の碗。12は龍泉窯系Ⅰ-5b類と考えられる口縁部で、口縁部外面にわずかな段を有し、体部外面に蓮弁文を施す。13世紀初頭～前半。13は同安窯系青磁碗Ⅰ-１類で、外面にクシ目文、内面にはヘラ描き文と押捺による列点文を施す。12世紀中頃～後半。この他にも、黄色がかった比較的粗めの素地の青磁埦体部が出土している。

14は土師質土器鍋の口縁部である。口縁部は直線的にのび、体部との境は明瞭である。口縁端部は横ナデ調整により面をなす。外面には煤が付着している。

15は須恵質陶器の底部。体部の傾きから、こね鉢の底部と考えた。甕もしくは壺の可能性もある。16は須恵器坏身の口縁部～受部の破片で、短く突出する受部を有する。口縁部はやや内湾し、やや軟質で内面は灰赤色である。

17・18は丸瓦である。17は須恵質の焼成で、凹面に炭素を吸着させ、布目が残る。18は土師質の焼成で、側面は斜めに面取りされている。

(3) Ⅱ-2-①層出土石器・鉄器

４・５の石器と６・７・９の鉄器が上部出土で、他は下部出土（図25、表３）。

１～５は石器。１・２は砥石で、１は花崗岩製の粗砥。２は火山岩製で、側面は未成形。被熱のためか薄く黒変している。３はサヌカイト製石鏃。基部両端が欠損しているものの、凹基式と考えられる。４は赤色頁岩の縁辺部に調整剥離を施し、石鏃未製品の可能性がある。５はサヌカイトで、楔形石器の可能性があり、上下端に階段状剥離が認められる（図版13－５）。

６・７は釘である。どちらも、頭部は体部よりやや幅広で、体部断面は方形を呈する。体部は曲がり、打ち込むときに失敗した可能性と抜き取りの時に曲がった可能性が考えられる。８・９は鉄滓。いずれも埦状を呈し、やや鉄分を残している。

(4) 小結

以上のように、Ⅱ-2-①層として取り上げた遺物には、14世紀後半まで降る土師質土器羽釜があるが、掘り残したⅡ-１層に伴った可能性が高い。さらに、後述する上層水田検出状況からは、Ⅱ-2-②層以下にもⅡ-１層を残していた可能性が高い。よって、本来の上層水田埋没は、遡る可能性がある。

4　Ⅱ-2-②層（上層水田）の遺構と出土遺物

調査段階でa2～a4層としたⅡ-2-②層は黄褐色砂質シルトで、径１㎜前後の砂粒を多く含む。ただし、その量はⅡ-2-①層に及ばず、粘性がややある。土層図では、Ⅱ-2-③層と一括としているが、調査時には、攪拌を受けた上部を水田耕作土と床土をⅡ-2-②層、以下の顕著な攪拌がみられず砂質の強い土層をⅡ-2-③層として掘り分けた。

(1) 遺構

Ⅱ-2-①層の掘り下げを行いながら、水田畦畔の検出を試みた。南側18次調査上層水田の検出レベルを参照しながら作業を進めたものの、最初の水田検出作業でもあり、先述したようにⅡ-１層をかなり残したまま作業に及んだため、結果的に水田遺構を的確に検出できていない範囲が大きい。中層・下層水田、あるいは18次調査上層水田と比べても、水田配置が整ってなく、畦畔が縦横に通っていない箇所が多く、東西方向の畦畔が明確でない。とりわけ、25次調査区南部の水田遺構と、18次調査北部の水田遺構が平面的にもレベル的にも不整合で、18次調査北端水田面より５㎝以上高いレベルで検出している（図26）。一方で、調査区北部では、北壁土層の水田面レベルと実際の検出レベルに大きな齟齬はない。

このように、上層水田については、南半部を中心にⅡ-2-②層面を検出しきっていない範囲が大きい。しかし、その範囲を明確にすることができない。以下では、掘り残しの可能性を極力指摘しながら、調査段階で認識記録した水田遺構の記述を行うこととする。

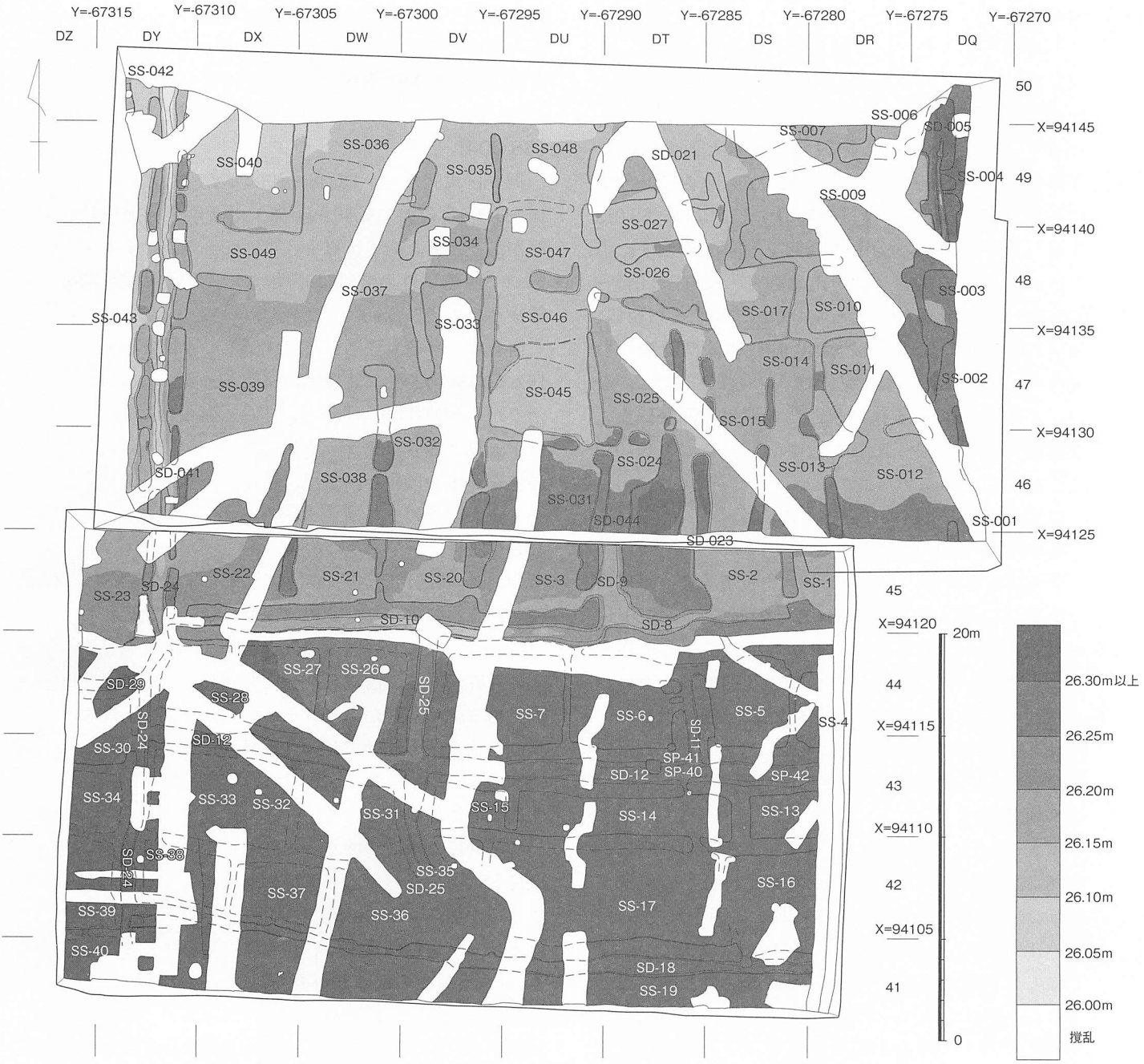


図26　25次調査・18次調査のⅡ－2－②層（上層水田）出土遺構配置図（縮尺1/300）

調査時には、概ね南北並びを単位に東から西へ、SS-1～42の１桁ないし２桁の番号を与えた。以下では、中層・下層水田との対比から、１桁でも003、２桁でも015等のように、報告に際しては３桁の番号で記述する。また、撹乱等で分断され、別の遺構番号を与えていた場合でも、一体と考えられるものは、いずれかの番号に統一し、調査時の番号は該当位置で（　）内に別記している。

この結果、水田として認識したのは、SS-001～004・006・007・009～015・017・024～028・031・045～048・032～040・049・043・042の36面、その間の水路となる溝は、SD-005・023・044・041の４条である（図26・27、図版２・３）。

① 水田

上述したように、以下報告する水田面は36面。まず、調査区最東に、SS-001～004が西辺をやや凹凸させながらも、南から北へと並ぶ。その西側に、南からSS-012・011・010・009と階段状に北ほど西へ突出しながら並び、SS-009の北では006と007に東西に２分される。この列の西側は階段を解消するように、SS-013～015・017が嵌り、SS-015の西側をSD-023が画す。この西側では、SS-024～028の南北列と、SS-031・045～048の南北列が比較的整然と並ぶ。ところが、その西側、SD-41までの間は、SS-032～040・049に分割認識したものの、畦畔の並びは不整合で、かつ部分的でしかない。そして、SD-41を挟んだ西側は検出範囲が狭く、北西隅部をSS-042とした以外は、南北に広くSS-043とした。

以下、東から水田毎に詳述する。

[SS-001]

調査区南東隅部の、DQ45･46区に位置する。水田面と認識した範囲は、西側SS-012との間の、幅約50cm、比高差約５cmの畦畔の東、それも東側に攪乱を控えた、東西約80cm、南北100cm前後の範囲でしかない。水田面の標高は26.26m。西側畦畔の北側は途切れ、攪乱を挟んだ北側の畦畔とは東西にくいちがい、水口となるらしい。埋土などの詳細は不明。

[SS-002]

調査区東辺、DQ47区に位置する。西側の畦畔は、南側SS-001西畦畔から約１m西側に位置し、幅50～70cm、比高差約２cmで西側のSS-011と区画されている。SS-001西畦畔との段差部分は、幅約80cmの水口となり、認識した畦畔の並びからは、西側SS-011との水口であった可能性もあり、水田面標高からは、SS-002からSS-012・011への導水が復元される。一方北側は、西畦畔から幅70cm前後で東へ約50cm広がり、これによってSS-003と区画されている。比高差は１cm弱。また、調査区東壁との間わずか５cm程度ながら畦畔が途切れ、水口となるらしい。結果、水田面とした広がりは、南北約３m、調査区内で確認した東西幅は60～80cm、水田面標高は26.29mと高い。

[SS-003]

調査区東辺、SS-002の北隣り、DQ48区に位置する。南･西･北を連続するＣ字状の畦畔で囲われ、南北約2.7m、東西約1.5mで、東へはさらに調査区外へと広がる。水田面の標高は26.25m前後。南側畦畔は幅70cm前後、比高差約４cmを測り、西側は幅40～60cm、比高差約３cmの畦畔でSS-010と画され、北側は幅約100cm、比高差約２cmの畦畔がある。水口は南畦畔に開き、SS-002からSS-003への導水が水田面標高から窺える。

[SS-004]

調査区東辺北端、DQ48～50区で認めた水田面。西側SD-005との間に幅40～60cm、比高差２cm前後の畦畔があり、南北約７m以上、東西80cm以上の広がりをもつ。西辺以外の詳細は不明。水田面標高は26.30m前後と、東辺にSS-002～004が高位に並ぶ。

西畦畔は２箇所途切れ、SD-005との水口となる。南側水口は幅約20cm、北側水口は幅20cm強。傾斜はわずかながらSD-005側。埋土はいずれも黄褐色砂質土で、径１㎜以下の砂粒をラミナ状に少しと、径１㎜前後の砂粒をわずかに含む。また、耕作土とみられる粘質土を１㎜大以下のブロック状にやや含む(図28－１・２)。

[SS-012]

DQ45・46区、DR45・46区に位置し、東西約５m、南北約５mの広がりを認め、南側はさらに調査区外へと広がる。東のSS-001との間に幅約50cm、比高差約４cmの畦畔があり、西側SS-013との間には幅約70cm、比高差約５cmの畦畔があり、そして北側は幅70cm前後、比高差約２cmの畦畔でSS-011と画されている。ただし、西側の畦畔検出位置は、水田面の標高26.23～27mと、北側への傾斜がやや大きい。

各畦畔には水口が開く。東畦畔の水口については、既にSS-001で述べた。西畦畔の北端近くには幅約40cmの水口が開き、SS-013側への明瞭な傾斜がある。埋土はオリーブ褐色砂質土で、径１㎜前後の砂粒を少量含み、シルト質土の混じりが多く、しまりと粘性がある。北畦畔の東端の水口については、既に述べている。中央部のSS-011との水口は、幅約100cm。わずかながらSS-011側に傾斜する。埋土は黄褐色砂質土で、径１㎜前後の砂粒をやや多く、シルト質土をラミナ状に含み、粘性がややある（図28－３・４)。

[SS-011]

DQ・DR46区の、SS-012北側に位置する。南側SS-012との間には、幅70cm前後、比高差約２cmの畦畔があり、東側SS-002との間には幅50～70cm、比高差約４cmの畦畔、西側SS-014との間に幅50～70cm、比高差約２cmの畦畔、そして北側SS-010との間に幅約40cm、比高差２cm弱の畦畔がある。これらに囲まれた水田面は、東西約５m、南北4.5m前後を測る。水田面の標

Y=-67315 Y=-67310 Y=-67305 Y=-67300 Y=-67295 Y=-67290 Y=-67285 Y=-67280 Y=-67275 Y=-67270

DY DX DW DV DU DT DS DR DQ

X=94145 X=94140 X=94135 X=94130 X=94125

50 49 48 47 46

SS-042 SS-040 SS-036 SS-035 SS-048(SS-29②) (SS-28) SD-021 (SS-20) (SS-19) SS-007 (SS-07) SS-006 SD-005 SS-004 SS-009 (SS-08) (SS-18) SS-049 SS-034 SS-047(SS-29①) SS-027 (SS-09) SS-003 SS-037 SS-033 SS-026 SS-017 SS-010 SS-043 SS-046(SS-30②) SS-014 SS-011 SS-039 SS-045(SS-30①) SS-025 (SS-16) SS-002 SS-015 SS-038 SS-032 SS-024 SS-013 SS-041 SS-031 SS-044 SD-023 (SS-15) SS-012 SS-001

0 10m

図27 Ⅱ - 2 - ②層（上層水田）出土遺構配置図（縮尺1/100）

高は攪乱西側で26.23m前後、東側では26.26m前後と段差が残る。

東畦畔南端と南畦畔中央の水口については既に述べた。西畦畔に水口は認められず、北畦畔は東端で水口が開く。西側を攪乱で切られており、幅110cm以上。SS-011からSS-010への導水が推測される。

なお、SS-011遺構検出時に牛馬とみられる足跡を検出している（図版３－２）。

[SS-010]

DR48区に位置する。南側西半・西側・北側西半がC字状に連なる畦畔で画され、しかもその西辺は南側SS-012・011より１m以上西に突出する。一方、東側は南畦畔・北畦畔とも攪乱以東ではほとんど認められず、幅広の水口部となり、北辺東端の東畦畔が軽く突出するのみである。南畦畔は幅約40cm、比高差約２cm、東畦畔は幅40～60cm、比高差約４cm、西畦畔は幅60～90cm、比高差約１cm、そして北畦畔が幅約50cmの微弱な高まりである。これらに囲まれた水田面は、東西５～5.5m、南北2.5～3.3m、標高26.22mを測る。

東西の畦畔に水口は開かず、南畦畔東端で幅幅110cm以上、北畦畔東半で幅150cm以上の水口となるが、詳細不明。

[SS-009]

DQ48・49、DR48・49、DS48・49区にまたがる、東西約8.7m、南北4.5mの広がりを想定する水田がSS-009である。ただし、この範囲は戦前の演習用塹壕による攪乱が大きく及び、４区画に分断されている。調査段階では、このうち東部と北部をSS-08、南部をSS-09、西部をSS-18としていたが、報告に際してはSS-009として一括した。

南側SS-010との間には幅約50cm、比高差約１cmの畦畔があり、東側SS-004・SD-005との間には幅約40cm、比高差２～４cmの畦畔があり、中央部で西側に50cmほど突出する箇所がある。また西畦畔は、南側SS-010西畦畔より約2.5m階段状に西側にあり、幅約80cm、比高差約１cmを測る。そして、北側は幅100cm前後、比高差約１cmの畦畔で、SS-006・007と画されている。

水口は、南畦畔についてはSS-010で既に述べた。東側は、SS-004からの導水部がSD-005となっており、これについてはSD-005で詳述する。一方西畦畔の南端は、南北約120cm幅で畦畔が開き、奥行50cm程度で屈曲し、南のSS-017へと約200cm溝状に続いている。傾斜はSS-017側に段状に一段低くなっている。埋土は、シルト質土をベースに径１㎜前後の砂粒をやや含むオリーブ褐色砂質土で、粘性がややある（図28－５）。北畦畔は、SS-007との水口が開く。幅約40cmでSS-007側に傾斜する。埋土は黄褐色砂質土で、細かい砂質土をベースに径１㎜以下の砂粒をラミナ状にやや多く含み、粘質土もやや含む（図28－６）。同様の水口は、SS-006との間にも存在したと推測される。

[SS-006]

DR49区に、西側を畦畔で東側を攪乱で挟まれた、東西150cm弱、南北約60cmの広がりを認めた水田面。標高は26.22m。攪乱を挟んだ東側では畦畔を一部確認しており、東西幅は３m以下となる。西側SS-007との間の畦畔は幅20cm程度で比高差も１cm以下と微弱。水口は、南側SS-009との通水が想定されるとともに、東畦畔にもSS-004との水口が開くとみられる。

[SS-007]

DR・DS49区の調査区北端に位置する。調査時には、塹壕による攪乱東側をSS-07、西側はSS-19としていたが、一連の広がりとみなし、SS-007として報告する。確認した範囲は東西約6.3m、南北0.8m前後。水田面標高は28.17m前後。南畦畔は幅100cm前後、比高差約４cm、東畦畔は幅20cm程度、比高差約４cm。西畦畔は幅約50cm前後、比高差約１cmとみられる。水口は南畦畔で確認しており、詳細は既に述べた。

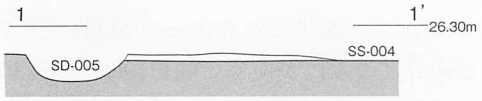
[SS-013]

DR・DS46区に位置する。南は調査区外へと広がるが、東は幅約70cm、比高差約３cmの畦畔でSS-012と画され、その東畦畔がわずかに西に突出する部位で北のSS-014と区分している。また、西側SS-015との間には幅40～70cm、比高差７～８cmの畦畔がある。水田面の広がりは、東西3.2～２mと北に狭く、南北は５m以上。標高は26.25m前後である。

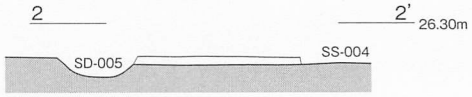
ところが、東西の畦畔については、南側18次調査検出の畦畔と齟齬が著しい。東畦畔の南延長は、辛うじて18次調査東端にかかるが、連続するはずの畦畔はみられない。西畦畔も同様で、18次調査上層水田SS-1とSS-2間の畦畔は、ちょうど25次調査SS-13の中央部に位置している。さらに、水田面及び畦畔の検出標高が18次調査北端より25次調査SS-013周辺は、５cm以上高くなってしまっている。したがって、ここで報告しているSS-013はまだ十分掘り下げ切れていないものを、上層水田面としてしまった可能性が高い。

SS-013とした水田畦畔の各辺には水口が伴うとし

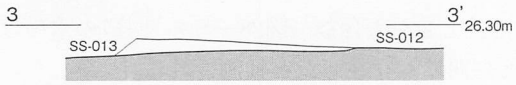
1：SD-005・SS-004 南水口



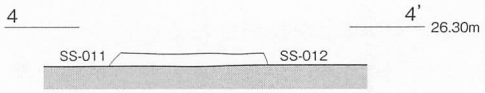
2：SD-005・SS-004 北水口



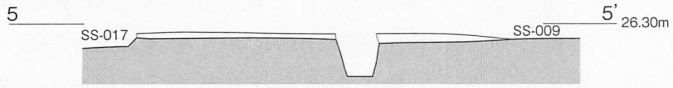
3：SS-012・013 水口



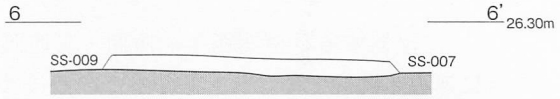
4：SS-012・011 水口



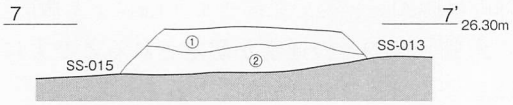
5：SS-017・009 水口



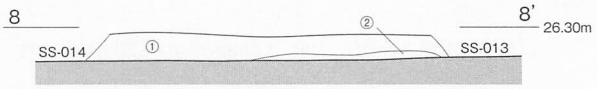
6：SS-009・007 水口



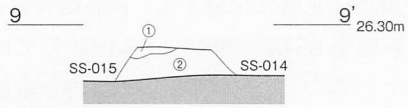
7：SS-013・015 水口



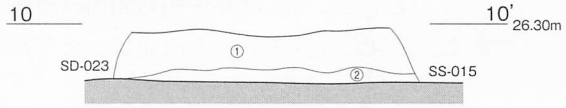
8：SS-013・014 水口



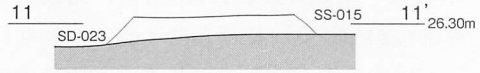
9：SS-014・015 水口



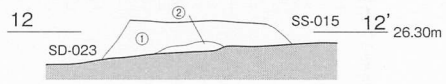
10：SD-023・SS-015 南水口



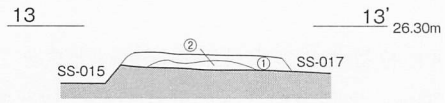
11：SD-023・SS-015 中水口



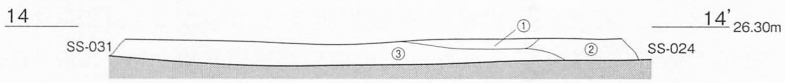
12：SD-023・SS-015 北水口



13：SS-017・015 水口

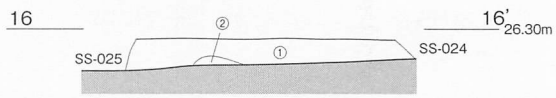


14：SS-024・031 水口

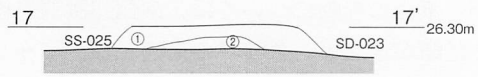


15：SS-024・025 東水口

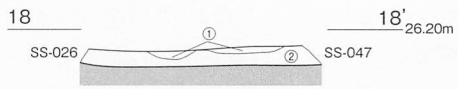
16：SS-024・025 西水口



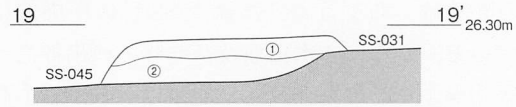
17：SS-025・SD-023 北水口



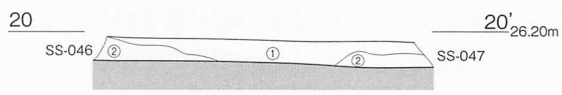
18：SS-026・047 水口



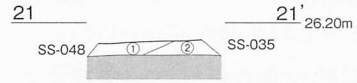
19：SS-031・045 水口



20：SS-046・047 水口



21：SS-048・035 南水口



22：SS-048・035 北水口

図28　Ⅱ - 2 - ②層（上層水田）に伴う水口部土層図(1)（縮尺1/20）

た。東畦畔については記述済み。西側は北端に幅約90cmの水口が開き、大きくSS-015側に傾斜する。埋土は、上部の①層が、径２㎜前後の砂粒・砂礫を多く、１cm大前後のシルト質土ブロックを少量含む黄褐色砂質土で、しまりがややある。下部の②層は黄褐色シルト質土で、径１㎜以下の砂粒を少し含み、砂質土がラミナ状にはいり、しまりがある（図28－７）。北側は、東畦畔がわずかに西に突出する部位で、北側SS-014と区分した。東西約120cmの幅で、SS-014側への傾斜がみられる。埋土は、上部の①層が黄褐色砂質土で、径２㎜前後の砂粒・砂礫を多く、１cm大前後のシルト質土ブロックを少量含み、しまりがややある。SS-013側よりの下部に薄く、径１㎜以下の砂粒をわずかに含み、シルト質がやや強く、しまりのある黄褐色砂質土の②層が堆積する（図28－８）。

[SS-014]

SS-013の北側、DR・DS47区に位置する。南畦畔は先述したように明確でない。西畦畔は北が大きく開き、幅は30cm前後と狭いが、比高差は約11cmと高い。一方、東側と北側は連続した畦畔で画されている。東畦畔は、幅50～70cm、比高差約８cm、北側では幅50cm前後、比高差約６cmを測る。これにより、水田面は東西約1.8m、南北約3.5mを測り、標高は26.18m前後である。

南側SS-013との水口については既に記した。西畦畔北半は、幅約180cmにわたって開き、水口となっている。傾斜はSS-015側。埋土のうち上部の一部に、径１㎜以下の砂粒を多く、シルト質土をわずかに含んで砂質の強い暗灰黄色砂質土の①層がある。下部の②層は黄褐色シルト質土。１～２㎜大のブロックをベースに、径１㎜以下の砂粒をラミナ状にやや多く含み、しまりと粘性がある（図28－９）。

[SS-015]

SS-015はSS-013・014の西隣に位置する。調査時には、塹壕攪乱の南側をSS-15、北側をSS-16としていたが、SS-015と一括して報告する。東西幅は1.8～2.5m、南北長9.5mに及ぶ。東側SS-013・014との間の畦畔は、幅40～70cm、比高差10cmを超え、西側SD-023との間の畦畔は幅60～80cm、比高差約10cmである。ただし、SS-013で述べたように、東畦畔の位置が18次調査とは一致してなく、さらに西畦畔についても同様である。水田面の標高こそほぼ一致するが、その東西範囲の認識を誤った可能性が高い。

各畦畔においては水口を認め、東側については既に述べている。西側SD-023とは３箇所に水口が開く。南水口は幅100cm以上。明確な傾斜はみられないが、SD-023側への導水が想定される。埋土は暗灰黄色砂質土で、径２㎜以下の砂粒を多く含み、砂質が強く、しまりがややある。中水口は幅約60cm。明確にSD-023側に傾斜する。埋土は暗灰黄色砂質土で、径１㎜以下の砂粒を多く、１㎜大以下のシルト質土ブロックをやや多く含み、粘性としまりがややある。北端の水口は幅約140cmで、やはりSD-023側に傾斜する。埋土は、径１㎜以下の砂粒を多く、５㎜大以下のシルト質土ブロックをわずかに含む暗灰黄色砂質土の①層があり、その下に径１㎜以下の砂粒をほとんど含まない暗灰黄色シルト質土の②層が一部堆積する（図28－10～12）。北側も畦畔が幅約170cm途切れ、SS-014と共通したSS-017との水口をなし、SS-014・015側が段差を有して低くなる。埋土は上部に①層の暗灰黄色砂質土。径１㎜前後の砂粒を多く、シルト質土をわずかに含み、砂質が強い。さらに下には、径１㎜以下の砂粒をわずかに含み、しまりと粘性のあるオリーブ褐色砂質土の②層がみられる（図28－13）。

[SS-017]

DS47・48区、SS-014・015の北隣りに位置する。南側西半は、幅約50cm、比高差約６cmの畦畔があり、その北側がわずかに突出して西側SS-026と区分できる。一方、東辺と北辺は一連。東畦畔は幅60～90cm、比高差５～６cm、北畦畔は幅約30cm、比高差約５cmを測る。水田面は東辺約3.5m、西辺約３m、東西幅約4.5mを測る台形状で、標高は26.15m前後。

東畦畔に水口は開かない。南畦畔と北畦畔の水口については、SS-014・015とSS-009で既に述べている。西はわずかな畦畔の突出でSS-026と区画したが、埋土等の詳細は不明。

[SS-024]

SS-024はDT46区の、SD-044の北端の幅を増した、東西約2.3m、南北２m前後の広がりである。上面の標高は26.24m。南はSD-044に連続し、東側は幅約110～70cm、比高差約４cmの半島状に北にのびる畦畔があり、西側は幅60cm前後、比高差約４cmの畦畔でSS-031と画され、北は東西約100cm・南北約70cm、比高差約２cmの畦畔がSS-025との間にある。

水口は、西畦畔北端と北畦畔の両側に開く。西畦畔北端の水口は幅約30cmで、SS-024側に傾斜する。埋土

は、SS-024側上部に、径１㎜前後の砂粒を少し含み、しまりのやや弱い暗灰黄色砂質土の①層がある。その下SS-024側に、径１㎜前後の砂粒を多く、５㎜大前後のシルト質土ブロックを少し含む黄褐色砂質土の②層がある。鉄・マンガン分の沈着があり、しまりがややある。そして、SS-031側の下部に、③層の黄褐色砂質土である。径１～２㎜の砂粒を含み、シルト質土が多く混じり、しまりがある。鉄・マンガン分の沈着もある（図28－14）。

北畦畔東西の水口は、いずれもSS-025側に傾斜する。東側が幅約70cm、西側が幅約50cmである。埋土は黄褐色砂質土で、径１㎜前後の砂粒を多く含み、砂質が強く、５㎜大以下のシルト質土ブロックを含む。なお、西側水口の下部には、径１㎜前後の砂粒を少し含むだけで、シルト質がやや強い黄褐色砂質土の②層が一部みられる（図28－15・16）。

[SS-025]

DT・DU47区に位置し、南側は東西約100cm・南北約70cm、比高差約７cmの畦畔でSS-024と画され、東側のSD-022との間には幅60cm前後、比高差約７～８cmの畦畔がある。西側は幅30～70cm、比高差４～５cmの畦畔でSS-045と画され、北側は幅60cm前後、比高差約５cmの畦畔でSS-026と画されている。結果、水田面は東辺約5.5m、西辺約6.3m、東西約3.7mの台形状で、標高26.15～19m。

南畦畔の水口についてはSS-024で述べた。東畦畔は南端に南北長60cmほどの島状に畦畔が独立し、その南側は幅約20cm、北側は40cm以上の水口となる。いずれもSD-023側への傾斜がみられるが、埋土の詳細は記録していない。一方、東畦畔の北端も幅約50cmの水口となる。傾斜はわずかながらSD-023側。埋土は、上部の①層が暗灰黄色砂質土で、径１㎜以下の砂粒を多く含み、わずかに５㎜大以下のシルト質土ブロックを含む。②層は、径１㎜前後の砂粒をほとんど含まない暗灰黄色シルト質土（図28－17）。西畦畔の北端も幅約170cmの水口となるが、詳細不明。北畦畔も西端付近が幅約80cm途切れるが、等高線の走りからして、畦畔が削平された、あるいは掘りすぎた可能性が高い。

[SS-026]

DT48区に位置する。南側のSS-025とは、幅60cm前後、比高差約５cmの畦畔で区画され、東側SS-017とは南側畦畔の北側への軽い突出によって区分した。西側はSS-047との間に幅40cm前後、比高差約３cmの畦畔があり、北側SS-027との間には、幅60cm前後、比高差２cm前後の畦畔がある。水田面の広がりは、東辺約３m、西辺約２m、東西約5.5mの台形状で、標高は26.13～16m。

SS-025間の畦畔には水口が開くが、削平あるいは掘りすぎた可能性を先に指摘した。東畦畔はそれ自体がわずかで、大きく開いている。一方、西畦畔は北側約90cm幅が開き、水口となる。傾斜はSS-047側。埋土のうち、上部の①層は、下部②層の暗灰黄色粘質土を少量ブロック状に含み、径１㎜前後の砂粒をごく少量含む。下部の②層は、径１㎜前後の砂粒を少量含む暗灰黄色粘質土（図28－18）。

[SS-027]

DS48・49区～DU48・49区にまたがり、南側は幅60cm前後、比高差約４cmの畦畔でSS-026と画され、東側はSS-018との間にSD-021を挟む。西側は幅50～70cm、比高差約３cmの畦畔がSS-047との間にあり、北側は幅約50cm、比高差１cm弱の畦畔がSS-028との間にある。これらの畦畔で区画された水田面は、東西約６m、南北1.5～2.1m、標高26.11mを測る。

南畦畔は、東西両端が水口となる。東端は、SD-021の南端であると同時に、幅約100cm以上が開き、水田面の傾斜から、SS-026からSS-027への導水が窺える。西端も幅約80cmが開き、SS-026からSS-027への導水が窺える。しかし、埋土の詳細は記録していない。また北畦畔も、中央部と西端が水口となるらしいが、攪乱で詳細不明。

[SS-028]

DS・DT49区に位置し、調査時は塹壕による攪乱東側をSS-20、西側をSS-28としていたものを、報告に際してSS-028と一括する。結果、水田面の広がりは、東西5.2～６m、北は調査区外へと続き南北3.6m以上。標高は26.10m前後。南を幅約50cm、比高差約１cmの畦畔で画され、東はSD-021がSS-018との間にあり、その北ではSS-019が隣接する。西側は幅推定60cm前後、比高差約６cmの畦畔がSS-048との間にある。

南畦畔の水口については既に触れた。東側SD-021との水口部の詳細は不明。西畦畔は南と北の２箇所に水口を確認している。南は幅約100cm、北は幅約80cm。ともに攪乱際で詳細不明。

[SS-031]

調査区南端、DU・DV46区に位置する。若干、畦畔の検出位置がずれるが、18次調査上層水田SS-3の北

側部分にあたる。ところが、水田面の標高は東側同様、25次調査側が５cm以上高く、水田覆土を十分掘り下げないまま水田を認識した可能性が高い。以下、そのまま報告する。

東側は幅70cm前後、比高差３cm前後の畦畔でSD-044・SS-024と画され、西側は南半を幅約100cm、北半を幅約70cm、比高差３～４cmの畦畔でSS-032と画され、北側を幅70cm前後、比高差約３cmの畦畔でSS-045と画されている。18次調査SS-3と併せた水田面は、南北約８m、東西4.2～５mとなり、25次調査SS-031での標高は26.26m前後である。

東畦畔北端の水口については、SS-024で既に述べた。西畦畔にも幅30cm弱の水口が開きSS-032側に傾斜するらしいが、埋土等の詳細は不明。北畦畔も東端約100cmが開き、段状にSS-045側が下がる。埋土は、上部の①層が黄褐色砂質土。径１～２㎜の砂粒を含み、シルト質土が多く混じり、しまりがあり、下部に鉄・マンガン分の沈着がある。下部の②層はオリーブ褐色砂質土。径１㎜以下の砂粒を含み、細砂はラミナ状に含み、シルト土粒も少し混じる。砂質が強く、しまりがややある（図28－19）。

[SS-045（旧SS-30①）]

DU47区に位置する。遺構検出時には、北側SS-046と一体としSS-30としていたが、その後南北に分割できると理解を改め、調査時には南側をSS-30①、北側をSS-30②とした。SS-30①を、報告に際してSS-045と再度呼称変更する。

SS-045は南側を幅70cm前後、比高差10cm前後の畦畔でSS-031と、東側を幅30～70cm、比高差10cm前後の畦畔でSS-025と、西側を幅40～70cm、比高差やはり10cm前後と高い畦畔でSS-032・033と画されている。一方北側は、西端こそ明確な比高差があるものの、中央部は幅70cm以上、比高差１cmに満たない微弱な盛り上がりでしかない。水田面の広がりは、東辺約４m、西辺およそ３m、東西５m弱で、標高26.15m弱を測る。

南畦畔の東端に大きな段差をもった水口が開くが、これについては先に述べた。東西の高い畦畔に水口は開かない。低平な北畦畔も水口は確認していない。ただ東端部では、明瞭な東畦畔との間に水口が開いていた可能性も考慮される。

[SS-046（旧SS-30②）]

DU47・48区に位置する。SS-045で述べたように、調査時にはSS-30②としていたのを、ここでSS-046として報告するものである。

南側SS-045とは、幅70cm以上、比高差約１cmの微弱な畦畔で画され、東側SS-025との間は畦畔が認められず、一部に段差を生じている。西側は、幅70cm前後、比高差約７cmの畦畔でSS-033と画され、北側SS-047との間には、幅90cm前後、比高差約５cmの畦畔がある。

先に述べたように、南側水口は明確でない。また東側はSS-025側からみれば幅広の水口が開く格好であるが、SS-046からは東畦畔自体が存在しない。ただSS-046側が一段低く、SS-025からの導水が窺える。西畦畔には水口が認められない。北畦畔は、西側約120cmが開き、水口となる。傾斜はわずかながらもSS-047側。埋土は、上部の①層が、径１㎜前後の砂粒を少量含む暗灰黄色粘質土。下部の②層は、径１㎜前後の砂粒を多く含む灰黄色粘質土。小指先大の緑灰色の丸いブロックと、明黄褐色の鉄分の沈着層が一部にみられる（図28－20）。

[SS-047（旧SS-29①）]

DU48・49区に位置する。これも遺構検出時に、北側のSS-048と一連のSS-29とし、調査進行に伴って、SS-29を南北に①・②と分割した。そのうちの南側SS-29①を、SS-047として報告する。

南側は幅90cm前後、比高差約６cmの畦畔がSS-046との間にあり、東側南半は幅40cm前後、比高差約４cmの畦畔がSS-026と区画し、東側北半は幅50～70cm、比高差３～４cmの畦畔がSS-027との間にある。西側は幅50～70cm、比高差約６cmの畦畔でSS-034と画されている。北側は、幅50cm前後の微弱な高まりである。これらの畦畔に囲まれた水田面は、東西約４m、南北約３mで、標高26.12mである。

水口のうち、南畦畔についてはSS-046で、東畦畔はSS-026で述べた。西畦畔は南端が幅約50cm開き、等高線の走りから、SS-033・034からSS-047への導水が窺える。埋土の詳細は記録していない。西畦畔北端は微弱な北畦畔に連続するらしく、その北畦畔は東端で幅約40cmの水口を形成する。詳細は不明。

[SS-048（旧SS-29②）]

先に記したように、調査時にSS-29②としたものを、報告に際してSS-048とする。調査区北辺DU49区に位置し、北は調査区外へと広がる。南側は幅50cm前後の微弱な高まりでSS-047と区画され、東は幅推定60cm前後、比高差約４cmの畦畔でSS-028と画され、西側は幅40～60cm、比高差約７cmの畦畔でSS-035と画され、

東西約4.2m、南北3.7m以上を測る。水田面の標高は26.11～12m。

南と東の水口については既に述べている。西畦畔は、南北両側が水口となる。南水口は幅30cm弱。わずかながらSS-048側に低い。埋土はSS-048側上部の①層が暗灰黄色粘質土で、径1㎜前後の砂粒を多く含む。SS-035側下部の②層は暗灰黄色粘質土。北水口は幅50cm以上で、SS-048側に明確に傾斜する。埋土は黄褐色粘質土に径1㎜前後の砂粒が多量に混じる（図28－21・22）。

[SS-032]

DV46・47区、DW46・47区に広がる水田。18次調査上層水田SS-20の北への広がりとして検出したが、東西の畦畔にやや齟齬があり、また水田面・畦畔とも、25次調査SS-032が高くなってしまっている。以東同様に、十分掘り下げきれていないまま水田面とした可能性が高い。以下では、調査のまま報告する。

東側は、SS-031との間に幅70～100cm、比高差5cm前後の畦畔があり、その北SS-045との間には幅40～70cm、比高差約8cmの畦畔がある。西側SS-038との間の畦畔は、幅100cm前後、比高差約6cmである。北側は、SS-033西畦畔が、SS-032西畦畔より約1m東に位置し、そのずれ分がSS-038との水口となるとみられる。その東、SS-033との間には攪乱が大きく及び、畦畔を確認していない。18次調査SS-20と併せた水田面の広がりは、南北約11m、東西4m前後となり、25次調査SS-032の水田面標高は26.18～21mである。

東畦畔のSS-031との水口については既に述べている。西畦畔には1箇所、SS-038との水口がある。幅約20cmで、わずかにSS-032側に傾斜する。埋土は、上部の①層が黄褐色砂質シルトで、径1㎜前後の白色砂粒を含む。下部の②層は、やや粘性が強いにぶい黄褐色シルト（図29－23）。北側のSS-037・033とも水口を開くらしいが、詳細は不明。

[SS-033]

DV47・48区に位置する。南側SS-032との境は不明であるが、東側SS-046との間には幅70cm前後、比高差約6cmの畦畔がある。西側は幅60cm前後、比高差2cm前後の畦畔があり、それが北側に連続し、幅80cm前後、比高差約2cmの畦畔として、SS-034と区画されている。水田面の広がりは、東西2.3～3m、南北推定約4m、標高26.18m前後である。

南側は畦畔・水口とも詳細不明。東西の畦畔に水口は開かず、北畦畔東端が幅約90cm開き、等高線の走りから、SS-033からSS-047・034への導水が窺える。

[SS-034]

SS-033の北、DV48・49区に位置する。南側は幅80cm前後、比高差約5cmの畦畔がSS-033との間にあり、東側SS-047との間には、幅50～70cm、比高差約2cmの畦畔がある。西は幅約70cm、比高差約2cmの畦畔でSS-037と画され、北は幅約50cm、比高差約2cmの畦畔でSS-035と画されている。これらで区画された水田面は、東西約3.5m、南北2.3mと狭く、標高は約26.15m。

各畦畔には水口が開くが、南と東については既に述べている。西畦畔は南端が幅約50cm開いて、SS-037へと通じる。詳細は記録していない。北畦畔は東西両端が水口となる。東水口は幅約100cm、西水口は幅約70cm。ともに傾斜はほとんどないが、全体の等高線の走りから、SS-034からSS-035への導水が推測できる。東水口の埋土は3層に区分され、最上部①層が灰黄色粘質土で、径1㎜前後の白色砂粒を含む。②層は灰黄色粘質土ながら砂粒を含まず、鉄分の沈着により、一部明黄褐色を帯びる。③層は灰黄色粘質土で、径1㎜前後の白色砂粒を多く含む。西水口の埋土も2層に区分され、上部の①層が灰黄色砂質シルトで、径1㎜前後の白色砂粒を多く含む。下部の②層は暗灰黄色シルト（図29－24・25）。

[SS-035]

DV49区に位置する。南側SS-034との間には幅約50cm、比高差約3cmの畦畔があり、東側SS-048とは幅40～60cm、比高差約4cmの畦畔で区画され、西側SS-037・036との間には、幅約90cm、比高差約6cmの畦畔がある。北側は調査区外へと広がり、確認した水田面は東西2.7～3mで、南北は4.2m以上となる。標高は26.12m前後。

南畦畔と東畦畔の水口については、SS-034・SS-048で述べた。西畦畔は、南端で幅約30cmの水口となり、SS-037側へ傾斜する。埋土は、上部①層が径1㎜前後の砂粒を多く含む灰黄色粘質土。下部の②層は灰黄褐色粘質土で、①層より粘性が強く、上面に薄い黄橙色の鉄分の沈着がある（図29－26）。一方、西畦畔北側も幅200cm以上に畦畔が途切れるが、詳細は不明。

[SS-038]

これまで述べてきた水田の西側、そしてSD-041の東側となる、DW区およびDX区の水田面は、かなり不明瞭な検出となってしまっている。調査区北端

のSS-036・SS-041は辛うじて区分したものの、それ以南がとりわけ不明瞭である。SS-032西側畦畔が北端で屈曲し、わずかながら東西方向の畦畔となるとみられたため、その延長で水田面が区画されるとし、南北にSS-038、SS-037とした。その西への広がりは、北側でSS-036とSS-040の間の畦畔が明瞭で、その延長に区画されると想定して、西側をSS-039とした。しかし、攪乱もあり、想定した位置での畦畔は検出できなかった。逆に、北端で東西方向に延びる畦畔の一部を認めた。調査時にはSS-039に含めたままとしたが、報告にあたってSS-049とする。このように、不明瞭な部分を残したままであるが、基本的に調査時の理解のままに、SS-036～040・049を以下報告する。

SS-038はSS-032の西隣に位置し、先に述べたように、SS-032西側畦畔が北端で屈曲し60cm程度西へ延びる状況から北限とした。DW46･47区に位置することになる。西側畦畔は南端でその一部を検出しているが、それ以北は攪乱で不明。南側18次調査上層水田SS-21に東西の畦畔出土位置は一致し、一連の水田面である可能性が高い。併せて、東西約３m、南北約11mを測ることとなる。水田面の標高は26.21m前後。東側SS-032との間の畦畔は、幅100cm前後、比高差約６cm、水口が１箇所開くが、詳細は既に述べた。西畦畔は攪乱際で幅約50cm分、比高差約４cmを検出したに留まる。

[SS-037]

SS-037はSS-038の北側、DW47～49区に及ぶ。東側はSS-033～035とそれぞれ明確な畦畔で区画され、水口も認めた。北側も、微弱な畦畔でSS-036と画されている。ところが、南側のSS-038とは部分的な畦畔で区分したが、西半に想定される位置に畦畔は確認できてなく、西側畦畔にいたっては、全く検出していない。このような状況下で想定した水田面の広がりは、東西５～5.5m、南北９～9.5mである。ただし、その南北間に水田面標高は26.21～26.12mの変化があり、とりわけ南半で傾斜が大きいようである。したがって、本来南北に複数枚に区分できた可能性が高い。

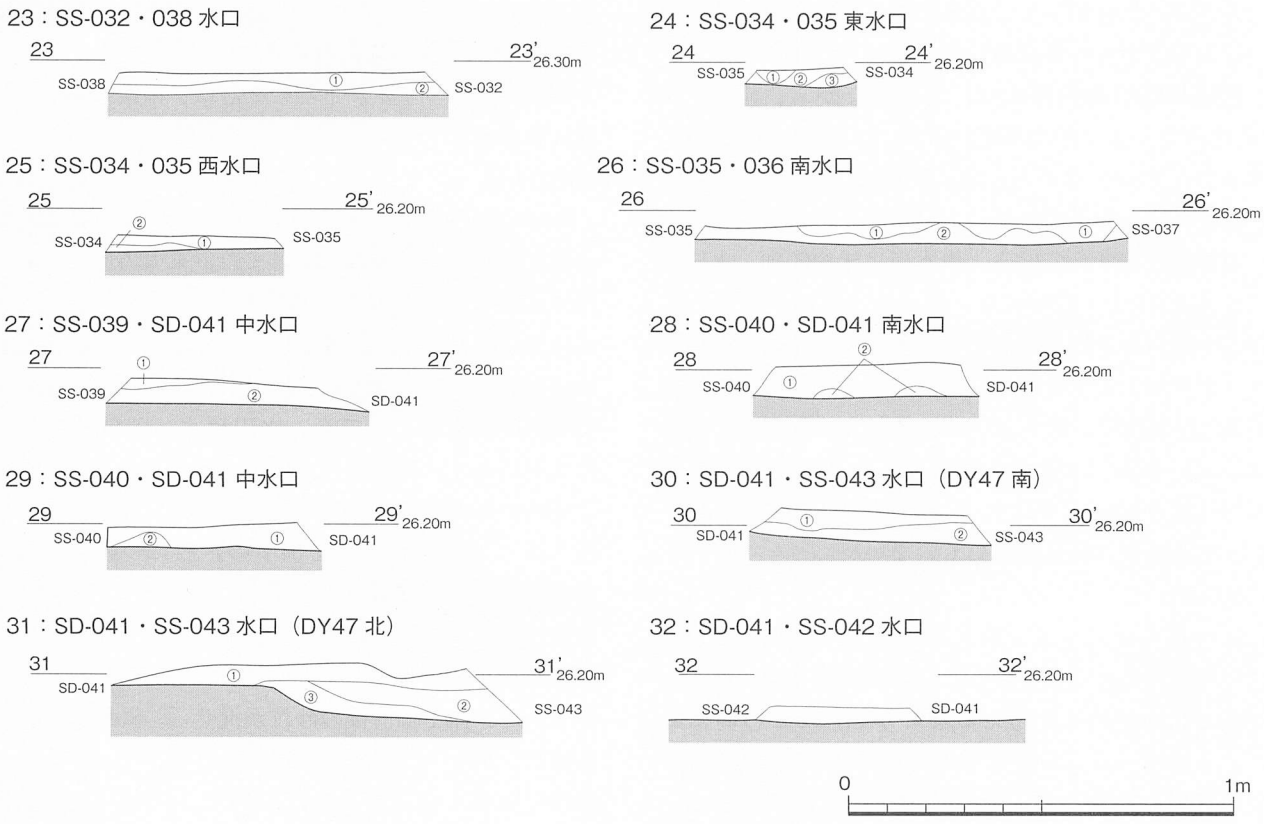


図29　Ⅱ－2－②層（上層水田）に伴う水口部土層図(2)（縮尺1/20）

[SS-036]

調査区北端、DW49区に位置する。南側は微弱ながら、幅約90cm、比高差１cm程度の畦畔でSS-037と画され、東側は調査範囲内でSS-035との間に畦畔は確認していない。西側のSS-040との間には、幅約70cm、比高差約２cmの畦畔がある。北は調査区外へと延び、確認できた水田面は、東西約5.5m、南北2.5mで、標高は26.10m前後である。

微弱な南畦畔は東西両端が水口となるらしいが、詳細は不明。東畦畔にも水口は開くらしいが、残存範囲が狭く詳細不明。西畦畔には水口が開かない。

[SS-039]

当初、北側SS-040南畦畔以南、SD-041東畦畔以東の、DX46～48区に広がると想定していたが、先に述べたように、北部で検出した畦畔以北はSS-049として分離することとした。水田面標高は25次調査側がやや高いものの、東西畦畔の出土位置はほぼ一致し、南側18次調査SS-22と一連の水田の可能性が高い。となると、東西５m前後、南北約15.5mを測ることになる。しかし、水田面標高は26.21～26.15mの変化があり、しかもSS-037南部同様に、SS-039北部で水田面標高の傾斜が大きい。したがって、北部がさらに複数枚の水田面に分割できた可能性は高いとしなければならない。

西側SD-041との間には、断続的ながら、幅40～90cm、比高差６cm前後の畦畔がある。SS-039の範囲では、３箇所に水口が開くらしい。DV46区では南北の畦畔が攪乱を挟んで東西に互い違いとなり、クランク状水口の可能性を考えている。中水口は幅約60cm。水口部ではSD-041側へ傾斜する。埋土は上部の①層が、灰黄色砂質シルトに、にぶい黄褐色砂質シルトの丸いブロックと径１mm前後の砂粒が混じる。下部の②層は灰黄褐色粘質土で、径１mm前後の砂粒を少量含む。上部はにぶい黄褐色を呈する部分もある（図29－27）。北水口は幅約40cm、やはりSD-041側に傾斜するらしいが、埋土他の詳細は記録していない。

[SS-049]

先に述べたように、調査時にはSS-039に一括していた北端部を新たに分離した。南側西半には、幅70cm前後、比高差10cmを超える畦畔がSS-039との間にある。東側SS-037との間に畦畔は検出していない。西側SD-041との間には、幅80cm前後、比高差約10cmの畦畔があり、北側SS-040との間にも幅100cm前後、比高差約４cmの畦畔が認められる。これらに画された水田面は、東西推定約５m、南北約2.1mを測り、標高は26.12m。

南畦畔は東半が大きく開いて水口となるらしく、等高線の走りから、SS-039側からSS-049への導水が窺える。北畦畔は西端で幅約150cmが開くが、詳細は記録していない。

[SS-040]

DX49区に位置する。南側は幅100cm前後、比高差約５cmの畦畔でSS-049と画され、それが東へも連続し、幅約70cm、比高差３cm前後の畦畔となり、西側SD-041との間にも、幅50cm前後、比高差10cm前後の畦畔が認められる。北側は調査区外で不明。結果、水田面は東西約５m、南北６m以上となり、標高は26.08～26.10m。

南畦畔の水口は既に述べている。東畦畔に水口は開かない。SD-041との間には水口が複数開く。南端、SS-049と共有する位置に、幅約40cmの水口がある。傾斜はSD-041側。埋土は上部の①層が暗灰黄色粘質土で、径１mm前後の砂粒を含み、黄褐色粘質土がブロック状に混じる。そして下部の一部に②層の暗灰黄色粘質土が認められる。中位にも、幅約30cmの水口が開く。傾斜はSD-041側。埋土は上部の①層が、径１mm前後の砂粒を多く含む黄褐色粘質土。一部鉄分の沈着により明黄褐色を呈する。下部の②層は、南端水口と同じ暗灰黄色粘質土（図29－28・29）。

[SS-043]

SD-041以西は、調査区西端を控え、東西幅最大で50cm程度を認めたに過ぎない。また、東西方向に南北を区画するような畦畔を認められなかった。もちろん、水口部にあたっていた可能性もあるが、明確に南北に水田面を区切ることができず、一連の水田面として、SS-043とする。それでも、水田標高に26.06～26.18mの変異があり、複数枚の水田であった可能性が高い。

SD-041との間の畦畔は断続的ながら、幅約80cm、比高差６～17cmを測る。２箇所の水口について詳細を記録している。まず、DY47区南端部には、幅約50cmの水口が開き、SS-043側に傾斜する。埋土は①層が暗灰黄色砂質シルトに、明黄褐色砂質シルトの丸いブロックと、径１mm前後の砂粒が混じる。②層は灰黄褐色砂質シルトで、径１mm前後の砂粒が混じり、径１cm前後の砂礫も混じる。また、DY47区中位には、幅約60cmの水口が開き、SS-043側に段状に傾斜する。埋土は上部の①層が、先の水口と同じく、暗灰黄色砂質シ

ルトに、明黄褐色砂質シルトの丸いブロックと、径1㎜前後の砂粒が混じる。段状に低いSS-043側上位の②層は、径1㎜前後の砂粒が混じる黄褐色砂質土。鉄分の沈着により明黄褐色を呈する。最下部の③層は、1㎜前後の砂粒を少量含む黄褐色砂質シルトである（図29－30・31）。

[SS-042]

調査区北西隅で、畦畔がクランク状になり、別水田面の存在を予測させたため、水口部のみであるが、その北に広がりの予測される水田をSS-042とする。

水口部は幅50cm以上。埋土は、径1㎜前後の砂粒を多く含む黄褐色砂質シルト（図29－32）。

② 溝

検出した溝は、SD-005・023・044・041の4条である。以下、個別に詳述する。

[SD-005]

SD-005はDQ48・49区で認めた、幅25～35cm程度、深さ20cm弱、南北約5ｍに及ぶ溝。水口を介してSS-004に連なり、その水口においては、SS-004からSD-005への通水が示唆された。南端は攪乱で不明ながら、SS-003北畦畔にぶつかって西に転じ、SS-009南西隅部への導水が復元できる。つまり、SS-004からSS-009への配水用水路と考えられる。

埋土は、上部の①層は、Ⅱ-2-①層に共通する暗灰黄色砂質土で、径1㎜前後の砂粒を多く含み、それ以下の粘質土粒をわずかに含む。下部の②層は黄褐色砂質土で、径1㎜前後の砂粒はほとんど含まず、それ以下の砂粒がラミナ状に少し混じり、粘質土粒をやや含み、しまりがある（図30－a）。

[SD-023]

SD-023はDT46・47区で出土した、幅70～100cm、南北約10ｍに及ぶ溝。畦畔上面からは深さ15cmに及ぶ。調査時には、攪乱北側をSD-22、南側をSD-23としたが、SD-023と一括する。なお、南側18次調査では該当する遺構が存在せず、一帯の水田と同様、上層水田面より上位で認識した可能性もある。しかし、18次調査SS-2の西端から派生していた可能性が位置的にわずかながらも残り、そのまま報告する。

東西両側の畦畔は断続的で、それぞれの水口については、各水田で報告している。基本的にSD-023へ東西の水田から排水され北流し、底面の傾斜はSD-023側ながら、SS-026南畦畔にあたってSS-025北端を西へと通水していたと考えられる。

なお、攪乱以南の北端で、花崗岩製台石（図31－5）が出土している。

[SD-044]

DT46区に位置する。幅約1.3m、調査区内での南北長は2ｍ余、深さは3cm程度と浅い。検出標高に齟齬があるものの、南側18次調査SD-9と一連の溝である。18次調査SD-8から18次調査SD-9・25次調査SD-044を経て、SS-024への導水が窺える。

[SD-021]

DS48・49区に位置し、幅25～50cmで長さ約4ｍ。深さは畦畔上面からでも3cm程度と浅い。等高線の走りから、SS-017からSS-027とSD-021への通水に分かれ、そしてSS-020へと導水されたと考えられる。

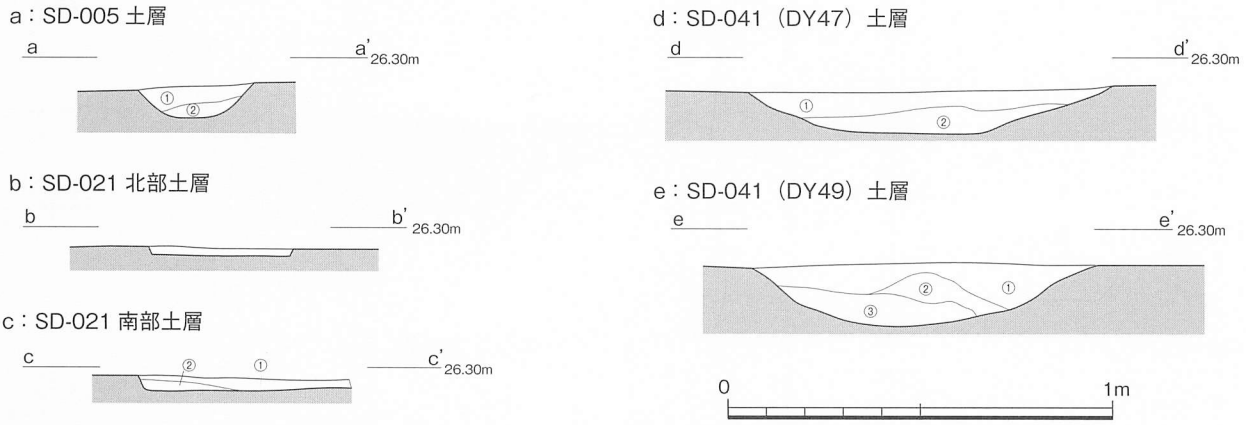


図30　Ⅱ-2-②層（上層水田）に伴う溝土層図（縮尺1/20）

埋土は、溝中央部では、径１㎜以下の砂粒を含み、全体にシルト質が強く、しまりのある黄褐色砂質土(図30－ｂ)。南側水口部では、上部の①層が、径１㎜前後の砂粒をやや多く含み、シルト質土を少量含み、しまりのある黄褐色砂質土。下部の②層が溝中央部の①層に共通する、径１㎜以下の砂粒を含み、全体にシルト質が強く、しまりのある黄褐色砂質土（図30－ｃ)。

[SD-041]

調査区の西端、DY46～50区に位置する南北方向の溝。若干東西に屈曲するが、ほぼまっすぐにのび、幅80cm前後で、25次調査区内では南北約21ｍに及ぶ。深さは10～15cmで、溝底は北側に低い。南側18次調査ではSD-24に該当し、18・25次調査を通じた南北長は41ｍ以上に達する。

両側は断続的な畦畔があり、東西の水田面と画されるとともに、水口により通水している。それら水口については、既に画各水田面の報告で述べた。概ね、東側の水田からは排水を意図した溝であり、西側の水田へは導水用の溝と言える。

埋土は、南北２箇所で詳細を記録した。いずれも上部は砂質が強く、下部はシルト質が強い。南側DY47区では、上部の①層が、径１㎜前後の砂粒を含むにぶい黄褐色砂質シルト。上部水田からの鉄分沈着により、全体に明黄褐色を帯びる。下部の②層は、径１㎜前後の砂粒をごく少量含む黄褐色シルト。北側DY48・49区境界部では３層に分かれた。最上部の①層は、径１㎜前後の砂粒を多く含む黄褐色砂質シルト。上部水田からの鉄分沈着により明黄褐色を呈する部分がある。その下の②層は暗灰黄色砂質シルトで、径１㎜前後の砂粒を少量含む。最下部の③層は、径１㎜前後の砂粒をごく少量含む灰黄色シルト。①・②層と比べて粘性が強く、しまりがある（図30－ｄ・ｅ)。

(2) 出土遺物

上層水田出土遺物には、中世の土師器、土師質土器、瓦器、陶磁器の他、それ以前の土師器、須恵器、瓦、弥生土器や、石器、鉄器がある。それらには、a1層（Ⅱ-２-①層）として取り上げた溝埋土出土遺物、a2層（Ⅱ-２-②層）として取り上げた畦畔部分出土遺物、そしてa3・4層（Ⅱ-２-②層）として取り上げた水田面以下の耕作土出土遺物がある。以下、それぞれ報告する（表４)。

① 溝（a1層）出土の遺物

上記したように、溝出土遺物は、水田覆土出土遺物と同じく、調査段階ではa1層（Ⅱ-２-①層）出土

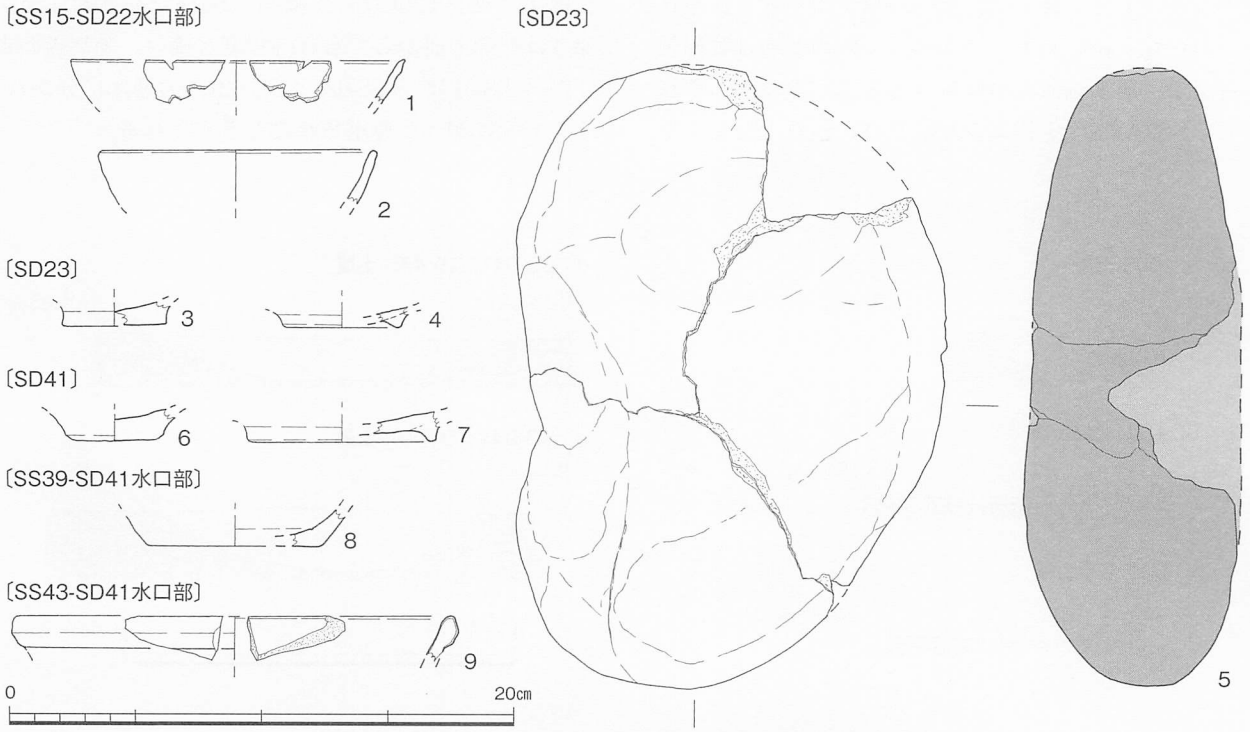


図31　Ⅱ-２-②層溝（a1層）出土遺物（縮尺1/3）

として取り上げを行っていた。しかし、溝機能段階から既に埋没していた部分と、水田廃絶時の埋土との区別ができていない。ここでは、溝に付随する水口部分も含めて、Ⅱ-2-①層（a1層）とは区別して、Ⅱ-2-②層出土遺物として報告する。提示遺物は９点（図31、図版13－６）。

[SD22水口部]

１・２は土師器坏または埦の口縁部。１は外傾してのび、２は内湾してのび、口縁端部を丸く収める。

[SD23]

３は小型の土師器坏底部で、底面から一度上方へ立ち上がり、反転して外傾する。４は瓦器埦底部。貼付高台は断面三角形状を呈する。磨滅のため炭素の吸着が残存していない。５は花崗岩製の台石である。著しく風化しており、非常に脆い。一部を磨面として使用している。

[SD41]

６は小型の土師器坏底部で、底面から一度上方へ立ち上がり、反転して外傾する。７は土師器埦底部。器壁がやや厚く、幅広で低めの高台を有する。

８はSS-039との水口部から出土した、平底の土師器坏底部。底面からそのまま緩やかに内湾して体部にいたる。

９はSS-043との水口部から出土した白磁碗Ⅳ類で、玉縁状を呈する口縁部。12世紀後半。

②　畦畔部（a2層）出土の遺物

畦畔部出土遺物で図化できたのは３点のみ（図32）。１はDQ48区のSS-003・009・010間畔から出土した、柱状高台の土師器坏。底端部が肥厚し、一度内傾した後に反転して外傾するもので、厚みがある。２・３はDW46-16・17・21・22区のSS-032・038間畔から出土したが、検出レベルが高く、上位を掘り残した可能性が高い地点である。２は、やや幅広で低い高台をもつ土師器埦底部。３は土師質土器羽釜の内傾する口縁部である。面をなす端部よりやや下方に断面三角形状の突帯を貼り付けている（図版13－７）。

③　耕作土（a3・4層）出土の遺物

耕作土として取り上げた遺物の中にも、明らかに時期が下がる遺物が存在した。DY47区畦からの近現代陶磁器２点と、DY49区畔からの近現代陶磁器１点である。いずれも調査区西端の土層観察用畦出土遺物であり、攪乱部の掘り残しから出土した可能性が高く、以下の報告では除外している。報告提示する遺物は27点（図33・34、図版13－８）。

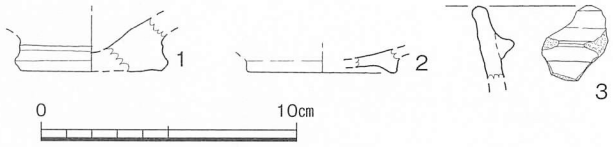


図32　Ⅱ-2-②層畦畔部（a2層）出土遺物（縮尺1/3）

１～10は土師器。１は皿の上半部で、口縁端部は丸く収める。２～６は平底の坏底部。底面から緩やかに内湾して体部にいたるものと、一度立ち上がって外反し、反転して内湾するものがある。４～６の底面には回転糸切り離しの痕跡が残る。４の内面と外面の一部には煤が付着し、灯火具として使用されていたとみられる。７～10は埦底部。いずれも細く高い貼付高台である。

11～15は瓦器埦。11は端部に丸みをもつものの、やや尖り気味に収める口縁部。径１㎜大の石英・長石を含むなど、胎土はやや粗い。12～15は底部。12・13は断面三角形状の高台、14・15は断面低い方形状の高台である。12は内面見込みに斜格子状の暗文風ミガキを施す。13の高台は横ナデ調整されるものの、貼り付けの仕上がりはいびつで、炭素の吸着はほとんど残っていない。また、15の焼成は須恵器に類似しているが、器形から瓦器と判断した。

16は白磁碗Ⅳ類で、玉縁状を呈する口縁部である。

17はDU46区出土の土師質土器羽釜の脚部小片である。他にもDY46区の南畔で土師質土器羽釜口縁部片が１点出土しているが、ともに掘り残しが想定できる地点である。

18･19は須恵器。18は口径･器高から壺蓋と判断した。平らな天井部から緩やかに屈曲し、口縁部は直線的にのびる。回転ナデにより端部内面はやや凹む。19は短頸壺の口縁部である。口縁部は内傾して短くのび、肩部との境は明瞭である。

20～26は石器。20～23は砥石あるいは磨石である。20は火山岩製の砥石で、全面が黄色く変色しており、著しく磨滅している。上面の中心と考えられる部分がよく使用されているが、上面縁辺部や下面も砥面として使用された可能性が高い。21は火山岩製で、上面を砥面として使用した結果やや凹み、側面は成形時の敲打痕を残す。側面と破面には、それぞれ被熱により黒

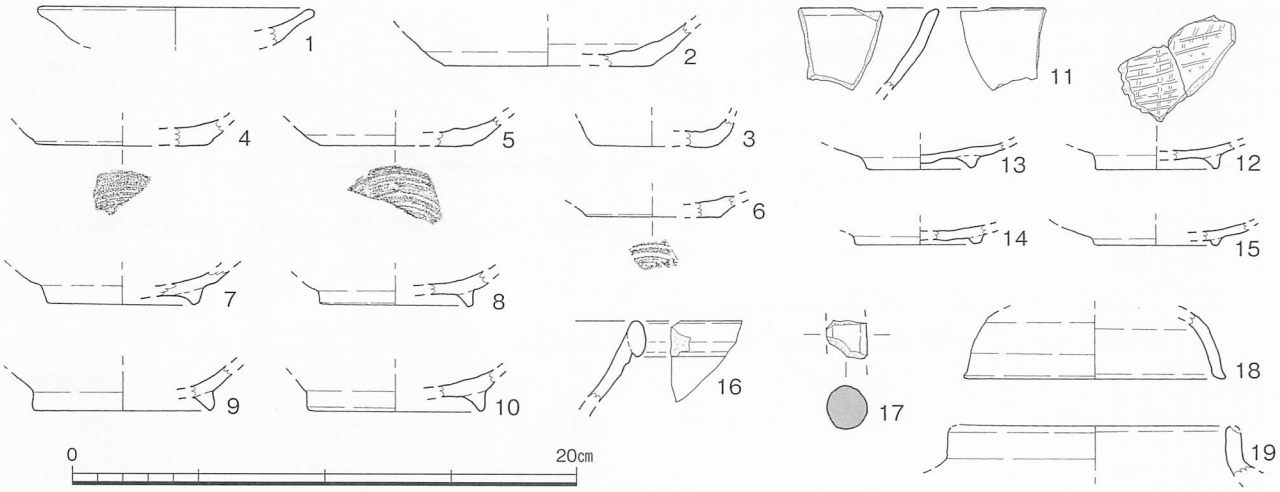


図33　Ⅱ - 2 - ②層耕作土（a3・4層）出土遺物(1)（縮尺1/3）

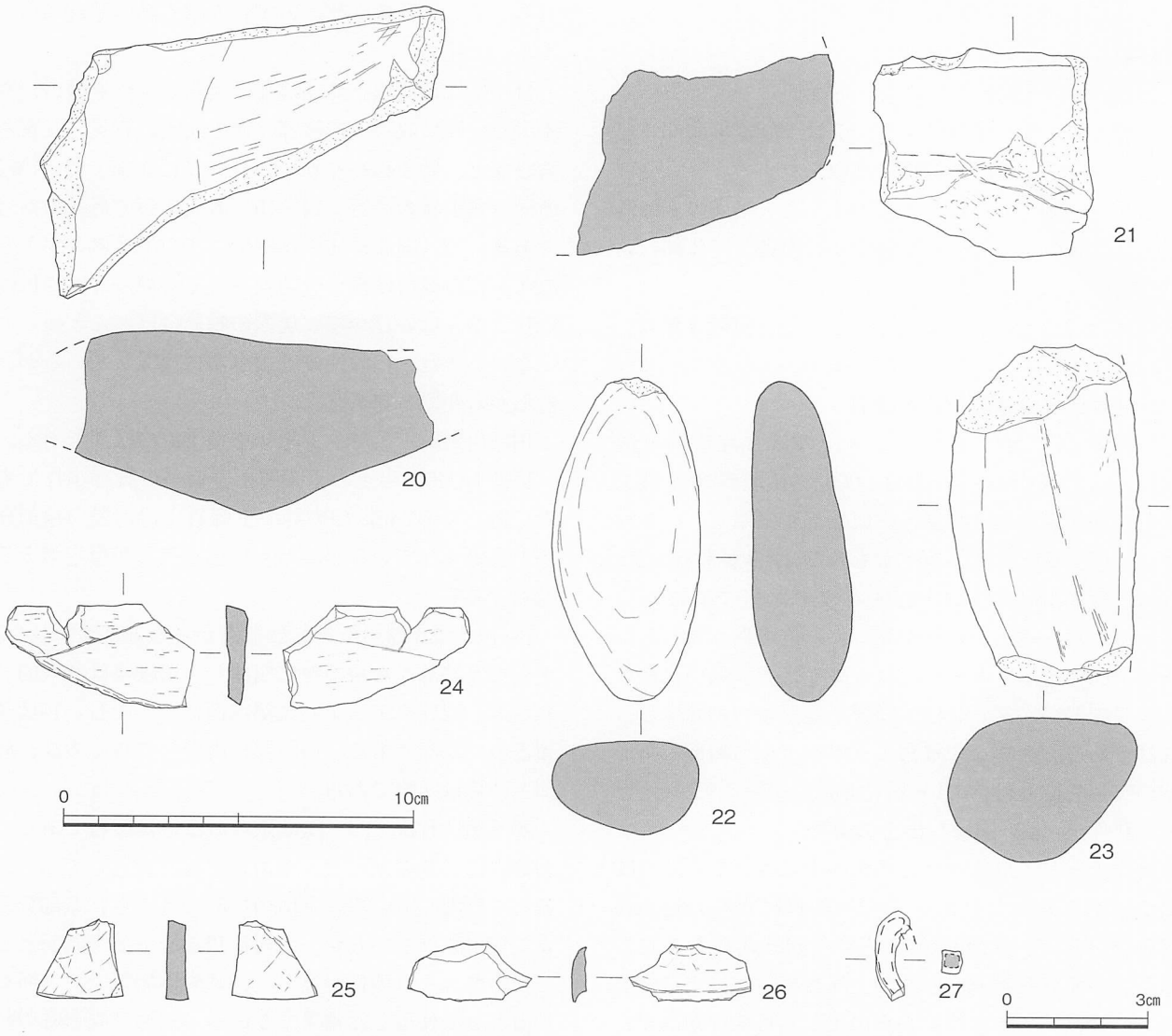


図 34　Ⅱ - 2 - ②層耕作土（a3・4 層）出土遺物(2)（縮尺 1/2・2/3）

表4　Ⅱ－2－②層出土遺物観察表

図31　Ⅱ－2－②層溝（a1層）出土遺物

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
1	R20057	r2148	a1層	SS015-SD023 北端水口	土師器	坏or埦	口縁部	外面磨滅、内面ミガキか。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	3
2	R20058	r2148	a1層	SS015-SD023 北端水口	土師器	坏or埦	口縁部	全面磨滅。内外面灰白色、断面灰色（黒化層）。微細な石英・長石・赤色粒わずかに含む。	3
3	R20054	r2144	a1層	SD023(DT46)	土師器	坏	底部	全面磨滅、剥落顕著。内外面灰白色。石英・長石の砂粒、微細な赤色粒まばらに含む。	3
4	R20055	r2144	a1層	SD023(DT46)	瓦器	埦	底部	全面磨滅、高台部周辺横ナデか。外面にぶい黄橙色、内断面灰白色。胎土精良。	3
5	R20053	R1	a1層	SD33	石器	台石		花崗岩製。現重量3530g。集中的な敲打痕は認められず、一部を磨面とする。	4
6	R20056	r2145	a1層	SD041(DY46)	土師器	坏	底部	全面磨滅。外面灰白色、内面浅赤橙色。石英・長石の砂粒多く含む。	3
7	R20061	r2153	a1層	SD041(DY48)	土師器	埦	底	全面磨滅。浅黄橙色。微細な石英・長石・赤色粒わずかに含む。	3
8	R20059	r2150	a1層	SS039-SD041 (DY47) 水口	土師器	坏	底部	全面磨滅。灰白色。微細な石英・長石・赤色粒まばらに含む。	3
9	R20060	r2151	a1層	SS043-SD041 (DY47南) 水口	白磁	碗	口縁部	玉縁口縁。内外面施釉。磁胎灰白色、微細な空隙あり。	3

図32　Ⅱ－2－②層畦畔部（a2層）出土遺物

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
1	R20074	r2175	a2層	SS003-009-010 間畔(DQ48)	土師器	坏	底部	全面磨滅。外面灰黄褐色、内面にぶい黄橙色。石英・長石の砂粒～細礫多く含む。	3
2	R20076	r2192	a2層	SS032-038 間北畔	土師器	埦	底部	全面磨滅。内外面にぶい橙色、断面褐灰色(黒化層)。微細な石英・長石、赤色粒まばらに含む。	3
3	R20077	r2192	a2層	SS032-038 間北畔	土師質土器	羽釜	口縁部	全面磨滅。内外面横ナデか。内外面橙色、断面褐灰色（黒化層）。石英・長石の砂粒～細礫非常に多く含む。	3

図33・34　Ⅱ－2－②層耕作土（a3・4層）出土遺物

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
1	R20091	r2226	a3層	DW46	土師器	皿	口縁部	全面磨滅。内外面灰白色、断面黄灰色（黒化層）。石英・長石の砂粒、赤色粒多く含む。	3
2	R20079	r2207	a3層	DQ46	土師器	坏	底部	全面磨滅、内外面回転ナデか。浅黄橙色。石英・長石の砂粒～細礫、赤色粒やや多く含む。	3
3	R20095	r2230 r2231	a3層	DX47	土師器	坏	底部	全面磨滅。内外面回転ナデ。内外面浅黄橙色、外底面の一部灰褐色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	3
4	R20100	r2238	a3・4・b1・2層	DQ45	土師器	坏	底部	全面磨滅、外底面回転糸切り離し痕。灰白色。石英・長石の砂粒と赤色粒わずかに含む。	3
5	R20094	r2228	a3層	DW47	土師器	坏	底部	灯火具。内外面回転ナデ、外底面回転糸切り離し痕。外面橙色、内面灰黄褐色、断面橙色。内外面に煤付着。石英・長石の砂粒まばらに含む。	3
6	R20108	r2258	a3・4・b1・2層	DY45畦	土師器	坏	底部	全面磨滅。外底面回転糸切り離し痕。浅黄橙色。微細な石英・長石やや多く含む。	3
7	R20080	r2207	a3層	DQ46	土師器	埦	底部	全面磨滅。内外面浅黄橙色、断面褐灰色。石英・長石の砂粒と赤色粒多く含む。	3
8	R20087	r2221	a3層	DT46	土師器	埦	底部	全面磨滅。内外面灰白色、断面黄灰色（黒化層）。微細な石英・長石わずかに含む。	3
9	R20099	r2236	a3層	DY46	土師器	埦	底部	全面磨滅。灰白色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	3
10	R20111	r2262	a3・b1層	DU46南壁	土師器	埦	底部	全面磨滅。浅黄橙色。微細な石英・長石わずかに含む。	3
11	R20104	r2254	a3・4・b1・2層	DW45畦	瓦器	埦	口縁部	全面磨滅。外面灰黄色、内面にぶい黄色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	3
12	R20082	r2210	a3層	DQ48	瓦器	埦	底部	全面磨滅。外面横ナデ、内面ミガキ。外面灰色、内・断面灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	3
13	R20101	r2241	a3・4・b1・2層	DQ50東畦	瓦器	埦	底部	全面磨滅。内外面灰黄褐色。微細な石英・長石わずかに含む。	3
14	R20102	r2242	a3・4・b1・2層	DR45	瓦器	埦	底部	内外面磨滅、内面ミガキか。内外面灰色、断面灰白色。微細な石英・長石まばらに含む。	3
15	R20092	r2227	a3層	DW47	瓦器	埦	底部	全面磨滅。外面横ナデ、内面ナデか。内外面灰色。微細な石英・長石まばらに含む。	3
16	R20106	r2256	a3・4・b1・2層	DX45畦	白磁	碗	口縁部	玉縁口縁。灰白色の磁胎に灰白色の釉を内外面に施す。微細な空隙あり。	3
17	R20088	r2222	a3層	DU46	土師質土器	羽釜	脚部	ナデ調整。にぶい褐色。石英・長石の砂粒多く含む。	3
18	R20098	r2233	a3層	DY47	須恵器	壺蓋	口縁部	内外面回転ナデ。灰色。石英・長石の砂粒やや多く含む。	3
19	R20089	r2225	a3層	DW46	須恵器	短頸壺	口縁部	内外面回転ナデ。灰白色。石英・長石の砂粒と炭化物まばらに含む。	3
20	R20084	r2215	a3層	DR46	石器	砥石		火山岩製。中砥。現重量393.2g。	3
21	R20103	r2242	a3・4・b1・2層	DR45	石器	砥石		火山岩製。現重量252.7g。表面磨滅。側面・破面に黒変部あり。	3
22	R20085	r2219	a3層	DS46	石器	磨石		砂岩製。現重量138.5g。全面風化。	3
23	R20083	r2215	a3層	DR46	石器	砥石		砂岩製。粗砥。上下端破損、全面風化。現重量284.8g。	3
24	R20093	r2227	a3層	DW47	石器	素材		結晶片岩。加工痕なし。現重量10.2g。	3
25	R20081	r2209	a3層	DQ47	石器	剥片		サヌカイト。現重量1.8g。	3
26	R20109	r2259	a3・4・b1・2層	DY46畦	石器	剥片		サヌカイト。現重量1.1g。	3
27	R20097	r2231	a3層	DX47	鉄器	不明		断面方形。現重量0.9g。	16

変する部分がある。22は砂岩製の磨石で、扁平な円礫を用いている。全面が磨滅しており擦痕は不明であるが、面は平滑である。23は砂岩製の粗砥で、上下端は破損している。著しく磨滅しているが、やや深めの擦痕が認められる。24は結晶片岩の石片。25・26はサヌカイトの剥片である。

27は器種不明の鉄器。上端は錆が進行した後に破損しているが、下端は錆が進む前に破損したのか、本来の形状を留めているのか、現状では判別できない。輪のような形状が想定でき、断面は方形を呈する。

(3) 小結

調査で検出・認識した水田遺構は上述報告の通りであるが、そこでも指摘したように、本来の上層水田面に達していない範囲が狭くない。調査区東辺のSS-001～004やSD-005周辺では、総じて検出水田面標高が高く、一部では北側に高くなる箇所もあり、掘り足りていないまま遺構検出に及んだ可能性が考えられる。また、調査区南辺一帯も、南側の18次調査北辺より高い位置で上層水田面を把握しており、やはり掘り残したまま、より上位の痕跡を遺構としてしまった可能性が高い。

出土遺物についても、Ⅱ-2-①層と同じ土師質土器羽釜が畦畔部分で1点、耕作土で2点を数える。このうち、畦畔部出土は13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる（図32－3）。しかし、いずれの土師質土器羽釜も18次調査上層水田面と比べて、やや水田検出が高い位置の出土で、掘り残しの可能性が高い。これらを除くと、高台の矮小化した瓦器埦が定量存在することから、13世紀代までは水田耕作時期の下限が遡ると考えられる。

5　Ⅱ-2-③層（中層水田覆土）と出土遺物

調査時にb1層としたⅡ-2-③層は、中層水田の覆土層で、Ⅱ-2-②層下の、砂粒・砂礫を多く含む黄褐色砂質シルトである。出土遺物には、中世の土師器、土師質土器、瓦器、陶磁器の他、それ以前の土師器、須恵器、瓦、弥生土器や、石器、鉄器がある。これらは、Ⅱ-2-①層同様、上部は城北団地区割にしたがい、5m区画で遺物を取り上げ、水田畦畔検出後には、水田区画単位で遺物を取り上げた。以下、前者をⅡ-2-③層上部、後者をⅡ-2-③層下部として、報告する。また、石器・鉄器については、上部と下部を一括して報告する（表5）。

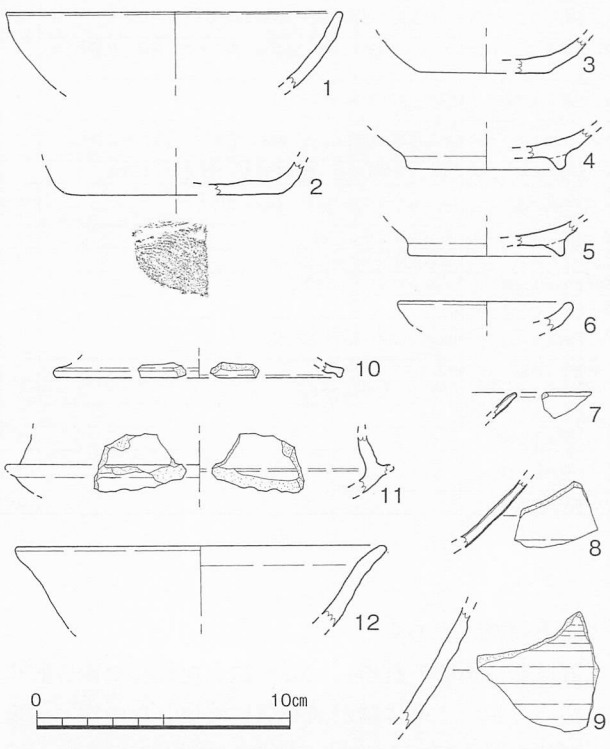


図35　Ⅱ-2-③層（b1層）上部出土遺物（縮尺1/3）

(1) Ⅱ-2-③層上部出土遺物

Ⅱ-2-③層上部以下で取り上げた遺物中には、土師質土器羽釜はもう認められない。それ以外、14世紀以降に下がるような遺物は、わずかに1点あるのみ。攪乱の残るDR46区出土で、中世でも新しいとみられる、内外面ナデ仕上げの須恵質陶器片である。紛れ込みと判断した。

図化した遺物は12点（図35）。

1～6は土師器。1は埦または坏の口縁部。緩やかに内湾する体部から口縁部にいたり、端部を丸く収める。2・3は平底の坏底部。底部から緩やかに湾曲して体部にいたり、2は底面に回転糸切り離しの痕跡を残す。4・5は埦底部で、高台断面形状は幅広でやや低い三角形。6は小皿の上半部。やや厚く、端部を丸く収める。

7は端部を尖り気味に収める薄い青白磁。輪花皿の口縁部とみられる。位置的に上部からの紛れ込みの可能性もある。8は白磁碗体部片。この他、DW49区でも白磁体部小片1点が出土している。

9は須恵質陶器甕の胴部か。横ナデによる段差が顕

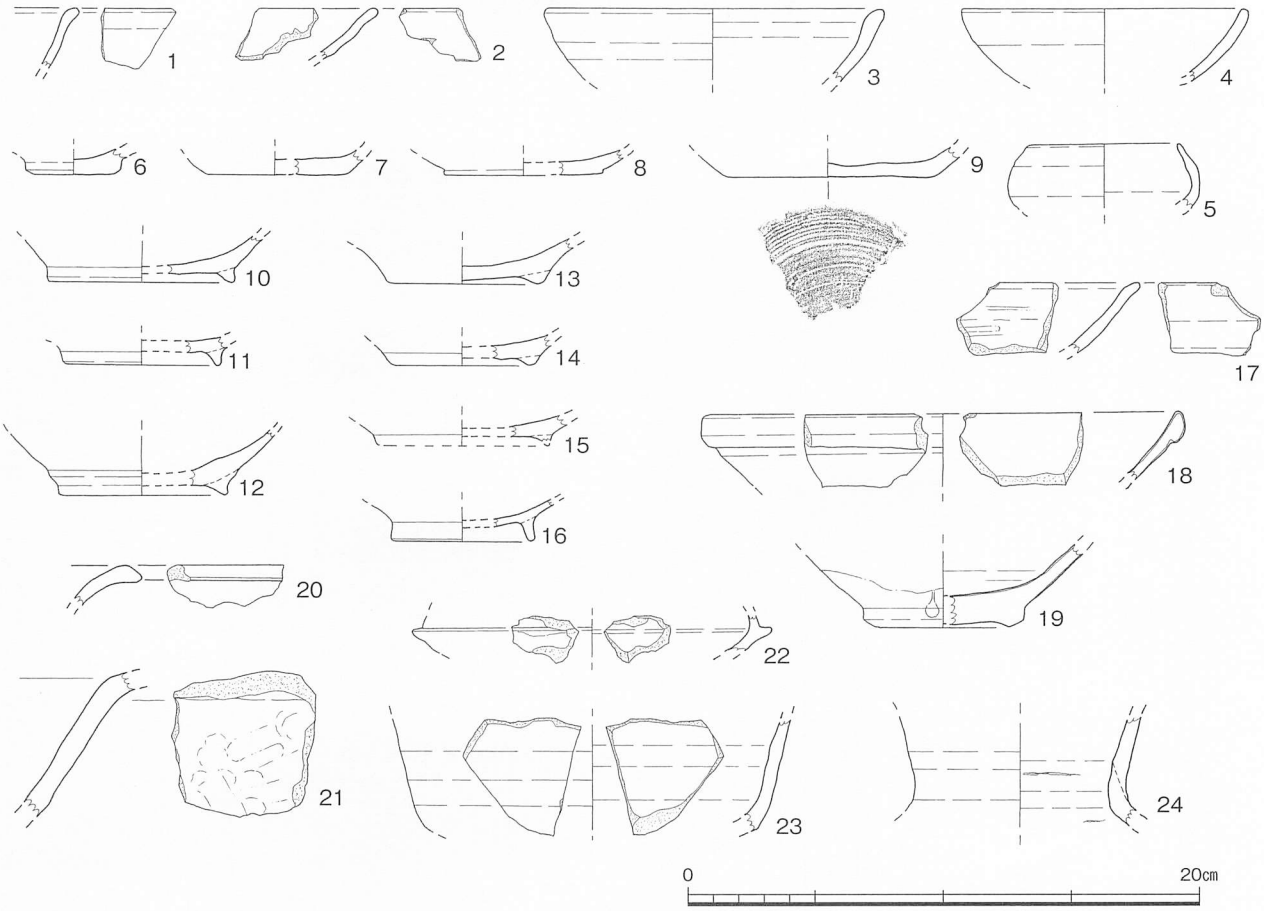


図36　Ⅱ－2－③層（b1層）下部出土遺物（縮尺1/3）

著で、外面には煤が付着している。

10～12は須恵器。10は小片ながら、つまみをもつ蓋の口縁部とみられる。11は坏身。やや長い立ち上がりをもつ。12は坏口縁部。内外面とも丁寧な回転ナデを施し、胎土は精良。

⑵　Ⅱ－2－③層下部出土遺物

Ⅱ－2－③層下部で取り上げた遺物中にも、ほとんど紛れ込みはない。唯一、DY50区のSS-129出土とした中に、近現代の施釉陶器片があるのみで、これは調査区北側の土層観察用畔を控え、攪乱が混在した可能性が高いと判断し、Ⅱ－2－③層の時期を決める資料からは除外した。なお、調査区東壁際で、Ⅱ－2－④層遺物を一部含む可能性がある。

図化した遺物は24点（図36、図版13－９）。

１～16は土師器。１～４は埦または坏の口縁部。１・２は口縁部に横ナデを施し、端部を外方へやや屈曲させる。３は口縁部に横ナデを施し、端部は上方へのび

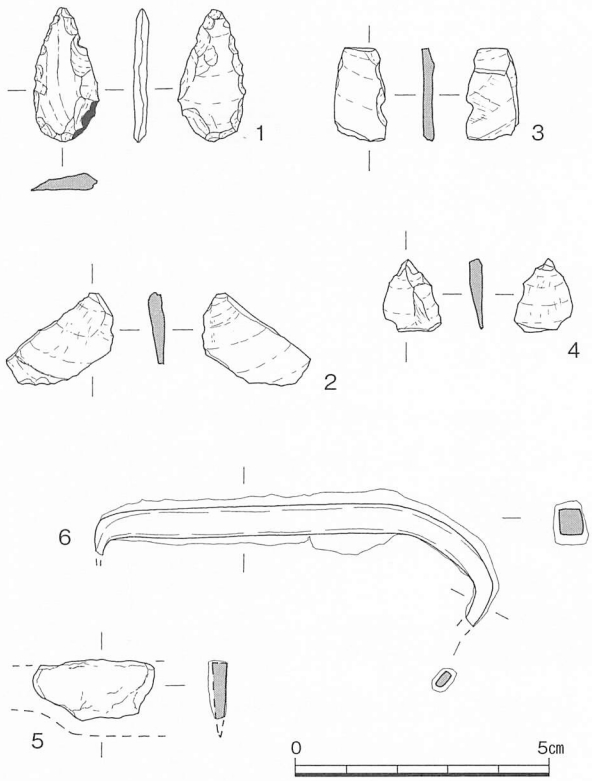


図37　Ⅱ－2－③層（b1層）出土遺物－石器・鉄器－（縮尺2/3）

表５　Ⅱ - 2 - ③層出土遺物観察表

図 35　Ⅱ - 2 - ③層（b1 層）上部出土遺物

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
1	R30011	r3044	b1 層	DV48	土師器	埦 or 坏	口縁部	全面磨滅。灰白色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	5
2	R30005	r3022	b1 層	DT46	土師器	坏	底部	外面磨滅・剥落、内面横ナデ。外底面回転糸切り痕。浅黄橙色。石英・長石の砂粒、赤色粒わずかに含む。	5
		r3023	b1 層	DT46					
3	R30017	r3072	b1 層	DY49	土師器	坏	底部	内外面磨滅、内面横ナデ。灰白色。微細な石英・長石と赤色粒まばらに含む。	5
4	R30001	r3001	b1 層	DQ46	土師器	埦	底部	内外面磨滅。内外面灰白色、断面黄灰色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	5
5	R30010	r3039	b1 層	DV46	土師器	埦	底部	全面磨滅。灰白色。石英・長石の砂粒わずかに含む。	5
6	R30008	r3025	b1 層	DT47	土師器	小皿	上半部	内外面磨滅。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	5
7	R30019	r3074	b1 層	DY50	青白磁	皿	口縁部	内外面施釉・明オリーブ灰色、磁胎灰白色。微細な黒色粒まばらに含む。	5
8	R30004	r3021	b1 層	DS49	白磁	碗	体部	内外面施釉・灰白色。外面まばらに気泡。微細な黒色粒まばらに含む。	5
9	R30009	r3034	b1 層	DU48	須恵質陶器	甕？	胴部	外面横ナデ、内面磨滅。外面黄灰色（煤付着）、内面灰白色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	5
10	R30007	r3024	b1 層	DT46	須恵器	蓋	口縁部	内外面回転ナデ、外面灰色（自然釉）、内面灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	5
11	R30012	r3048	b1 層	DW46	須恵器	坏身	受部	内外面回転ナデ。灰白色。微細な石英・長石まばらに含む。	5
12	R30003	r3020	b1 層	DS48	須恵器	坏	口縁部	全面磨滅。内外面横ナデ。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	5

図 36　Ⅱ - 2 - ③層（b1 層）下部出土遺物

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
1	R30062	r3158	b1 層	SS129（DQ47）	土師器	埦 or 坏	口縁部	口縁端部～内面横ナデ。外面ミガキか。灰白色。石英・長石の砂粒、赤色粒わずかに含む。	5
2	R30056	r3129	b1 層	SS126	土師器	埦 or 坏	口縁部	全面磨滅。淡黄色。微細な石英・長石わずかに含む。	5
3	R30048	r3121	b1 層	SS122	土師器	埦 or 坏	口縁部	内外面横ナデ。灰白色。微細な石英・長石・赤色粒わずかに含む。	5
4	R30055	r3129	b1 層	SS126	土師器	埦 or 坏	口縁部	全面磨滅。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	5
5	R30054	r3128	b1 層	SS126	土師器	埦	上半部	小型品。内外面横ナデ。浅黄橙色。石英・長石の砂粒まばらに含む。	5
6	R30036	r3105	b1 層	SS115	土師器	坏	底部	全面磨滅。にぶい橙色。石英・長石の砂粒と赤色粒まばらに含む。	5
7	R30039	r3111	b1 層	SS118	土師器	坏	底部	全面磨滅。灰白色。石英・長石の砂粒～細礫と赤色粒まばらに含む。	5
8	R30066	r3161	b1 層	SS129（DQ49）	土師器	坏	底部	全面磨滅。灰白色。石英・長石の砂粒と赤色粒まばらに含む。	5
9	R30053	r3127	b1 層	SS125	土師器	坏	底部	内外面横ナデ、外底面回転糸切り離し痕。灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。	5
10	R30020	r3079	b1 層	SS104	土師器	埦	底部	全面磨滅。淡黄色。微細な石英・長石・赤色粒わずかに含む。	5
11	R30026	r3086	b1 層	SS107	土師器	埦	底部	全面磨滅。灰白色。微細な石英・長石まばらに含む。	5
12	R30028	r3090	b1 層	SS109	土師器	埦	底部	全面磨滅。浅黄橙色。微細な石英・長石わずかに含む。	5
13	R30025	r3086	b1 層	SS107	土師器	埦	底部	全面磨滅。内～外面一部煤付着。淡黄色。微細な石英・長石・赤色粒まばらに含む。	5
14	R30044	r3118	b1 層	SS121	土師器	埦	底部	全面磨滅。外面灰白色、内面灰黄褐色。微細な石英・長石、１㎜大赤色粒わずかに含む。	5
15	R30047	r3119	b1 層	SS122	土師器	埦	底部	全面磨滅。灰黄褐色。微細な石英・長石・赤色粒わずかに含む。	5
16	R30037	r3105	b1 層	SS115	土師器	埦	底部	全面磨滅。高台周辺横ナデ。灰白色。石英・長石の砂粒と微細な赤色粒まばらに含む。	5
17	R30049	r3122	b1 層	SS122	瓦器	埦	口縁部	内外面磨滅。口縁部横ナデ、体部外面指オサエ、内面横ミガキ。暗灰色。微細な石英・長石の砂粒わずかに含む。	5
18	R30219	r3077	b1 層	SS103	白磁	碗	口縁部	玉縁口縁。内外面施釉。灰白色。微細な黒色粒わずかに含む。空隙ややあり。	5
19	R30064	r3159	b1 層	SS129（DQ48）	青白磁	碗	底部	外に踏ん張る削出高台。見込みに沈線。内外面灰白色～明オリーブ灰色釉。磁胎灰白色。微細な空隙が多く、微細な黒色粒わずかに含む。	5
	R11076	r1089	I 層	南部					
20	R30042	r3116	b1 層	SS120	土師質土器	鍋	口縁部	全面磨滅。にぶい黄褐色。石英・長石の砂粒、微細な雲母と赤色粒まばらに含む。	5
21	R30067	r3161	b1 層	SS129（DQ49）	土師質土器	鍋	体部	外面縦ハケ目・指オサエ後ナデ。内面磨滅。内外面にぶい橙色、外面上半褐灰色（煤付着）。石英・長石の砂粒～細礫非常に多く含む。	5
22	R30031	r3094	b1 層	SS110	須恵器	坏身	受部	内外面回転ナデ。灰色。石英・長石の砂粒～細礫まばらに含む。	5
23	R30043	r3118	b1 層	SS121	須恵器	坏	体部	内外面回転ナデ。外面灰色、内面灰白色。微細な石英・長石・炭化物わずかに含む。	5
24	R30023	r3085	b1 層	SS106	須恵器	壺	頸部	内外面回転ナデ、外面灰白色（自然釉）。微細な石英・長石・炭化物わずかに含む。	5

図 37　Ⅱ - 2 - ③層（b1 層）出土遺物－石器・鉄器－

遺物番号			出土位置		遺物内容			文様・調整・色調・胎土などの特徴	収納番号
挿図	実測	取上	層位	遺構・地区	種別	器種	部位		
1	R30002	r3004	b1 層	DQ47	石器	石鏃	全形	サヌカイト製。凸基式。現重量 1.1g。	5
2	R30045	r3118	b1 層	SS121	石器	剥片		サヌカイト。現重量 1.1g。	5
3	R30051	r3126	b1 層	SS124	石器	剥片		赤色頁岩。現重量 0.6g。	5
4	R30030	r3092	b1 層	SS110	石器	剥片		瑪瑙。橙色。現重量 0.4g。	5
5	R30013	r3049	b1 層	DW47	鉄器	刀子	茎部	現重量 1.7g。	16
6	R30014	r3054	b1 層	DW49	鉄器	鏃	全形	一部欠損。現重量 12.8g。基本的に横断面方形だが、両先端部は屈曲し、横断面形扁平。	16

る。４は緩やかに内湾する体部から口縁部にいたり、端部を丸く収める。５は小型埦の上半部。あるいは耳皿の可能性も残る。６～９は坏底部。６は底径４～５cmと小型。平らな底部からいったん立ち上がるもので、厚みがある。７～９はやや大型の底部。底部から緩やかに湾曲して体部にいたる。９は底面に回転糸切り離しの痕跡を残す。10～16は貼付高台を有する埦の底部である。高台の断面形状は、細くて高い逆台形、少し幅広でやや低い逆台形、幅広でやや低い三角形がある。

17は瓦器埦口縁部である。横ナデにより口縁部はやや尖り気味になる。

18は玉縁状を呈する白磁碗Ⅳ類の口縁部。19は青白磁碗底部。内面見込み部分に２条の沈線をめぐらすが、下方の沈線は途中で消失する。胴部外面下半および高台は露胎。

20・21は土師質土器鍋。20はやや外反する口縁部で、端部は面をなす。21は体部上半である。口縁部からの変換は緩やかで、破片の外面上半には煤が付着している。

22～24は須恵器。22は坏身で、わずかに内湾する。23は直線的にのびる坏体部。24は長頸壺の頸部で、肩部との境は緩やかに屈曲する。

(3)　Ⅱ-2-③層出土石器・鉄器

石器４点、鉄器２点を報告する（図37）。１・５・６が上部出土で、他は下部出土。

１～４は石器。１はサヌカイト製石鏃である。凸基式で、細かい剥離を縁辺部に施す（図版14－１）。２はサヌカイトの剥片、３は赤色頁岩の剥片、４は瑪瑙の剥片である。

５・６は鉄器。５は３辺を破損するが、断面が三角形状を呈し、刀子の可能性がある。６は鏃と考えられる。一方の端部は欠損しているものの、長くはのびないと推定されるため、釘である可能性も考えたが、両先端部が屈曲し、その横断面形が扁平であることから鏃と判断した。基本的に横断面は方形を呈する。

(4)　小結

Ⅱ-2-②層（上層水田）まで紛れ込んでいた土師質土器羽釜は全くみられず、Ⅱ-2-③層による中層水田の埋没は、13世紀後半以前に遡る。その中で、底部に回転糸切り痕を残す土師器坏（図36－９）や、細く高くなった高台の土師器埦、そして玉縁状を呈する白磁碗Ⅳ類（図36－18）から、12世紀末葉から13世紀前葉に位置づけられる。やや開き気味で密でない内面ミガキの和泉型瓦器埦（図36－17）も12世紀後半に降り、後述するⅡ-2-④層から⑤層でも、さらに新相の瓦器埦がみられ、Ⅱ-2-③層も12世紀後半以降に降ると考えられる。

6　Ⅱ-2-④層（中層水田）の遺構と出土遺物

Ⅱ-2-④層は、調査時にb2～b4層とした、黄褐色砂質シルト。径１㎜前後の砂粒を多く含む。下部は鉄分の沈着により、明黄褐色を呈する。土層図では、Ⅱ-2-⑤層と一括しているが、調査段階では攪拌を受けた上部を水田耕作土であるⅡ-2-④層、以下の顕著な攪拌がみられず砂質の強い土層をⅡ-2-⑤層として掘り分けを行った。なお、調査区東壁でⅡ-2-④層中に水田面とみられる層界を認めたが、西側への広がりはほとんどみられなかった。

(1)　遺構

Ⅱ-2-③層掘り下げながら、畦畔で区画された水田遺構を検出した。概ね方形の水田区画が調査区内全域に並び、調査範囲内で水路などは認められない。南北に５列、東西に９列である。ただし、最北の東西列はわずかな範囲を水田面と認めたのみで、南側の畦畔の位置から便宜的にSS-129と130に区分したが、間に畦畔は検出できなかったため、以下の報告ではSS-129に一括する。また、最東の南北列は当初畦畔を十分認識できないまま、南北にSX-132としていたが、西側の水田面の並びや一部認めた畦畔から、西側同様の水田が並ぶとみて、報告にあたって、南からSS-133～136とした。ただし、東壁土層との対応から掘り下げすぎた可能性がある。同様に最西の南北列も、当初SS-131と一括していたのを、報告にあたっては、SS-137～139とする。以上から、調査範囲においては、SS-101～129、133～139の計36面の水田面を認めたことになる（図35・36、巻頭図版１、図版４・５）。

①　水田

Ⅱ-2-④層上面で認めた水田は36枚。およそ南東方向から北西方向へと傾斜し、その比高差は、最大でも20cm弱である。

[SS-101]

調査区南東隅付近の南壁際、DR45区を中心とした、幅20～40cm、東西長約7.5ｍで出土した。南側18次調査の中層水田SS-111と同じ水田に相当する。水田面の標高は26.17ｍ前後。東端は辛うじて水田隅部にあたり、南北畦畔が南に延びるらしい。北側は幅50cm前後、比高差１cm程度の畦畔でSS-108と区画され、西側は幅約60cm、比高差約２cmの畦畔でSS-102と画されている。ただし、この西側を画する畦畔は、18次調査と25次調査で１ｍ以上のずれがある。SS-101から北のSS-108、115と水田面の標高がやや北に延びる尾根状に高い現状となっている。

北側畦畔中央部には幅約30cmの水口が開き、SS-101からSS-108へ傾斜する。埋土はオリーブ褐色砂質土で、径５㎜以下の砂粒・砂礫を多く含み、砂質が強い。シルト質土もラミナ状に少量含む（図40－１）。

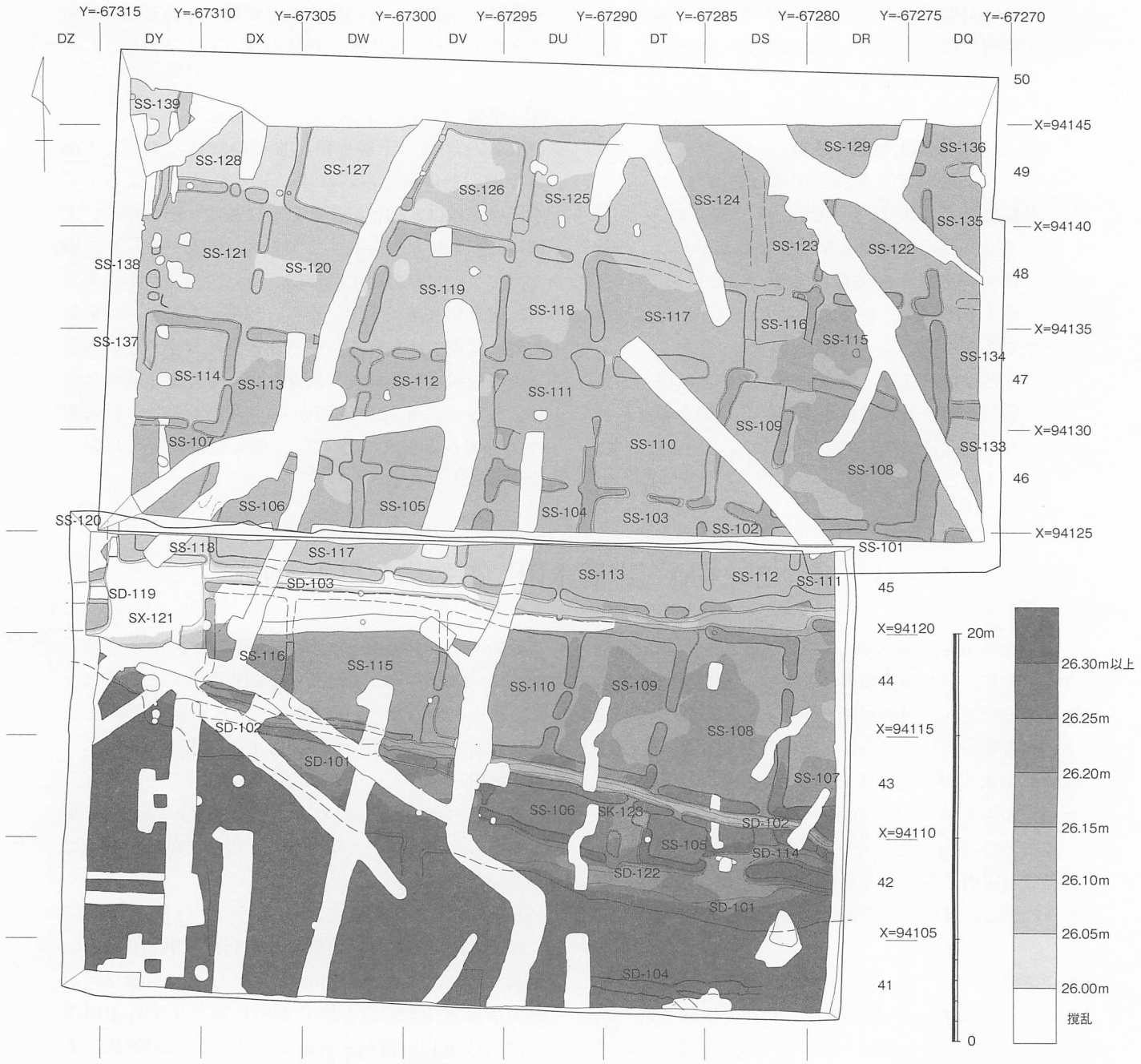


図 38　25 次調査・18 次調査のⅡ - 2 - ④層（中層水田）出土遺構配置図（縮尺 1/300）

[SS-102]

DS45・46区に位置し、南北幅１ｍ前後、東西長約2.5ｍを調査区内では検出した。東側は幅約60㎝、比高差４㎝前後の畦畔でSS-101と、西側は幅約50㎝、比高差約４㎝の畦畔でSS-103と、そして北側を幅約60㎝、比高差約４㎝の畦畔でSS-109と画されている。18次調査の中層水田SS-112と一連の水田面であるが、SS-101で先述したように、東側畦畔がより東側に位置した可能性がある。水田面の標高は、26.12ｍ前後。

畦畔は北西隅部で途切れ、西側SS-103、北側SS-109との水口部となっている。ともに幅約70㎝で、前者はSS-103側へ、後者はSS-109側に傾斜する。埋土も共通し、オリーブ褐色砂質土で、径２㎜以下の砂粒を少量含み、シルト質土がやや多く混じり、粘性がややある（図40－２・３）。

図 39　Ⅱ - 2 - ④層（中層水田）出土遺構配置図（縮尺 1/100）

[SS-103]

DT46区を中心に位置し、南北1.2～1.8m、東西約５mを調査区内で測る。水田面の標高は26.11m前後。東側SS-102とは幅約50cm、比高差約３cmの畦畔、西側SS-104とは幅約70cm、比高差４～５cmの畦畔、北側SS-111とは幅50cm前後、比高差約４cmの畦畔で、それぞれ区画されている。18次調査では、後述する25次調査SS-104とともに、SS-113として東西幅約６mの水田とする。しかし、18次調査のSD-103を挟んだ南側ではSS-109・110に２分割されていること、SS-113の東西に水口が開くこと、さらに25次調査のSS-103・104以北で一貫して同じ位置に畦畔が認められることから、18次調査SS-113が本来は東西に２分されていた可能性が高いとみる。

東側畦畔北端に水口が開くが、これはSS-102で既に記した。北側畦畔の東西２箇所にも水口が開き、その間の畦畔はやや幅が狭い。東側水口は幅約30cm。西側水口は幅約120cm。いずれもSS-110側に傾斜し、埋土はともに暗灰黄色砂質土。径１㎜以下の砂粒が多く混じり、砂質が強く、シルト質土がラミナ状に少量混じる（図40－４・５）。

[SS-104]

DU・DV45に位置し、中央部に演習用塹壕の攪乱が及ぶが、南北２m前後、東西約4.2mの広がりを確認した。水田面の標高は26.11m前後。東側は幅約70cm、比高差５cm、西側は幅約60～90cm、比高差約３cm、北側は幅約70cm、比高差約４cmの畦畔で、それぞれ区画されている。18次調査SS-113の西半部にあたる。ただし、18次調査SS-113西側畦畔とSS-104西側畦畔には50～100cmのずれがある。

水口は２箇所確認した。西側畦畔中央部の水口は幅約40cm、SS-104側に傾斜する。埋土は上部の①層がオリーブ褐色シルトで、径１㎜前後の白色砂粒と小指先程の不定形炭化物を含む。また、SS-104側の下部には、①層より粘性の強い、②層のオリーブ褐色シルトが堆積する。あるいは、上記した18次調査SS-113西側畦とのずれが、本来畦畔部であった②層を掘りすぎた可能性もある。北側畦畔の東端が幅約60cm途切れ、水口となる。傾斜はSS-111側。埋土は、上部の①層が暗灰黄色シルトで、径１㎜前後の砂粒が混じる。下部の②層は暗灰黄色シルト（図40－６・７）。

[SS-105]

DV・DW45区に位置し、南北約2.2m、東西約５mの広がりを調査区内では確認した。南側18次調査SS-117は、25次調査SS-105・106を併せた東西12m弱の広がりをもつが、25次調査SS-105・106以北でも、水田・畦畔が整然と並び、18次調査SS-117が本来東西に２分されていた可能性を考慮し、25次調査検出の遺構を報告する。

水田面の標高は26.10m前後。東側は幅約60～90cm、比高差３～４cmの畦畔でSS-104と、西側は幅約60cm、比高差約２cmでSS-106と、北側は幅約60cm、比高差約２～３cmの畦畔でSS-112と、それぞれ区画されている。

東側畦畔の水口については、先のSS-104で述べた。一方、北側畦畔は、東端と西寄りに水口がある。前者は幅60cm以上となるが、西側を塹壕で攪乱され詳細不明。後者は幅約30cmで、明確な傾斜をもたない。埋土は、上部の①層が径１㎜前後の砂粒を多く含む黄褐色砂質シルト。SS-112側下部の②層が径１㎜前後の砂粒をごく少量含むオリーブ褐色砂質土（図40－８）。

[SS-106]

SS-106は、DW・DX45区で検出した。南側は、18次調査区SS-117の西半にあたる。調査区内では、南北約2.5m、東西約6.5mを測る。水田面の標高は26.10m前後。東側に幅約60cm、比高差約２cmの畦畔があり、西側は幅詳細不明ながら比高差約４cmの畦畔、北側は幅約90cm、比高差約１～２cmの畦畔で区画されている。

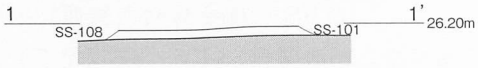
北側畦畔の東端近くに、幅約30cmの水口が開く。傾斜はSS-106側。ただし、水口部付近が全体に窪地状である。埋土は、上部①層が径１㎜前後の砂粒を多く含むオリーブ褐色シルトで、SS-113側下部の②層が砂粒をあまり含まないオリーブ褐色シルト（図40－９）。西側畦畔は、戦前の演習用塹壕の攪乱を挟んで検出し、幅１mを超える一体のものと当初みていたが、南側18次調査SS-117・118間の畦畔が幅40cm程度と狭いことから、水口部分で東西に段差を有する畦畔であったと復元する。なお、北端にも別の水口が開いているが詳細不明。

[SS-107]

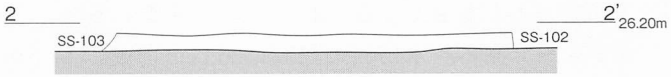
DY45区を中心に調査区南西隅部でSS-107が出土した。調査区内では、東側を幅50cm以上、比高差約５cmの畦畔で、北側を幅約50cm、比高差約５cmの畦畔で区画された、南北約4.5m、東西約3.5mの広がりを確認した。南側18次調査SS-118と同じ水田である。水田面の標高は、26.10m前後。

東側畦畔の水口については既に述べた。北側畦畔の

1：SS-101・108 水口

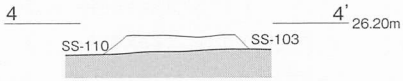


2：SS-102・103 水口

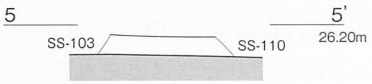


3：SS-102・109 水口

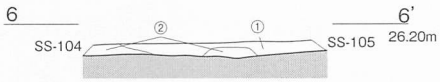
4：SS-103・110 東水口



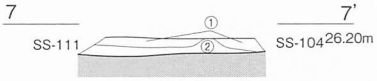
5：SS-103・110 西水口



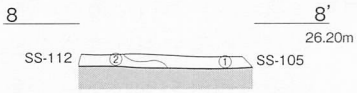
6：SS-104・105 水口



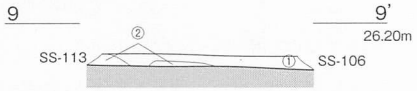
7：SS-104・111 水口



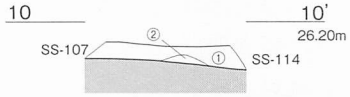
8：SS-105・112 水口



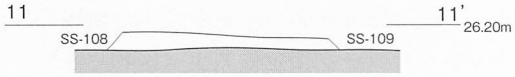
9：SS-106・113 水口



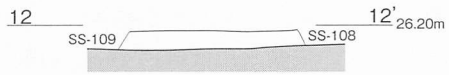
10：SS-107・114 水口



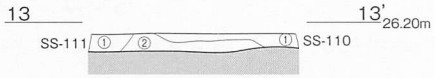
11：SS-108・109 南水口



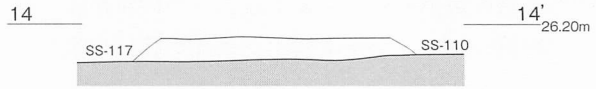
12：SS-108・109 北水口



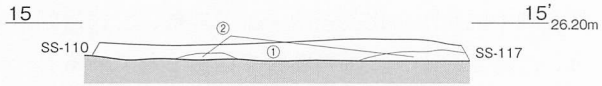
13：SS-110・111 水口



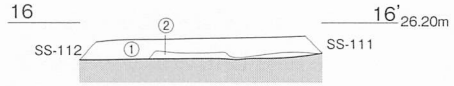
14：SS-110・117 東水口



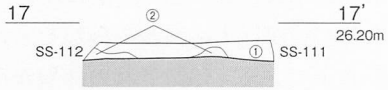
15：SS-110・117 西水口



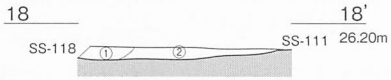
16：SS-111・112 南水口



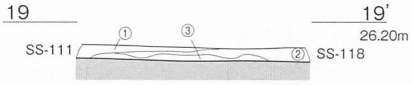
17：SS-111・112 北水口



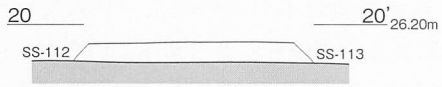
18：SS-111・118 東水口



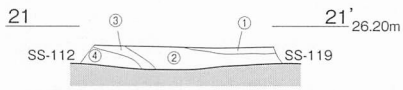
19：SS-111・118 西水口



20：SS-112・113 水口



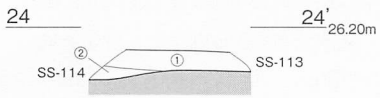
21：SS-112・119 東水口



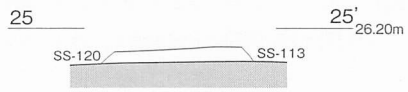
22：SS-112・119 中水口

23：SS-112・119 西水口

24：SS-113・114 水口



25：SS-113・120 東水口



26：SS-113・120 西水口

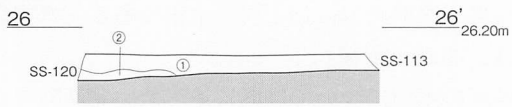


図40　Ⅱ - 2 - ④層（中層水田）に伴う水口部土層図(1)（縮尺1/20）

中央やや東寄りに幅約40cmの水口が開く。SS-114側に大きく傾斜する。埋土は、上部の①層が黄褐色砂質シルトで、径１㎜前後の砂粒が多く混じる。また下部の一部に②層のオリーブ褐色シルトが堆積する（図40－10）。

[SS-133]

最初に述べたように、調査区内最東部は水田面検出幅も狭く、南北を区画する畦畔を明確にできなかった部分もあったため、調査段階では、西側の畦畔以東を一括してSX-132としていたが、微弱ながら畦畔の盛り上がりが西側の水田並びと同じ位置に認められ、それぞれ１枚の水田面と見て、南からSS-133～136とする。ただし、少し掘り下げすぎている。

SS-133は、調査区南東隅部DQ46・47区に位置し、東側は調査区外へと広がる。南側は幅60cm以上、比高差約２cmの畦畔があり、西側は幅約100cm、比高差約３～４cmの畦畔でSS-108と画され、北側は幅約90cm、比高差約３cmの畦畔でSS-134と画され、東西２ｍ以上、南北5.5ｍを測る。水田面の標高は、26.14ｍ前後。

南側畦畔の西端が途切れ幅約60cmの水口となる。18次調査SS-111のさらに東側に想定される水田面からの導水が水口部の傾斜から窺える。

[SS-108]

DR46区を中心に検出した。南側を幅50cm前後、比高差２～３cmの畦畔でSS-101と画し、東側は幅約100cm、比高差２～３cmの畦畔でSS-133と画し、西側は幅50cm前後、比高差約２cmの畦畔でSS-109と画し、北側には幅70cm前後、比高差２～３cmの畦畔があり、SS-115と画されている。結果、水田面の広がりは、東西約6.7ｍ、南北約６ｍを測り、水田面の標高は、26.15ｍ前後とやや高い。ただし、南側のSS-101・102間の畦畔がより東側にあった可能性を想定したことに伴い、SS-108・109間の畦畔が本来はより東側に位置した可能性も考慮される。

東辺の畦畔に水口は確認できなかったが、他は水口が開く。南側畦畔中央部にはSS-101からの導水用の水口が開くが、詳細は既に述べた。西側畦畔には、中央やや南寄りと北端にそれぞれ水口が開く。前者は幅80cm以上で、SS-109側に傾斜する。後者は幅約120cmと広く、やはりSS-109側に傾斜する。埋土は、いずれもオリーブ褐色砂質土で、径１㎜前後の砂粒を含み、シルト質土をラミナ状にやや多く含んで粘性がややある。ただし、前者ではやや砂質が強い（図40－11・12）。北辺の畦畔も東端幅約２ｍが途切れ水口をなすが、ちょうど攪乱が大きく及び、埋土等の詳細は記録していない。

[SS-109]

DS46・47区に位置する。東西約2.5ｍ、南北約６ｍを測る、南北に細長い水田面である。水田面の標高は現状で26.13ｍ前後。先述したように、東側の畦畔がさらに東であった可能性が残り、水田面自体若干掘り下げすぎた可能性もある。

南側は幅約60cm、比高差２～３cmの畦畔でSS-102と画されるが、西端に水口が開く。これについては既に詳細をSS-102で述べた。東側畦畔は幅50cm前後、比高差４～５cmを測り、南北２箇所に水口が開くが、これについても既に述べた。西側は幅70cm前後、比高差約３～４cmの畦畔でSS-110と区画されている。ちょうど中央部に攪乱が及び、その両側で畦畔幅の減少がわずかながらあり、攪乱範囲に水口が存在した可能性がある。北側は幅60cm前後、比高差約３cmの畦畔が一部残るが、東側を掘りすぎたことから水口幅の詳細は不明。また、SS-109水田面が北部で、東側SS-108、北側SS-116とやや段差をもった状態となっており、水田面を掘りすぎた可能性がある。

[SS-110]

DT46・47区を中心に位置し、東西約5.5ｍ、南北約5.5ｍを測る。水田面の標高は26.12ｍ。南側は幅50cm前後、比高差４～５cmの畦畔でSS-103と画され、東側は幅70cm前後、比高差約３～４cmの畦畔でSS-109と区画され、西側は幅60cm前後、比高差約４cmの畦畔がSS-111との間にあり、北側は幅約120cm、比高差２～３cmの畦畔でSS-117と区画されている。なお、北西隅部の畦畔は島状となっている。

各辺畦畔にはそれぞれ水口が開くが、南片と東辺については既に述べた。西辺は北部に幅約150cmの水口が設けられている。一部掘り過ぎた箇所もあるが、SS-111側に傾斜している。埋土は、上部①層が径１㎜前後の砂粒を多く含む黄褐色砂質シルトで、下部の②層が径１㎜前後の砂粒を少量含むオリーブ褐色シルト。あるいは②層が畦畔の一部を構成していた可能性もある（図40－13）。北辺は東西両端が水口となり、いずれもSS-117側に傾斜する。東端水口は幅約90cm。埋土はオリーブ褐色砂質土で、径３㎜以下の砂粒・砂礫を多く含み砂質が強いが、シルト質土も少し混じる。西端水口は幅約60cmで、埋土は上部①層が径１㎜

前後の砂礫を多く含む黄褐色砂質シルトで、SS-117側下部に②層のオリーブ褐色シルトがある（図40－14・15）。

[SS-111]

DU46・47区に位置する。南側は幅約70cm、比高差約４～５cmの畦畔で、東側は幅60cm前後、比高差約５cmの畦畔で画され、東北隅部は島状の畦畔があり、西側を幅80cm前後、比高差約３～４cmの畦畔で、北側を幅約50cm、比高差約２cmの畦畔でそれぞれ画され、東西3.5～3.8m、南北5.5～６mを測る。水田面の標高は、26.14m。

各辺畦畔に水口が開くが、南辺と東辺については、SS-104あるいはSS-110で既に詳述した。西辺は中央部を若干掘りすぎて畦畔をとばしてしまった範囲が大きいが、南端と北端にそれぞれ水口が開く。南端水口は幅約50cmで、SS-112側に傾斜する。埋土は上部に①層の径１㎜前後の白色砂粒を含む黄褐色砂質シルトがあり、SS-111側下部に②層の黄褐色シルトがみられる。北端水口は幅約40cmで、やはりSS-112側に傾斜する。埋土は、上部①層が径１㎜前後の砂粒を含むオリーブ褐色砂質シルトで、下部に②層のオリーブ褐色シルトがある（図40－16・17）。

北辺は、北東部が島状に大きな畦畔部となり、畦畔自体東西1.5m程度で、その両側に水口が開く。東水口は幅約100cmで、SS-118側に明確な傾斜が認められる。埋土は、SS-118側上部に①層の径１㎜前後の砂粒を含むオリーブ褐色砂質シルトがあり、SS-111側下部に②層のオリーブ褐色シルトが堆積する。西水口は幅約90cmで、傾斜は微弱ながらSS-118側。埋土は、SS-111側最上部に①層の、径１㎜前後の砂粒を含む黄褐色シルトがあり、その下SS-118側上部に②層の、径１㎜前後の砂粒を少量含む暗灰黄色シルトがあり、最下部に③層のオリーブ褐色シルトが堆積する（図40－18・19）。

[SS-112]

DV46・47区、DW46・47区にまたがり、東西6.2～6.5m、南北約5.3mを測るが、中央部に戦前の演習用塹壕の攪乱が大きく及んでいる。水田面の標高は、26.10～11m。南側は幅約60cm、比高差約３cmの畦畔でSS-105と画され、東側は幅80cm前後、比高差約４cmの畦畔でSS-111と画され、西側は幅約60cm、比高差約４cmの畦畔でSS-113と画され、そして北側は幅50～70cm、比高差約４cmの畦畔でSS-119と画されている。

南辺と東辺の水口部については既に詳細を触れた。西畦畔には、中央やや北寄りに水口が開く。幅約40cm。SS-113側に傾斜する。埋土はオリーブ褐色砂質土で、２㎜以下の砂粒を多く含み、砂質が強い。ただしシルト質土もやや含み、しまりがある（図40－20）。

北畦畔は断続的で、東・中・西の３箇所に水口が開く。東水口は西側に攪乱が及び、幅の詳細不明。埋土は、SS-119側最上部に①層のオリーブ褐色シルトがあり、その下に、径１㎜前後の砂粒と不定形な炭化物を含む黄褐色シルト（②層）、径１㎜前後の砂粒を多く含む黄褐色砂質土（③層）、そして②層と同じ黄褐色シルト（④層）が堆積する。中水口は幅約60cm、底面の傾斜はSS-112側。埋土はオリーブ褐色砂質土で、径２㎜以下の砂粒を多く含み、シルト質土の混在は少なく、砂質が強い。西水口は幅約60cmで、SS-119側に傾斜する。埋土は中水口部と同じオリーブ褐色砂質土ながら、シルト質土をやや含み、しまりもややある（図40－21～23）。

[SS-113]

DW46・47区、DX46・47区にまたがり、中央部に戦前の演習用塹壕の攪乱が大きく残るが、東西約６m、南北約5.5mを測る。南側は幅約90cm、比高差約２cmの畦畔でSS-106と画され、東側は幅約60cm、比高差４～５cmの畦畔でSS-112と画され、西側は幅60cm前後、比高差約４cmの畦畔でSS-114と画され、そして北側は幅50～70cm、比高差３～４cmの畦畔でSS-120と画されている。水田面の標高は26.10m前後。

各辺畦畔には水口が開くが、南畦畔についてはSS-106で、東畦畔についてはSS-112で既に述べた。西畦畔は、南隅部でSS-107との水口をなすとみられるが、攪乱により詳細は不明。また、中央部にSS-114との水口が開く。幅30cm弱でSS-114側に傾斜する。埋土は、上部に①層の黄褐色砂質シルトがあり、径１～２㎜の砂粒が多く混じる。また、SS-114側下部には、②層のオリーブ褐色シルトがみられる（図40－24）。北畦畔も東西両端が水口をなす。東水口は幅40cm以上で、SS-120側に傾斜する。埋土は、径２㎜以下の砂粒を多く、シルト質土を少し含んで砂質が強いオリーブ褐色砂質土。西水口は幅約30cm。SS-120側に大きく傾斜する。埋土は、上部に①層の、径１㎜前後の砂粒を多く含む黄褐色砂質シルトがあり、SS-120側下部に②層のオリーブ褐色シルトが堆積する（図40－25・26）。

[SS-114]

DX・DY47区にあり、東西3.5m、南北4.5mを測り、水田面の標高は26.08m前後。南側SS-107との間には幅約50cm、比高差約７cmの畦畔、東側SS-113との間には幅60cm前後、比高差５cm前後の畦畔、西側SS-137との間には幅60cm前後、比高差約３cmの畦畔、北側SS-121との間には幅60cm前後、比高差約６cmの畦畔でそれぞれ区画されている。

南側と東側の畦畔にはそれぞれ１箇所水口が開くが、これらは既に詳細を述べている。一方、西畦畔は北半に認められるが、その南端に攪乱が及ぶため、水口が存在することは確実ながら、詳細不明。SS-137側に導水していたと推測できる。また、北畦畔には水口が開かない。

[SS-137]

調査区東端と同じく、西端も狭い範囲での水田面検出から、調査時には南北に通してSS-131と一括していた。しかし、東側の水田並びから推して、同様の並びが存在した可能性が高いとして、南からSS-137～139として報告することとした。

SS-137は、SS-114の西に隣接する。調査範囲内で認めた広がりは、東西幅30cm前後にすぎない。水田面の標高は26.06m。幅60cm前後、比高差約４cmの畦畔でSS-114と画され、南側には水口が存在したとみられる。一方、北側のSS-138との間の畦畔は調査範囲内では認められず、東端が水口部に相当するとみられる。

[SS-134]

調査区東辺、DQ47・48区に位置し、東側は調査区外へと広がる。調査範囲内で検出した広がりは、東西1.5～1.8m、南北4.3m、水田面の標高は26.14m前後だが、やや掘り下げすぎている。南側は幅60cm以上、比高差約３cmの畦畔、西側は幅約80cm、比高差約５cmの畦畔、北側は幅約50cm、比高差約１cmの微弱な高まりでそれぞれ区画されている。

水口は、西畦畔北端で幅約30cm、傾斜はほとんどない。埋土は、SS-115側上部の①層が、径１㎜以下の砂粒を多く含み砂質が強いオリーブ褐色砂質土。そして、SS-134側下部に②層の、径１㎜以下の砂粒を少量含み、シルト質が強く、ややしまりのあるオリーブ褐色砂質土がある。鉄・マンガン分の沈着もみられる。あるいは、②層が畦畔部の可能性もある（図41－27）。

[SS-115]

DR47区を中心に広がり、東辺約4.5m、西辺約3.7m、東西約5.8mを測る台形状。水田面の標高は26.15m前後と、南側のSS-108とともに東西両側より高い。南側SS-108との間には、幅70cm前後、比高差約５cmの畦畔、東側SS-134との間には幅約80cm、比高差約５cmの畦畔、西側SS-116とは幅約40cm、比高差約２cmの畦畔で、北側SS-122とは幅50～80cm、比高差２～４cmの畦畔で、それぞれ画されている。

東畦畔北端、南畦畔東端にはそれぞれ水口が開くが、これらについては既に述べた。西畦畔南半は掘りすぎたため、水口の詳細は不明。北畦畔には東西両側に水口が開く。東水口は幅約40cmでSS-122側に傾斜する。埋土はオリーブ褐色シルトで、径１㎜以下の砂粒を含み砂質が強いが、シルト質土もやや多く含む。西水口は幅約50cmで、やはりSS-122側に傾斜する。埋土は、オリーブ褐色砂質土で、径２㎜以下の砂粒を多く含み砂質が強く、シルト質土を少し含む（図41－28・29）。

[SS-116]

DS47・48区に位置し、東西約2.5m、南北約3.8mを測る。水田面南半はやや掘りすぎた可能性が高く、本来の水田面標高は26.15m弱。南側は幅60cm前後、比高差約２cmの畦畔が一部残るが、詳細不明。東側は北半に幅約40cm、比高差２～３cmの畦畔があり、西側も北半に幅約60cm、比高差１cm弱の畦畔があり、北側には東半に幅約40cm、比高差約３cmの畦畔が残るが、西半は微弱な幅50cm程度の高まりがある。南側のSS-102・109とともに、平面検出・掘り下げにおいて異なった可能性が残る。水口も、南北に想定されるが詳細不明。

[SS-117]

DS47・48区、DT47・48区に位置し、東辺約3.5m、西辺約4.5m、東西約７mを測る台形状。水田面の標高は26.11m弱。南側を幅約120cm、比高差約３cmの畦畔でSS-110と、東側を幅約40cm、比高差約３cmの畦畔でSS-116と、西側は幅60～80cm、比高差約１cmの畦畔でSS-118と、そして北側は幅約50cm、比高差約１cmの畦畔でSS-124と画されている。

東畦畔の水口は詳細不明。SS-110との南畦畔の水口は記述済み。西畦畔は南端に水口が開く。幅約50cmで、SS-118側に傾斜。埋土は、上部の①層が黄褐色砂質シルトで、径１㎜前後の砂粒を多く含む。また下部の②

層はオリーブ褐色シルトで、砂粒をほとんど含まない（図41－30）。

[SS-118]

DU47・48区に位置し、南側を幅約50cm、比高差約３cmの畦畔で、東側を幅60～80cm、比高差約２cmの畦畔で、西側を幅約40cm、比高差４～５cmの畦畔で、そして北側を幅60cm前後、比高差１～２cmの畦畔でそれぞれ区画されている。結果、東西約3.5m、南北約4.2mを測り、水田面の標高26.09～26.10m。

南畦畔の東西水口はSS-111で、東畦畔の南端水口についてはSS-117で、既に述べた。西畦畔にも北端近くに、幅約70cmの水口が開く。底面はほとんど水平。埋土は、上部に部分的に、①層の径１mmの砂粒を多く含む黄褐色砂質土があり、下部に②層のオリーブ褐色シルトが堆積する（図41－31）。北畦畔は東西両端が水口として開く。東端水口は幅約60cmで、大きくSS-125側に傾斜する。埋土はオリーブ褐色シルトで、明黄褐色シルトの丸いブロックを少量含み、径１mm前後の砂粒と不定形炭化物を含む。西端水口は幅約100cmと広く、わずかにSS-125側に傾斜する。埋土はオリーブ褐色砂質土。一部明黄褐色で、径１mm前後の砂粒を少量含む（図41－32・33）。

[SS-119]

DV48区を中心に位置し、北辺約4.8m、南辺約6.2m、南北５～5.5mの台形状を呈する。水田面の標高は26.09m前後。南側は幅50～70cm、比高差約４cmの畦畔でSS-112と、東側は幅約40cm、比高差４～５cmの畦畔でSS-118と、西側は幅約70cm、比高差約１cmの畦畔でSS-120と、そして北側は幅70～80cm、比高差２cm弱の畦畔でSS-126と、それぞれ区画されている。

南と東の畦畔の水口については既に述べている。西畦畔にも、南端と北寄りの２箇所に水口が開く。南端水口は幅約50cmで、SS-120側に傾斜する。埋土はオリーブ褐色砂質土で、径２mm以下の砂粒をやや含み、シルト質土の混じりがやや多い。北水口は幅約70cmで、やはりSS-120側に傾斜し、埋土は上部の①層がオリーブ褐色シルトで、径１mm前後の砂粒を含む。そしてSS-120側下部に②層のオリーブ褐色シルトが堆積する。あるいは、②層が畦畔を構成していた可能性もある（図41－34・35）。

[SS-120]

DW・DX48区を中心に位置し、東辺約5.3m、西辺約5.8m、東西5.4mの台形状を呈する。水田面の標高は、26.06m前後。南側SS-113とは幅50～70cm、比高差５～６cmの畦畔で、東側SS-119とは幅約70cm、比高差約５cmの畦畔で、西側SS-121とは幅約50cm、比高差約３cmの畦畔で、北側SS-127とは幅約60cm、比高差約３cmの畦畔で、それぞれ区画されている。

南畦畔と東畦畔の各２箇所の水口については、既に述べた。西畦畔にも３箇所水口が開く。南端の水口は幅約150cmで、傾斜はほとんどない。埋土は、上部の①層が黄褐色砂質シルトで、径１mm前後の砂粒を多く含む。下部の②層はオリーブ褐色シルト。中央部の中水口は幅約80cm。わずかながらSS-120側に傾斜する。埋土は、上部の①層が径１mm前後の砂粒が多く混じるオリーブ褐色シルト。SS-120側下部の②層がオリーブ褐色シルトである。そして、北水口は幅30cm前後で、北側SS-128へも通じ、東西方向はSS-120側に傾斜する。埋土は暗灰黄色シルトで、径１mm前後の砂粒を多く含む（図41－36～38）。

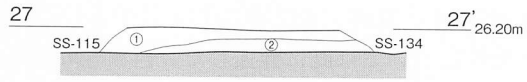
[SS-121]

DX48・49区、DY48・49区にまたがり、東西約4.5m、南北６mを測る。水田面の標高は26.05～26.06m。南側を幅60cm前後、比高差約７cmの畦畔でSS-114と画され、東側は幅約50cm、比高差約４～５cmの畦畔がSS-120との間にあり、西側SS-138との間には幅50cm前後、比高差約４cmの畦畔が断続的にあり、北側は幅約70cm、比高差２～３cmの畦畔でSS-128と画されている。

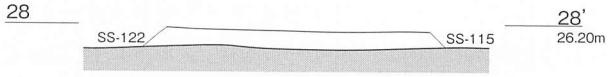
南畦畔には水口が開かない。東畦畔には３箇所水口が開くが、これについては既に述べた。北畦畔には、３箇所に水口を確認しており、西端も水口が開いていた可能性がある。東端はSS-120・121・128を繋いでおり、東西幅約80cm。SS-128側に傾斜し、上部に①層の径１mm前後の砂粒を多く含む暗灰黄色シルトがあり、下部に②層の暗灰黄色シルトが堆積する。上部①層がSS-120・121北端水口埋土に共通しており、②層が畦畔の一部で、東西方向には水口が開いていなかった可能性も残る（図41－39）。北畦畔中央部東水口は幅約30cm。同西水口は幅約20cm。いずれもSS-128側に傾斜し、埋土も共通。上部の①層がオリーブ褐色シルトで、径１mm前後の砂粒を含む。下部の②層はオリーブ褐色シルト（図41－40・41）。

西畦畔は断続的で、４つの水口が開き、南から南端、中南、中、北水口とする。南端水口は幅約60cm。中南水口は幅約30cm。中水口は幅約80cm。北水口は南部に攪乱が及び、幅70cm以上。埋土は、上部①層が共通し、

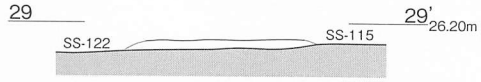
27：SS-134・115 水口



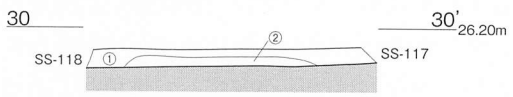
28：SS-115・122 東水口



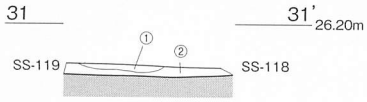
29：SS-115・122 西水口



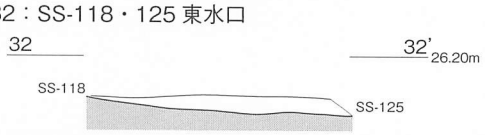
30：SS-117・118 水口



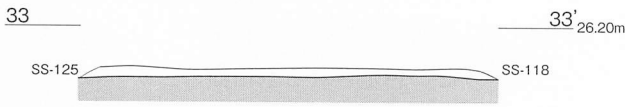
31：SS-118・119 水口



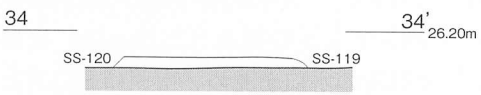
32：SS-118・125 東水口



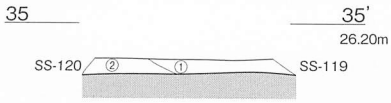
33：SS-118・125 西水口



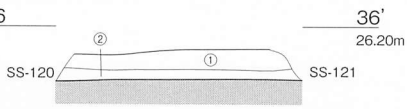
34：SS-119・120 南水口



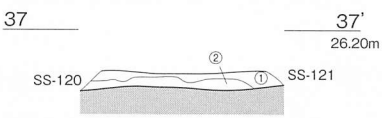
35：SS-119・120 北水口



36：SS-120・121 南水口

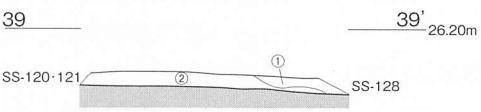


37：SS-120・121 中水口

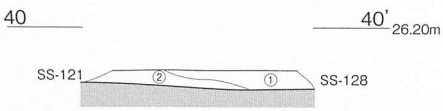


38：SS-120・121 北水口

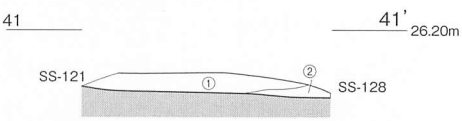
39：SS-120・121・128 西水口



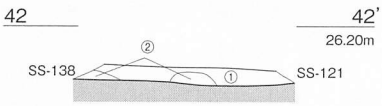
40：SS-121・128 東水口



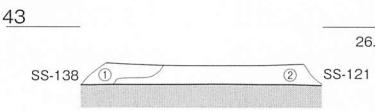
41：SS-121・128 中水口



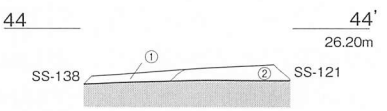
42：SS-121・138 南端水口



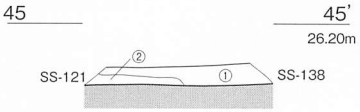
43：SS-121・138 中南水口



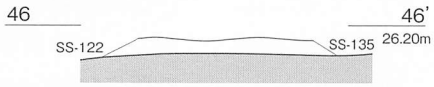
44：SS-121・138 中水口



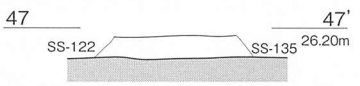
45：SS-121・138 北水口



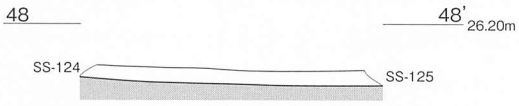
46：SS-135・122 南水口



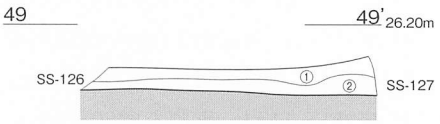
47：SS-135・122 北水口



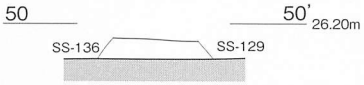
48：SS-124・125 水口



49：SS-126・127 水口



50：SS-136・129 水口



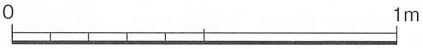


図41　Ⅱ－2－④層（中層水田）に伴う水口部土層図(2)（縮尺1/20）